

明治四十年十二月二十五日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾九號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十九號目次

論 說

- 明代の文僧……………赤井直好
- トルストイの「アンナ、カレンナ」……………豊 卷 剛
- ……………一、三、乙
- 煩悶論……………一、二、甲 高木友三郎

雜 錄

- 枕草紙を讀む……………一、三、甲 あいぞう
- 悲しみて心身病まざる法(一)……………一、二、甲 極樂 蜻蛉
- ……………
- 爐邊閑談……………一、三、甲 おくづみ
- 跋坂元子龍詩後……………赤井直好
- うら枯……………其 月
- 四高俳句會席上吟……………

文 苑

北辰會雜誌第四十九號

論 說

明代の文僧

赤井直好

余は緇流にあらざれば、桑門の消息に就きては、毫も知るところなきのみならず、其典籍に就きても、未だ研鑽を経ざるところなれば、所謂一乘の妙法、醍醐の滋味に至りては、固より之を説くべき資格を有せず、又強て之を説かむとするものにもあらず、されどかの法堂の上、禪榻の下にありて、拈錘の手に接し、提唱の聲を聴く時は、たとひ其法味を解すること能はずとするも、亦多少妄念を打却し、忘機の感を抱くとなきにあらざるが如く、世事糾紛、心身俱に倦める時にあたりて、疎簾淨几の間、叢林鉅匠の手に成れる家乗を取りて、之を讀む時は、冷雋の氣、澹遠の情、自ら胸裡に溢れ、神骨復立つを覺ゆるものなきにあらず、今明代の文僧を叙し、其文辭を品題せむと欲するものも、また聊か風塵寰裡に於ける一服の清涼劑たるを欲するのみならず、叢林中にありても、此等文豪の存するありて、支那文學史中の一部を形成すべきものたるを見さむと欲するにあるのみ。

時 評

- 花 野……………
- 未枯集……………
- 東洋の運命を論ず……………△ ○ 生
- 學界時言……………富田 水月
- 圖書室へ……………か た し

雜 報

- 野球部に寄す○校歌集○第十九回卒業式○叙任辭令○北辰會委員○代議員○圖書室増加書目録○寄贈雜誌……………

部 報

- 演說部報○講話部報○劍道部報○野球部報……………

附 録

- 白馬山登山記……………和井 景生
- 風月集……………山下 嵐月
- 三十九年度北辰會費決定計算書……………

由來我國にありて古文をいふもの、概ね儒術に本據し内典に及ぶものなかりき、是れ時勢の然らしめしところにして、亦已むを得ざるところなりしも、維新以來、思想の係縛は脱去せられ、自由の天地は開かれたるを以て、さきに異端を以て、目せられたるもの、今は之を學ぶに於て、何等の支障の認むべきものなく、却て自己思想を豊富ならしむる一手段として、其思想を討究し、其文辭を誦讀するもの日に多きを加ふるに至れり、今古來釋氏經卷中にありて、其文辭の博大深妙なるを以て稱せらるるものを求むるに、圓覺、楞嚴、維摩、華嚴、諸經の如き莊周、列禦寇の書と並び馳せ、鬼谷、淮南の二子に勝ること遠しと稱せられ、儒林にありても、之を愛誦するもの多く、柳々州、蘇東坡の若き、其文辭の之に負ふもの頗る多きを見る、唯叢林にありては、由來重を教理の尋釋に置き、肯て文字を立てざりしを以て、古文の研究に従事せしもの少なかりしも、亦範を諸經に取り、情を翰墨に寄するものなきにわらず、明の宋潛溪が水雲亭小稿序中に、宋代に於ける文僧を叙していへるあり、曰く、

近代の尊宿、明教の嵩、寶覺の洪、北磻の簡、無文の榮の如きに至りては、宗を弘め、教を樹て、文辭を作爲し、其書家に滿つること、殆ど一二を以て數ふべからざるなり、

と、げにや、鐔津(契嵩)には鐔津文集あり、筆力雄偉、議論博辨、好て闢佛者と抗論しぬ、覺範(惠洪)には石門文字禪あり、其才異雋、其文輕秀、禪と文字との一致を唱へたり、北磻(居簡)に北磻集あり、格意清俊、蔬筍の氣あれども、鐔津、覺範の間にありて、未だ遽に遜色あるを見ず、無文(道燦)に無文印あり、才地稍弱きも、簡遠雅潔、用工の深き、却て前諸人に優れるものあり、

其他孤山に閑居篇あり、大觀に物初謔語あり、元に至りて、圓至に牧潛集あり、笑隱に蒲室集あり、中峯に中峯廣錄あり、月磻に月磻別稿あり、紀曉嵐之を評して曰く、

六代以來、僧の古文を能くする者、數々見ず、契嵩、惠洪は之を能くすれども、而も亦専門にあらず、圓至は獨刻意して古文を作り、其曹偶を出づ、と、又笑隱をも評して曰く、

其顯教院記、佛光大師塔銘は、並に趙孟頫に代りて作りしもの、是れ當代の勝流も亦或は手を假れり、俗衲にわらざるを知るべし、

と、明に至りて、圓菴、紫柏、憨山、雲棲、靈峰、鼓山等あり、其我國に來りしものには、隱元、卽非、木菴、高泉、獨湛、南源等あり、いづれも佛界に於ける碩徳たるのみならず、又文壇に於ける傑物にして、其著作は其道徳と俱に、實に千載に光輝あるものなり、

以上はたゞ明代の文僧を叙するに先だちて、明以前に於ける叢林作家の一般を述べたるのみ、而もまた本題に入るに先だちて、明代に於ける古文の概況と、其價値と、明代僧徒の文は、明代古文の中にありて、如何なる地位を有するものなるかを見ざるべからず、請ふ姑く余をして明代に於ける古文の概況を語らしめよ、

明代二百七十餘年の間、文運蔚然、作家林の如く、誠に其盛を極めたりといへども、其規模に至りては、概して古法型鑄中のものにして、之を前代に比すれば、狭小なりといはざるべからず、されど其種類變化の夥しきに至りては、前代罕に見るところなりとす、いま或は複重の嫌なきに

あらざれども、(一)全牀の觀察、(二)流派の区分、(三)文派の起伏の三項に分ちて之を略説せむとす、

(一)全牀の上より見るときは、之を三期に分つことを得、

一、國初は開國昌新の氣運に乗して、醇深雅健の文を遣りしもの多く、以て一代文運の先驅をなせり、

二、中葉は、嘉靖より萬曆に至る、凡そ百年間をいひ、諸派交起り、各其旗幟を樹て、以て相陵轢せし時代にして、明代文學の極盛時代とす、

三、末季は國運の衰微に際し、人々滄桑の感を抱きしを以て、悲憤激越、概ね變調を呈せり、

(二)流派の上より見るときは、之を四派に分つことを得、

一、唐宋派、此派に屬するものは、之を始にして宋潛溪あり、之を中にしては王陽明あり、之を終にしては歸震川あり、主として古文の正脈を奉するものなり、

二、修辭派、此派を唱道したるものは、李空同、何信陽にして、其聲を大ならしめたるものは、李滄溟、王弇州なり、彼等は所謂復古を標榜し、文は秦漢以上を採り、徒らに摸擬剽竊をこれ事とせしもの、我物徂徠が奉せし古文辭とは即ち是れなり、

三、袁鐘派、袁鐘派とは、袁公安、鐘伯敬の派にして、公安は清真を尙び、伯敬は幽峭を愛し、秦漢唐宋以外、別に一機軸を出し、文致頗微細緻密なるものあり、只其俚率に流れ、諧謔に陥れるもの、これ其瑕疵なるのみ、

四、明季派、明季派は候朝宗、魏叔子等を其主なるものとし、國冢衰亡の時に際し、義を守り

て屈せざりしものなれば、其文自ら悲壯慷慨、跌宕淋漓、宋文にあらず、明文にあらず、又一種の變調をなせるものなり、

(三)文派起伏の上より、詳密に之を見るときは、大凡そ六變せるものあるが如し、

一、國初太祖の文教を振興せしより、宋潛溪は韓蘇を主として、醇深演迤なる筆を揮ひ、以て有明一代の冠冕となり、劉青田は王半山より出てたるもの、如く、闊深肅括なる文を作りて、以て創勦の氣運を扶け、其他、王華川が醇朴にして宏肆なる、歐會に瓣香して、北宋の遺風ありと稱せられ、方正學が縱橫豪放なる、正に東坡龍川の間より出てたるなるべく、此等唐宋の矩度を奉する諸人を一團としたるものは、實に明初開國の文潮なりしなり、

二、永徳宣徳の際に至り、開國の氣運を去りて、漸く守成に傾くと共に、楊東里は平正紆餘の文を以て、臺閣體を創め、之に附和するもの、氣牀日に弱く、又見るべきものなきに至れり、唯陳白沙の若き數人ありといへども、寧、道學を以て稱せらるゝのみ、是れ其第一變なり、

三、弘治正徳の際、李茶陵出て、臺閣牀の徒に平板に陥るを憂ひ、宋元に入し、唐代に溯流し、一に氣運の挽回を圖り、文柄を持すること三十餘年なりしかば、漸く復古の傾向を醸生するに至れり、これ其第二變なり、

四、同時李空同は茶陵の文を以て、なほ氣力に乏しきものありとなし、更に復古の説を唱へ、何信陽等と共に之を主張せしかは、天下翕然として之を宗とせしが、嘉靖の際に至りて、更に李滄溟、王弇州の出つるあり、盛に李何の説に和倡し、古句を剽竊して、綴合文をなし、贅牙艱

澁、殆ど句すべからざるに至れり、是れ其第三變なり、

而も此間にありて、唐宋の矩矱を守り、かの復古派に對抗せしもの、之を先にしては王陽明あり、蘇老泉に淵源し、博大昌明を以て、時流の外に超然たり、之を後にしては、王遵岩、唐荆川、頗る後れて歸震川あり、遵岩、荆川の二人は歐會を宗とし、震川は司馬子長、歐陽永叔を學び、古文の正傳を待たりと稱せらる、共に力めて李王を排撃せしが、兪川始めは痛く之に抗したれども、晩年遂に悟りて震川に心折し、復古派の勢焰漸く衰ふるに至れり、

五、たとへ兪川は豁然大悟するところありとはいへ、李王の餘弊は滔々としてなほ止まず、其末流漸く僞躰を成すに至りしかば、徐文長、袁中郎、陶元篔等、其弊に乗して、大に清真を唱へ、鍾伯敬、譚友夏等又幽峭を唱へて、以て達意を主とし、秦漢に倣はず、唐宋に従はず、別に一派を立て、以て古文辭を駁撃せしも、たまたま、俚率に流るゝを免かれざりき、是れ其第四變なり、

六、かくて明季天啓崇禎の際にあたりて、袁鍾蕪靡の弊に懲り、之を矯めんと欲し、北宋の矩度を探り、王唐歸三氏の後を承けて起りしものは、錢牧齋、艾南英の輩にして、東漢の芳華を擷み、古文辭派の餘流を承けて、時弊を矯めむとせしものは、張天如、陳人中の徒なり、是を其第五變となす、

七、明末より清初に在りて、親しく明社の覆墜を見、義憤の情に堪へず、之を筆墨に發して、悲壯感慨の致を極めしものは、侯朝宗、魏氷叔の文なり、朝宗の文は豪爽雅悍にして、東坡以後

の一人と稱せられ、氷叔の文は凌厲雄健、左傳老泉に得るところ多く、縱橫家の風ありと稱せらる、其の他、氷叔の兄弟、李元仲、彭躬菴、廖柴舟の徒、皆這種の文を草し、盛に自己の胸臆を披瀝せり、而も其の文情に激するところ自ら法度の外に逸し、未だ遽に唐宋古文の正調を以て見るべからざるものあり、是を其の第六變となし、かくの如くにして清朝に移り、其の文連の先驅となれり、

之を要するに、明文は其種類の多様な点に於て、其起伏の凹凸ある点に於て、其起伏の間に於ける矯弊の主義に於て、多少の研究の趣味を惹起するのみならず、唐宋派と修辭派とは、其内容外形を異にするものありといへども、均しく復古的趨向の中にあるものなれば、古文の正傳を研究する階梯として、唐宋派を必要とするが如く、かの修辭派の奇偉博麗なる状態を究むるは、亦修辭學上に於ける文學的要件たらずむばわらざるなり、加之、袁鍾派に至りては、從來の古文と其性質を異にし、大に洗滌恣肆、精細縝密なるところあるを以て、現代にありては漢文を以て複雑なる心情を寫さんと欲するものは、須く唐宋八家以外、別に袁鍾一派の存するものあるを忘るべからず、若し夫れ明季派に至りては、我維新の際、或は之を好みしものありしも、是れ世態の然らしめしところにして、本變調に屬するものなれば、古文の正躰として、之を學ぶべからざるに似たり、但、豪壯雄健なる漢學的精神を養はむと欲するものには好個の文字たるを失はざるなり、

翻て彼の明代に於ける文僧を見るに、此等諸派の中に就て、孰れに屬すべきものなるか、余は

進て其唐宋派に屬するものたるをいふに於て躊躇せざるなり、而も彼等が實に古文辭熾盛の世にありて、毫も其餘毒に染まらず、超然として古文の正傳を守れるもの、其縉流に於ける砥柱として徳風一世に高かりしの致すところたるを見て、健美に堪へざるものなり、

(未完)

トルストイの「アンナ、カレンナ」

豊 卷 剛

「詩を以て文學の第一義なりとせば露國未だ一人の大詩人無し、唯現時最も廣く、最も自然的なる想像上の文學に於ては今日露國の獨舞臺なり」と、彼國の小説を繙くものは何人もかくの如き感を抱くべし。實に露西亞の國情と、スラブ民族の特性とを見るに、詩歌の對象たらんには餘りに怪異深大にして韻律的詩歌の色彩に乏しく、謳歌の材料たらずして却て人性研究の好資料たり。プーシキンを先驅として現れし露國文壇の曙光は、レルモントフ、ゴーゴリーの諸家に依りて漸く改新の域に嚮ひ、ツルゲネーフ、トルストイ、ドストイフスキー、ゴルキー等相繼ぎて現るゝに及びて嚴然たる新時代の地歩を占むるに至れり。徒らに謳歌せず、徒らに歎美せず、深刻犀利なる觀察に加ふるに明決溫籍なる理解と同情とを以てし、深く人性の内奥を研窺せんと努めたるは彼等が一貫せる態度なり。ツルゲネーフの「親子」「煙」の如き、ドストイフスキーの「哀なる人々」「罪と罰」の如き、トルストイの「アンナ、カレンナ」「復活」の如きゴルキーの「フ

ーマー、ゴルダイフ」の如き、諸家その特色とする所ありと雖も、各自その意向に拘束せられず、作爲的觀念の奴隸たらずして、一個靈妙なる自覺的意識の上に立ち、内面より外面より深く人生の秘奥を解釋して、スラブ民族、否少くとも露西亞民族の特性を發揮したる点に於て殆んど同一轍也。マシウ、アーノルド氏が「The Russian novelist is the master of a spell to which the secrets of human nature — both what is external and what is internal, gesture and manner no less than thought and feeling — willingly make themselves known.」と評せるは首肯し得べき言也。氏は尙露國文學者が事物を描寫する態度を論じて曰く、「The Russian does not assuage his sensitiveness in this fashion. The Russian man of letters does not make Nature say: 'The Russian is my best race.' He finds relief to his sensitiveness in letting his perceptions have perfectly free play, and in recording their reports with perfect fidelity」と、宜也人物の性格を叙して一々その個性を辨別し、人格變換の順序と、心機轉變の跡を叙して徑行の極めて自然的なるもの、むしろ吾人の驚異すべきものあり。例へば常に活達驕奢なる交際場裡の貴族をうつせるにても、ネフリエードフの性格と、ウロンスキーの性格とは酷似せるが如くにて、其の實甚異れり、これと等しく同じ沈鬱冥想的なる大學生をうつせるにても、ラスコルニコフの性格と、ポクロウスキーの性格とは似かよへる點あるが如くにて、しかも甚だ異れり。是れ僅か一二の例に過ぎざれども、讀過の際吾人の最も痛切に感ずるは彼等の嚴肅端正なる研究的態度と、深酷精緻なる觀察の結果となり。ツルゲネーフの織麗にして沈痛なる、ドストイフスキーの深刻にして溫藉なる、ゴルキーの酷烈明快なる、

皆端肅なる人性攷窮の結果に依らずんばならず。されど彼等尙短所有り長所あり、透徹せざるあり透徹し過ぎたるあり、而して此等短所と長所とを相補足して博大深痛なるは即ちトルストイ也。惆悵の心に觸れてしかも惆悵ならず、寂寥の心に響いてしかも寂寥ならざる崇高雄大の相は、翁が作中何れの所にか究め得ざらんや、實に「アンナ、カレンナ」の如きはその醇乎の醇乎たるものなり。「アンナ、カレンナ」を以て十九世紀文學の最大傑作なりとなすもの已に二三の先覺者あり、予輩敢て先人の後蹤を追ふとに非らず。たゞその感知する所によりて之が考覈を試むる亦可ならん乎。

小説「アンナ、カレンナ」はト翁が作中「戦争と平和」に次ぐ一大長篇にして、一八七三年より同七六年（翁は此時三十八歳に至りて完結せるものなり。此れ實に翁が文學者としての最高潮時代の所産にして、富贍なる多年の経験と、圓熟老練なる筆致並びに強大なる思想とは翁をして此の一大雄篇を爲さしめたる所以也。翁の代表的作物としてマッシュウ、アトナルド氏は「アンナ、カレンナ」をあげ、これ「復活」の顯れたる今日に於ても尙は妥當の言たるを失はず。そが藝術的價値より論ずるも、將たまた翁が人格の一致てふ点より論ずるも、是れ正に當然の事なるべし。

「アンナ、カレンナ」は材を露國上流の貴族社會にとり、暗黒なる貴族生活の一面を描寫したるものなり。アンナと稱する一貴婦人が貴族の一青年士官に誘惑せられて姦通の罪を冒し、漸次墮落の淵に沈み行く心理的傾向を、銳利なる觀察と、強大なる思想とをもて、最も深刻に、最も自然的に描寫せるものにして、卷頭にかゝげたる題辭

Vengeance is Mine, I will repay.

なる句は能く此作物の精神を表白せるものなり。乞ふ予輩をして少しくその梗概を語らしめよ。

カレンナ夫人アンナは彼得堡の高等官アレキセイ、アレキサンドロイチ、カレニンの夫人にして年齒正に二十六七、性質極めて活達にして、花の如き彼得堡の交際社會に出入し、専ら上流貴族と交遊せる身の、その高尚優美なる容姿は已に夫あり子ある程の婦人とは思はれず。アンナの夫カレニンは温厚清廉なる君子的人物、人品爛雅なるに非ずと雖も、身一点の虚飾なく、剛直寛宏なる摸範的紳士なるが年齢已に五十を越え、頭禿げ、耳長く、容貌寧ろ醜し。アンナの彼に嫁したるは今より凡そ八年前、カレニンが某地方の知事たりし時アンナの叔母なる人の計ひによりアンナは彼と婚したるなり。かゝる可憐の少女が一点の愛情もなくして、年齢太だ相違せる夫にかしづき、未だ夫に對する不満と、單調無意義なる家庭の寂寞とを感ずるに暇あらずして、何時しか母てふ甚大なる責務を帯ぶるに至り、幸にして何等の刺戟もなく、何等の破綻もなくして、外見上極めて平穩無事なる家庭を造り來れりと雖も、しかも渠女が天然無垢なる愛情の萌芽が何時しか冷酷無慈悲なる運命の手に一摘し去られたる也。ここにアンナの兄にステツヘン、アルカデイツィチ、オブロンスキと稱する性質頗るアンナに似て、快活呑氣なる青年紳士なり。ドローと稱する可憐なる妻とふとしたる事より夫婦争ひをなし、一家の紛れは數日に亘りて解けず、アンナは兄の依頼により莫斯科に來り、この破瀾を和解せんとす、果してアンナの來るや一家は春風の駘蕩に浴せるが如く、忽ち元の平和の家庭となる。しかるにアンナは莫斯科滞在中一夜同

地の夜會に臨み、ウロンスキーと稱する青年貴族と舞踏して戀せられ、兩人は遂に激烈なる戀の渦中に陥り、その莫斯科を去らんとするや渠女は果敢なき自己の運命を浩歎し、またウロンスキーと邂逅するの期なからん事を期せり。渠女は實にウロンスキーの己を遂て同一の列車に投じたるを知らざりし也。

場面は此處に一轉してレウインと稱する翁其儘の性格の人物を出す。性頗る沈鬱、冥想、退隱的にして、自家の觀念強く、紛々たる都市の生活を厭うて遠く田園に去り、家畜を飼養し、農作をなし、農事の改良、小作人の改善を致へ、傍ら讀書述作に耽けり。かくレウインの生活は寂寞なれども多忙の生活なりき。レウインの尙大學に在りし頃シオルバトスキー公爵の嗣子とは同窓の友にして、親交厚く、數々その家庭に出入して嚮々たる和氣の中に夢の如き歡樂を盡せり。彼は莫斯科の門閥に生れ幼にして母を失ひ唯一人年齢の甚相違せる姉あるのみ、されは彼は何時しか公爵家の家族、殊に婦人達とは親しき間柄となり、最初公爵家の長女ドーリーを戀したるが渠女は間もなく法官オブロンスキーに嫁したればレウインが戀は果敢なくも破られぬ。次に次女ナザリーを戀し、ナザリーは外交官ルヴォに嫁したれば彼が戀は再びならず、その大學を卒業せる時は三女キッチーは尙幼弱なり、而して後幾何もなくして公爵嗣子は海軍に職を奉ずる身となり、バルチック海上にて溺死してより、自然公爵家との關係も疎遠となり、莫斯科を去りて田園に寂寞なる生活を送れり。田園にある事一歳、翌年の冬の初め莫斯科に來りオブロンスキーと會してそれとなくシオルバトスキー家の様子を尋ぬ。此度彼の莫斯科に出で來れるは全くキッチーに

求婚せんとてなり。莫斯科にある二個月、其間數々キッチーと相會ひたれども燃ゆるが如き情を述ぶる能はず、キッチーとの結婚をもて到底不可能なる事と自ら斷念して、空しく田園に歸り去れり。されど田園の生活の以前にも増して寂寞なるにつけ、キッチーに對する熱愛の情は益々抑へがたく、遂に一大勇氣を鼓して再び莫斯科に來り、自ら公爵家を訪れて結婚を申込みぬ。この時レウインは三十二歳、キッチーは十八歳なり。キッチーは心にレウインを戀し居たれども、此時已に交際社會の大立物ウロンスキーよりの求婚に接して、華奢なる交際界の榮達に心惑へる時なれば彼女は一言にしてレウインの申込を拒絶しぬ。求婚を拒絶せられたるレウインは全く失望落膽して悄悄として再び田園に歸る。かくて夜會に於てウロンスキーと舞踏して滿場の貴婦人の羨望を一身に萃めんとして盛裝して場に臨めるキッチーは、思懸けなくその相手をアンナに奪はれて涙も出でず、鬱々として遂に病を發し、兩親に伴はれて獨逸の一村落の温泉場に病を養ふ。此地滞在中渠女はワレンカと稱する露西亞生れの一小女と姉妹もたゞならざる親交を結ぶに至り、その境遇の太だ相似たるより限なき慰藉をえて、彼女の精神はいたく宗教的となり、此迄の虚榮の生活を捨て、新に敬虔なる精神的生活を經驗するに至る。一方に於て結婚を拒絶せられて田園にかへれるレウインは失戀に苦悶し、煩心亂慮の情を語る可き友もなく、依然寂寞無聊なる生活を送れるが。此間にありて克くレウインに同情し、キッチーの爲めに深く悲しめるものは公爵の長女ドーリーののみ。然るにキッチーは今や全く前非を悔悟し、疇昔の罪を謝して來りてレウインに投じ、レウインはキッチーを容れて妻としたれば年來の希望は茲に遂げられて兩人は初めて清新な

る一家庭を作る。

然るにアンナは何時しかウロンスキーの種を宿し、産を誤りて生命將に危からんとす。こゝにカレニンはウロンスキーと共にアンナの病褥に侍し、アンナの死期に近けるを悟りて頻りに舊時の罪過に苦悶するを憐み、ウロンスキーを説いてアンナの病床を去らしむ。アンナの病床を辭し去れるウロンスキーは失望と恥辱と悔悟の念に苦しめられ、煩悶に煩悶を重ねたる結果短銃を以て我ど我が胸を貫く。アンナは夫の寛大なる心に對し悉くその罪を悔悟し、カレニン「復讐」を神に歸し、寛宏博大の度量をもてその妻を宥せり。しかるにアンナは夫に宥され、自らも其の罪を悔悟したれども、己に業に重き痛手に苦しめる身は宥されたるも一時のみ、悔悟したるも一時のみ、その激越せる情緒を抑へ自らを屈していかでか夫の寛大なる心を受享するを得んや、病癒ゆるに及びて彼女は再び夫を忌避す。ウロンスキーとても亦然り、一度は慚愧して自殺を謀りたれども固より眞に自己の罪惡を悔悟したるに非ず、彈丸はその急所を外れて生命を失ふに至らず、瘡再痍び癒ゆるに及びて兩人は再度の姦通を爲し、アンナは生み落せる計りの私生の女子を携へ、ウロンスキーと共に夫を捨て、セロザを捨てて伊太利に行けり。されどもアンナはセロザに對する愛、過去八年の生活をして意義あらしめしセロザに對する愛は斷たんとして斷つべからず忍ばんとして忍ぶべからず、幾何ならずして聖彼得堡に歸り來れるも全くセロザを見んとてなり。竊かに書面を送りてセロザに遇はんと願ひたれども許されず、一日舊家に忍び入りてセロザに遇ふ。母子相擁して泣けり。然れども間もなく家人に妨げられてアンナは思の丈けをも果し得

ずして舊家を辭し去る也。此よりアンナの心は愈亂れ、憂懼痛恨の情交々湧湧し來りておさむる方も無く、冷酷なる社會と、拙き自己の運命とを感ずるに付けて益々自暴自棄の姿となり、色々の會合や、劇場などに臨めども、交際界の門戸は悉くアンナの爲めに閉ぢられ、昔の友は今日の敵、誰かかくまで墮落に墮落し果てたるアンナの爲めに一片同情の言葉を發するものあらんや。憐むべきアンナは遂に帝都に止るに堪へずして、ウロンスキーと共に田舎に逃る。されども罪は彼女にあり、罪惡の影は常に犯せる者の趾に伴はざるべからず。失望に失望を重ねたるアンナは自己の境遇の日に日に非なるを見るに及びて、今や全く利己的、破壊的、排他的となり、怨恨、憤怒、嫉妬の情抑へんとして抑へ難くウロンスキーに對する束縛の念は愈々強大となり、兩人の間に幾度か衝突あり、誤解ありて、アンナが胸裡に汪溢せる憂鬱悲痛の影は嚴悚として彼女が心情を仲傷腐融し去りぬ。此時に當りてアンナの唯一の慰はドーリーの訪問也。ドーリーは深くアンナの心事に同情しその苦痛を見るに見兼ねて幾度かカレニンとの離婚の可なる事を説けり。されどもアンナは幼きセロザと別るべき運命の悲哀を思うて逡巡して決せず、泣涕してドーリーに訴ふるのみ。左れば目前の場合、彼女とウロンスキーとの間の一大障礙となれるは彼女とカレニンとの關係也。此の關係の絶えざる中はアンナの苦痛もたえざる道理也。こゝにアンナは意を決し夫に離婚の請求書を送りウロンスキーと共に莫斯科に來りて日々許諾の到る日を待てり。しかるにアレクセイカレニンはリヂア伯爵夫人と計りて此の要求を容れず、アンナの最後の希望も茲に破れ果て、ウロンスキーに對する嫉妬の情は益々激越し來り、煩心亂慮、殆んど自らを持せざるに

至る。一方に於てはウロンスキーは深くアンナの心情を憐み、多くは之に逆はずして出來得る丈の忍耐は爲し居れど、アンナの神経の日に／＼嵩じ行きて果しも無きを見ては今迄での忍耐も全く破れ、今は強ひて冷淡を粧ふの外無く、一日些細なる出來事、(それもアンナの嫉妬心より)激烈なる爭論を惹起し、今度と云ふ今度こそは到底和解の見込み無き事と思惟しながらも尙ほアンナは情人を試み、之を拘束せんとするに、ウロンスキーは飽くまでも冷々しき態度を取り、俄かに要務を帯びて母の田莊に赴く由を告げ、一言慰撫の言葉も無くして出發せり。此時のアンナの驚愕はいかばかりなりしぞ、直ちにウロンスキーに打電して、嵩じたる精神を沈めんとてドーリーを訪ひ、偶々キッチャーに遇ふ。キッチャーは男子を擧げ、保養傍々莫斯科に在りし也。アンナはキッチャーに會うて愈々自らの墮落を感じ、ドーリーには思の丈も言兼ねて匆匆にして辭し歸ればウロンスキーより『十時までかへれぬ』との返電あり、扱ては愈々見捨てられしかど復讐の念はむら／＼と起り、直ちに田莊に押かけ行きてウロンスキーを辱しめ呉れんと、再び使を送り汽車に乗り、ウロンスキーが母の田莊近き停車場に下車す。此處にてウロンスキーよりの簡畧なる返信を受取り嘲るが如き笑みを以て己の豫期に違はざるを思ふ。アンナの心は麻の如く亂れぬ。行きかふ人の皆其姿を眺め行くとも知らず、プラットフォームの人波を行きかへり行き廻り、身の置處も無きままでに思惑へる時、轟然たる事の響に驚きて吾に復り、先きに莫斯科の停車場にてウロンスキーと初めて逢へる時に驛夫の轢死したりしを思出で、身を車輪の間に投げ、最後に唯一言、『主よ許させ給へ』と叫べるのみ、『かくて此薄命者の爲めに、煩悶、欺瞞、悲痛の一代記を染めたる大

御光は、闇をつんざき赫灼として大光明を輝かすと見えしか、聽て飄搖として影薄く、終に永久へに消え去んぬ。』

以上は是『アンナ、カレンナ』が吾人に語る所の大體也。アンナが初めて現れてより其悲惨なる最後を遂ぐる迄での精神的徑路が、極めて自然なる描寫に依り、悽慘の情、慄々として吾人の心弦を壓し去る。實にアンナの如きは翁か描ける女性中最も生命ある、最も自然の活躍ある女性也。アンナの性格を檢するに、其の個性の明晰にして、常に一貫せる性情を維持し、境遇の變化に伴ふ精神上的の變化と、根本的個性の特殊相との間には載然として冒すべからざる秩序あり、統一あり、心理的描寫の精細巧妙なる殆んど間然する所無し。アンナに次いで性格の最も能く描かれたるはドーリーなるべし。或る点に於ては寧ろアンナ以上に隱微なる個相の發顯せられたるを見る。吾等は此の一女性が初めて卷中に現れ來りし時より卷を終る迄で常に其が一舉一動に關して多大の興味を以て之に接せざるを得ず。吾等はアンナ對キッチャーの性格よりも、寧ろアンナ對ドーリーの性格に於てより大なる感興を有するもの也。表面上の關係に於てドーリーがアンナの唯一の同情者たる地位に立てると同時に、吾人は『アンナ、カレンナ』一篇を通貫して、最も誠實なる、最も眞面目なる、最も温かみのある、一種脈々の感じをこの兩人の性格の跡を辿りて感得し得と云ふも過言にはあらず。もしアンナが個性の弱點と認むべきものありとせば、それは亦一面に於ての長所たるなきを保せざる也。唯其境遇の如何に依り、短所尚はよく長所となり、長所遂に長所たらずして已む耳矣。アンナ、ドーリー、兩人の資性、地位、境遇、關係等を看し來れば、明に這般

の消息を感じし得べき也。アンナが終生の不幸は既にカレンとの結婚に胚胎せるものと云ふべし。播く者は仆る、アンナは自ら種を播き、自らこれを仆せり。アンナが生涯の歴史は遂に憂懼、煩悶、苦痛、健闘の血痕斑々たる末路に終れる也。思ふにアンナが資性の全體はこれ天來の熱情のみ。渠女は此熱情を以て自ら動き、又人を動したる也。其間何等の虚偽なく、何等の魂膽なし。彼女が初めウロンスキーを戀せるは、或は世間ありふれたる戀なりしならんも、一度私の實境を自覺し、低徊して過去八年の境涯に想到するや、宛然自己の犠牲的境遇の間に彷徨し來れるに心付き、驚愕、悲痛、悔恨の念措く能はずして、むしろその愛情の一種抑へがたき威力に支配せらるるが如きを感じたる也、アンナが激烈なるウロンスキーの誘惑に遇ひ、家庭に對する寂寥不満を感ずるの念深く、遂にウロンスキーの誘惑に堪へずして姦通を犯する至る一段、二章第十一節の描寫は其妙を極めたり。

最早駄目だ、私には貴郎の外何も有りません、何卒此事を忘れないで下さい。

と腕かか如く言へるアンナの一言に、絶望も恐怖も、羞辱も喜悅も悉く其中に説明し去られたる也。アンナにとりては『ないうべからざる事、恐るべき事、併し嬉しど望める事』はかくして事實となれる也。此時よりアンナの態度は漸く一變して、自暴自棄となり、大怛となり、家庭に對する無頓着、夫に對する忌避の念は、外界の刺戟と内部の衝突とに連れて次第に増進し行く徑路は、事件の發展と相待つて、讀者をして何等不自然の感をも抱かしむる事無し。たとへば第二章二十九節、アンナが競馬場よりの歸途、夫に對つて公然ウロンスキーとの關係を述ぶるあたり、

聊かの弛怠も有らず。

いゝえ、貴郎の誤解ぢやありません、全く貴郎のわづらひる通りです、私は吃驚いたしました、吃驚せずには居られませんでした、かうしてお話を承つて居ても、あの方の事ばかり考へて居ます、私ば那の方を愛して居ます、私ば貴郎のものぢやありません、御免下さい、貴郎は恐はうございませぬ、嫌やてございませぬ。

其の捨てばち的の言、一言一句此れ皆肺腑を穿ちて出でたる也。アンナが夫を忌避する情と、胸中に熾熱せる愛情の猛火とに其の身を七苦八苦の渦中に放擲し去る轉變の狀は經となり緯となり、篇中到る所惻々の氣吾人に迫る。されどもアンナが自然の活躍と、其の性情の流露とを遺憾なく發揮したる本篇最高の妙所は、むしろその後半アンナが病中瀕死の境に沈淪し、一度その罪惡を懺悔しながら、病癒ゆるに及びて再び姦通をなし、墮落に墮落を重ねて遂に悲惨の末路をたどるに至るまでの一段にありとす。アンナの夫に對する忌避の念は依然として變らずと雖も、其の温良なる氣象に對しては一片の同情無き能はず、如何に彼女が墮落せりとてその個性の美点迄も之を没却するをえず。「濟まぬ」「氣の毒なり」との感は自己の罪惡を痛切に自覺すると共に中心に起り來るは自然也。彼女が病床にありてカレン及ウロンスキーに言ふ所の言、沈痛人を刺す。ウロンスキーは病床の慘憺たる光景を見るに堪へずして兩手を以て顔を掩ふ。

「お顔を御覽なさい、良人の顔を御覽なさい、良人は聖人です」さ少し激した氣味で「お顔を御覽なさい、良人の顔を御覽なさい」と同じ事を繰返して、「アレキセイ、アレキサンドロイチ(夫カレン)あの方の手をとつて下さい、お顔を見たい」

カレンはウロンスキーの手を取りのけて顔を露させた。その顔は苦痛と屈辱とに痙攣して居る。「握手して下さい、そしてどうがあの方を許して下さい。」

カレニンは涙を流してウロンスキーの手をにぎつた。
「有難い！有かたい！此れで安心しました、少し足を伸さう、あゝさう、それでいい、まあ醜な花だこと！」と
室の額面を指して「ちつとも董のやうぢや無い、あア、！あア、！いつ死ぬの？モルヒネを下ささい、先生、モルヒ
子、あゝ！ あゝ！」と床の上で轉々反側する。

あゝ若しアンナをして此病中に死せしめ、ウロンスキーをして短銃に伏して死なしめば、萬事
悉く圓滿、此の物語の終局は最も都合よき結果に終りしならんも、翁の強大なる思想は決して此
處に之を止めず、慘烈、酷烈なる運命の跡を叙して人性の秘奥を裁抉せざれば止まず。是自然也。
アンナが病癒へて其身を顧み、慄然として來るべき一大運命の前に伏せざるを得ざる也。その冗
ステイバと語る所を聞け、

「世間には自分の嫌抜いてゐる夫と愛する女がある云ひますが、私は夫の。大。度。な。の。が。氣。に。食。ひ。ま。せ。ん。私。は。良。人
と一緒で暮して行けないです、それや身軀からだの所爲せいもありませうが、しかし如何すれば可いのですか、良人とは如何
したつて一緒に暮して行けませんの、困つちまひます、此節はたゞ無情氣で、この上どうなるのかと思ふと、氣ば
かりくじや、くして、良人はあの通り善良な人です、立派な人です、それを嫌ふ筈がないさう考へなれませうが、
最早かうなりや絶筆絶命です、あとはたゞ——アンナは「死」と言はうとする、ステイバはそれを言はせぬ、
「お前が加減が悪い、氣が高ぶつて居るのだ、さう物事を大きく考へるから可くない、そんなに怖ろしい物は世の
中に無い筈だ。」

「いゝえ、ステイバ、私は墮落、墮落し果てましたの、墮落よりも甚ひどび、實際、悪人なのでございませぬ、然しまた墮
落し果てたとは申されませぬ、これからどうなるんですか、私にはさうは思へませぬ、十分に引張つた繩はどうせ
切れなきやならんのです、終は未だ來ないのだけれど、それはどんなに恐ろしいでせう。」

わはれ何等沈痛の語そや、己に來るべき運命を自覺して、衰殘の黄花徒らに秋風を傷むが如く、
我と我が身を避けがたき運命の手に委し去らんとする彼女が心事は果して如何なりしとなすぞ。

『私は今深い々々谷底に臨んでゐるので、自分で自分を救ふ事は出来ませぬ、全まく出来ないので
すから。』これ即ち彼女が犠牲的の境遇の告白にあらずや。憐むべき哉。一度懸崖の邊緣を離れ
たる彼女はたゞ轉々として千仞の底に降下せり、絶望苦悶の聲を揚げつ、されど停止する所無く。
アンナが末期に急ぐ迄での精神状態を寫せる自然の徑路は、妙所擧げて言ふべからず。實に彼女
がウロンスキーに對する「愛」と「嫉妬」とは、末段に及びて一種の靈韻を帯び來り、自然の活躍と、
天然の妙機とは、奔放自在なる描寫により、讀者をして三嘆措く能はざらしむるものあり。アン
ナとウロンスキーとの最後の衝突は終を告げ、ウロンスキーは母の田莊に赴ける後アンナはウロ
ンスキーよりの電報をうけとる、

「何、もーさうだつたら、私にもそれだけの考がある」と抑へがたき怒を感じ、復讐の念に燃えて、梯子段を駆け上
つた。「押かけて行かう、最早二度と過はないのだから、それ前にあの人の爲た事を存分に饒舌つてやらう、憎い、
憎い、憎いつたらない」と控所の壁に懸つてゐるウロンスキーの帽子が目につくと憎々しさに、それを寸々に裂いた。

アンナに關して言ふべき事は尙ほ盡されたりといふにあらねど、少しく結論を急げば、他の人
物に就きて考ふる所あらん。

カレニンの性格は全體の上より云ふ時は比較的完全に描かれたり。其性質、年齢、地位、境遇、
皆結構上最も不利益なる位地に在り乍ら概して弛怠なく活動し、全篇の調和を破る事無きは甚可
矣。カレニンの性格は剛直寛宏、思慮あり、分別あり、また經驗に富む。彼は多年官海に遊泳し
て個人の名譽と社會上の地位とを重んずるもの也。彼は決して一時の感情に支配せられて、妻の一
舉手一投足に其の去就を忘れ去るゝが如き無暴を敢てするものにあらず。彼は其妻に對する嫉妬

を以てその妻を侮蔑する愚劣の精神なりとなし、社會の風評を恐れ、結婚の宗教的義務を重んじ、子供に及ぼす不幸と、本人の不利益を思ふもの也。故に彼がアンナに對する心中の苦悶も皆此の精神に基ける一種の打算的苦悶にして、愛及び嫉妬の情に伴へる煩悶は僅かに其の一部を構成せる色彩的關係をなすに過ぎず。故に彼の煩悶苦痛は彼自身の煩悶苦痛として最も重大なるものなるにも拘らず、常に其間に一脈の理路を辿る理性的、構成的分子ありて、決して突飛的、熱情的ならず、彼はアンナとウロンスキーとの關係に何等の疑も容るゝ餘地無しと信じながら、尙幾多の思慮をなし、公然とアンナの口より其の關係の曝露せらるゝ迄では極めて慎重なる態度を取れり。しかも尙ほ彼はその妻を離別せず、却て其罪を宥せり。而して妻は再度の姦通を犯すや、彼は益々其意地を立て通すが如くに斷じて之を離別せず、最後にリチャ伯爵夫人と相議するなど、一々その打算的なるこの点に於てカレンンは慥しかに成効せり。たゞアンナに對する態度と苦悶とはアンナの一舉一動に伴ひながら之に支配せられず、往々單獨的行動をなせるが爲め、其間に何等の高低なく、變化無く、終始一律の感あるを憾みとするのみ。蓋し本篇の如く事件を主とせざるものによりては免れ難き事ならん。

アンナの如き情熱の烈しき女にウロンスキーの如き非世才的の人物を配し、アンナの行動に奔放の勢あらしめたる用意甚周到也。予輩はウロンスキーに多きを求めず、唯アンナの行動に對しては飽くまでも受動的態度をとり、弛緩なきを得しむれば即足らんのみ。之アンナに對する約束也。故に此約束を破らざる範圍内に於て行動すればウロンスキーは成功せる人物也。彼は決して有爲

の人物たるを要せず。彼が初めて莫斯科の停車場にてアンナと遇ひし時偶々場内に轢死者を出したる騒あり、死者の妻は死骸に取付き、悲嘆に暮れ居ると云ふを聞きてアンナの色動くを見、ウロンスキー其の遺族に二百留の義捐をなす所も態とらしからず。アンナが病危篤に陥り悉く其の罪を夫に懺悔し、ウロンスキー自らもその犯せる罪惡に苦悶して短銃にて自殺を計ると云ふ所聊か不自然なる感はあれど、瘡癒へて再びアンナと元の關係を結ぶに至る所甚可矣。しかしウロンスキーの最もよく活動するは末段アンナとの衝突以下にありとす、アンナの嫉妬と執念と愛情とに堪へずして『もう堪忍がならぬ』と叫んで母の田莊に赴き、アンナの死に會して悲嘆し、失望自失する所などはさすがよく描かれたり。

次にオブロンスキー夫妻の性格の如きは實に本篇の白眉と稱すべし。オブロンスキーの快活呑氣なる、ドローリの細心温良なる、他の人物と人物との楔機となり、潤澤となり、色彩となりて行動せる活躍の妙は其に是天眞の流露也。オブロンスキーが家庭に對する無頓着、妻に對する温順、朋友に對する真心、妹に對する友愛、カレンンに對する尊敬は其に其性質と相待つて人をみいする一種の愛嬌と温かみとを有す。彼が數々レウインを訪つて静寂なる田園の間に快談痛論し相携へて狩獵に赴く所なども友情の溢るゝ計なるを見る。また、彼がその妹に對する友情の濃くなる、その悲惨なる境遇を憐むの情何ぞ夫れ渺々たるや

まあ聴き、お前にはお前の境遇が私に判明が出來ないのだ、私が眞個の所を云ふが、初めから云ふ、お前が自分より二十歳も年上の人と結婚したのだ、愛情も何も無くて結婚したのだ、少くとも愛情とは如何なものか知らずに結婚したのだ、それは抑の過失りであつた

その後妹の爲めにカレニンに離婚を要求する所にもよく其の真心は表れたり。また彼が初め家庭教師と關係して妻と衝突を起し、其處置に苦しみて妹の仲裁を乞ひたる、またアンナの死に會してわれにもあらず悲嘆の涙を注ぎ乍ら聽て間もなく歌ひ女など關係して世の風評を招くが如き彼の性格上洵に自然的也。ドローに關しては少しく前にも述べたりと思へば多く此處に贅せず。

キッチーに就きて更に言ふべき程の考も起らず、少女として有勝なる虚榮心に驅られてウロンスキーを戀したるも、間もなくその夢は醒めて眞面目なる生涯に移る徑路も坦々たる大路を行くが如し。レウインは著者の風格を備へ、飽くまでも眞摯敬虔にして冥想、退隱的なる、他の人物との關係上必ずしも必要の性格なりとは言ひがたきも、本篇の結構上、アンナ對ウロンスキーの關係と、キッチー對彼の關係とを對照して兩々相反映せしめ、暗々裡の中に兩者の間に自然の調和を求めんとしたる作者が眞意を以てすれば、翁はレウインの性格には最も大なる努力と最も大なる興味とを以て筆を下したるは明也。彼が田園の生活、家庭問題、結婚問題、人生の疑惑、宗教上の煩悶は凡て彼が生涯の幸福にして亦その不幸也。キッチーとの結婚によりて彼が生涯の一部の幸福と満足とを得られたれども、尙その精神上の苦悶は決して跡を絶たず、一步一步益々森嚴なる、益々明確なる一大事實として彼が心裡を壓し來れる也。彼一日野に出で農夫等の話を聞く、

「人間もいろんなもんさ、ミチエ、カ、のやうに腹の爲めに計り生きている者もあり、フオーカヌイチ見たやうにありや正直者だ。靈の爲めに生きてゐるものもありさ、あの男あ天道様知つてるだ。」

「靈の爲めに生きるの、天道様を知つてるの、そらごんな事かれ」レウインは急ぎ込んで問うた。

「わかつてまき、天道様に従つて、眞の道踏んで行きや、人にもいろくありまき、旦那の様なさ、旦那なんざ貧乏いぢめばできれえだが」

彼は此の質朴單純なる小作人の語に深く人生の眞義を悟り、一念以て宗教上の開悟を得と云ふに終る。

以上は主として本篇の重要な人物に就きて論じたるものにして、尙ほ此等の外に幾多の人物を出せり、されどそれらは皆本篇に重大なる關係を有するものにあらず、むしろ其人物の多きに過ぎたるが爲め全體の結構は支離散漫に流れたり、事件多くは斷片的にあらざれば平行的也、レウイン兩兄、ニコライ、レウイン及びサトジトイバ、ハイチの如き、又は少女ワレンカの如き、さまで必要の人物なりとも思はれず、此等人物を出さざるも、レウイン、キッチー動作の上に幾何の影響を與ふべき。予輩はアンナ對ウロンスキーの關係と、キッチー對レウインの關係に於てすら、翁がレウイン對キッチーの關係に意を用ふるの急なりしを思ふもの也。況んや他の小事件、小關係をや。事件の上の事件を造り、關係の上の關係を造れる、畢竟人物と人物との統一を缺き事件の發展の非組織的なるに依らずんばならず。されど「アンナカレンナ」は其の人物の性格に於ては殆んど間然する所なき人生の大報告書なり。其間何等の作爲的觀念を容れず。又一の構想を許さず、彼に失して此に得る處あるも翁が眞意の存する所を伺ふに難からざらん乎。首尾相貫徹せざる感あれども此處に評論の筆を措く。

“Men differ. One lives for his belly, like Minkki; but Fokanitch, — he’s an honest man, — he lives for his soul. He remembers God.”

“I seem like a cord too tightly stretched which must of necessity break. But the end has not, yet come, and it will be terrible.”

煩悶論

高木中外

蒼々たる天、鬱々たる地、白雪皚々たる嶺、神代ながらに浪打てる海、乃至、琉璃盤に金剛石を散布せる如き、かの神聖莊嚴なる星の光に至る迄、一切の美を以て飾られたる此の見ゆる世界は、見ゆる世界の端にして畢竟畫ける襖に過ぎざるなり、眞なる實在はその裡に存す。

かくて一切の眞一切の善一切の美は永遠と無窮の正義と最高智との暗示に外ならざるなり。

わく汝……永遠よ……わく汝……無窮よ。蝸牛角上に電光石火の命を争ふ吾人五尺の肉躰にとりては汝は餘りに大なり、汝は絶対に不可測なり祭壇上に供へられたる線香一は先づ落ち他は后れて落つ、しかもその差果して幾何ぞや、朝顔の露の干ぬ間に萎む命も千年を老い徑て亭々天を摩さんとする深山の大樹も天地の永遠と比せば等しく一刹那にあらずや。

想一度茲に至る吾人只是れに對して啞然として驚駭し蕭然として禮拜するの外又何事をも爲し能はざる也。

孔子河上に立ち喟然として嘆じて曰く「逝く者は斯の如し」と。

豈に雷だ水のみならんや「萬有永劫に流る」とは此の天地に對して劈頭吾人に起る感想にあらずや。

實に物とし物として流れざる者なし然かもそは徒に流るゝにあらずしてより高く美しき眞善の

光に向うて流るゝ也。

河の流るゝ、やがて海と合はんとし、魚の游げるやがて空の鳥と合はんとし、猿の走れる、やがて人と合はんとして茲に於てか、天地一切は流動なり向上なり發展なり天地の何物か流動せざる向上せざる而して是れ即て煩悶なり。煩悶とは自己が自己以上の物を産まんとする苦痛なり悶へなり萬有の向上的意志の權化なり。

吾人は無よりして有の生すべき理由を知らず、吾人は冷やかなる、エネルギーと物質の廻轉を以てしてそこに絶妙なる吾人の如き人格を生ずるの理由を遂に發見し能はざる也。所詮天地は神秘不可思議なる靈力の發展なり顯現なり作用なり。諸々の見ゆる萬象は、此者より出で、此者に歸すべき也。是れは眞善美のアルファ也オメガ也始なり終なり、若し此の大統一なくんば吾人類が幾千年の汗血を絞りに築き上げし文明も制度も畢竟無意義なり空蕩々なり岩に結べる泡に過ぎざる也地球、一度冷却せば萬事休矣あゝ夫れ萬事滅矣。

見よ如何に天地の一切が此の大本源を慕うて向上するかを。一切の者は是れに歸せずんば遂にその休むを知らざる也吾人人類も亦天地の一分子也縉蠻たる黃鳥既に夫の丘隅に止るを知る吾人豈に亦此の大本源に一致せずして止むべけんや。

問ふを休めよ吾人は何故に此處に生れ何故に彼處に行かざる可らずかと全智の大能者は何故に吾人をして始めより罪なく煩悶なき者として造らざりしかと、然れども此の問ひは吾人にとりて僭越なり不徳也造られし者は造りし者に對して何故に我を如此造りしと云べけん乎、陶人は同じ

土塊を以てして一の器を貴く一の器を賤しく造るの權あるに非ずや、吾人自身の産物に非ずして全宇宙の産物なり吾人は吾人自身のために生くるに非ずして全宇宙公共の器として生くるなり。風は己がまゝに吹く汝その聲を聞けども、その何處より來り何處へ吹き去るかを知らず、風をして己がまゝに吹かしめよ人をして、その裡にある一切を發揮せしめよ、是れ宇宙の大法にして盡性は吾人にとりて最勝善なり。

吾人は蜉蝣に等しき肉躰を以てして無限無窮を追慕するの性を有す是れ一見實に不可思議なる神秘に非ずや然れども、天然は斷じて得られざる欲望を吾人に與へず是れ理論に非ずして事實なり吾人が無限無窮を追慕するは是れ眞に吾人の裡に天地と共に滅せざる普遍的生命あるが故なり。

吾人にして萬籟寂々神澄み更深く、の時天真無我以て内に省みるあらば、衷心より湧き來る不可抗の聲あるを聞かむ曰く、

「吾人をして常に在す眞善美の完全者に、觸れて無窮の天の階を攀ち登る可く不盡の力を汲み取りしめよ」と

何人が道德的戰場に於て自己の弱さを感じざる自己の小なるを感じざる何人が罪業の深手を負ひて刀折れ矢盡くる時あらざる吾人獨歩以て世の誘惑と戦ふべく、そは餘りに強からずやそは餘りに多からずや。

吾人は平生自己の存在は自個自身の力によれる如く想ひ居るも是れ自由意志を賦與せられたる人類が自惚に過ぎずして一瞬と雖も他の力を仰がずして生くる能はざる也、吾人の肉躰は絶えずる空氣を要し適度の飲食を要するに非ずや吾人は宇宙に於て最も多く他力によりて生存を爲す最も薄弱なる者也、吾人の心靈亦然り吾人の心靈は常に奮闘し永遠無窮を慕ふて向上す有限なる一切の物は吾人か心靈を養ふ能はず茲に於てか吾人は遂に無限無窮の者よりしてその糧を求めざる可らず、如何に人類がパンを求むる聲の熾烈なるかを見よ、而してそか聲の如何に人生その者の如く眞面目なるかを見よ。煩悶とは心靈がパンを求むるの聲なりと知らずや。

文明の波一度ニル河畔に動いてより滔々として流れて止まず年を重ねる茲に六千年人類は今や自然の威力を脚下に踏んで天地間又何物の不可思議物なく何物の怖るべき者なきに至れり是れ實に人類文明史上の一大異觀に非ずや。

科學的なる語なくして何物も信せらるゝなく經驗的なる語なくして何物も採用せらるゝなし、かくて科學と經驗は相握手してその翼を擴げて全空間に新婚旅行を企て感情、直覺、宗教を包容せんとす。吾人は科學のために滿腔の同情を以て祝盃を擧ぐるを禁ずる能はず、然れども翻て吾人人類は如何吾人は果して天空に飛ばんとする彼等の前に跪いて彼等を尊崇すべき者なるか、人は科學を利用すべき物にして是れの奴隷となる者に非ず科學を萬能の神としてそが權威の中に全然捕虜となれる現代は禍なる哉

地球中心説を信じ人類を以て萬物の靈長と信せし時、當つて一度コペルニカスが太陽中心説を主張せる時人類の驚愕は如何に大なりしよ、然れども文明は人類の驚愕を後にして進行せり、やがて

引力説は發見せられぬ、神鳴りとして恐れられし雷電は絹布と玻璃の摩擦によりて實驗室に製造されぬ、雨戸を閉ざして自家室中に空想の夢を貪りし者一朝隣人の戸を叩くに驚いて雨戸を開けば日は既に三竿に登りたり、人は今や自己心中を捨て、外に走れり、やがて進化論は人類をして殆んど宇宙の真相を發見せし如く想はしめたり、然れども一切外界を顧みずして自家主觀の海に生活せしも一時なり、一切の自己を忘れて外界を追ひ廻りしも一時なり彼も一時なり是れも一時なり眞理は中庸にあり、宇宙は物質の奥に、心靈あり。

請ふ吾人をして科學を檢せしめよ科學は人を離れて萬有を知らんとせり眼を離れて光輝燦爛たる色を説明せんとせり茲に於てか彼等はエーテルの波動を假定せり、エーテルとは何ぞや科學は耳を離れて美妙なる音樂を解せんとし皮膚を離れて溫度を知らんとす若し是れにして眞ならば吾人何事をも言はじ然れどもその原子と云ひ引力と云ひ是れ果して何者ぞや。

天籟人籟遠く去りて萬物眠りにつける時徐ろに仰いで天を望む、幾多の流星は我か地球に落下し來り幾多の彗星は我太陽系を去る而して幾多の恒星は彼處に生れ此處に滅す、其一塊一点の往來生滅は全宇宙の關係を變ず豈に吾人の考ふるが如き單純なる引力説を以て測り得んや。月の軌道は楕圓形なりと言ふ、されど太陽の周圍を絶えず楕圓にて公轉せる地球の周圍を廻轉せる月の軌道は果して楕圓なるか。天文學は最も明らかにして心理學は最も不明瞭なりとせらるる最も遠き天空は吾人に最も明らかなりとせられ最も近き心の學は最も不明とせらるるは予盾の甚だしき物に非ずや、然れども最も學ぶ事少なき小兒は最も獨斷的にして最も博學なる諸學者は最も懷疑的なるを知

らば吾人が多く知る能はざる天文を最も知り得る心を最も不明とするも當然の事なり。果然科學は無知より生ずる假定の上に立てるなり、科學は巧妙なるパナラマの如しその景の實物を以てして其背景の畫ける物をも實物視せしむ彼等は實驗を口にしてさも眞實らしくに述ぶるも、其背景は凡て空想也、科學が人間の用に供せんが爲にその原子を假定し引力を假定し、エーテルを假定するも吾人は敢て何事をも言はず然れどもその假定を基礎として自己の分限以外なる心靈界に迄容喙するに至りては斷じて吾人の許すべからざる事也。

數學はエクザクト、サイエンスと稱せらる、然かもその由りて立つ公理及び自明の眞理なる物は吾人の感情に非ざるか、二点の間の最近距離は直線と言ふ吾人は只かく感ずるのみ。論理學は如何そは鏈鎖の如く第一環第二環……第百環第千環一の命題は他の命題を論理の法則によりて導き以て一見その堅牢なる寸分の間隙なからしむ、然れども、その全環の運命は第一環の運命によりて決せらるる也而してその第一環なる自明の眞理は是れ吾人が感情にわらずや。眞理は到底感情の發現なり絶對の眞理とは吾人が天真無我なる時に由て來る純感情のみ。

「可愛い子には旅をさせ」下宿屋樓上兩肅々として身は病床に横る時始めて、其の兩親の大愛を知る人類は樂を知らんか爲めに苦を嘗むべき運命を有す、善惡を知る木の實を食ふて樂園を追はれたるアダム、イープの子孫は第二の樂園に至るの前に呪はれたる文明……生存競争と神經衰弱……の困苦を嘗めざる可らず、かくて人類は自己ならぬ自己を知り善惡を知る木の實によりて罪の子となれり、一切の行動は肉の慾によりて割り出さるるに至り幸福主義快樂主義功利主義は科

學の勃興と共に人心を支配せり、然れども人は裡に聖なる分子を有す、宇宙のロゴスと連なれる普遍的生命を有す如何なる科學も滅却し能はざる真正の自己を有す、煩悶とは「第二の我」が文明の惡弊に酔ひて「第一の我」「真正の我」を競争と分裂を壓ふて調和と一致を好むの「我」に歸るの時にして吾人が五十年を以て滅び行く利己愛を去つて、しづ心なく散る花にすら宿れる天地の大愛宇宙の大意識と合致するの時也、

誘はれて禁せられたる木の實を食ひ以て墮落し煩悶せる、アダムの子孫は煩悶によりてのみ第二の樂園に到り得るなり、祝すべき哉煩悶の語大疑の下に大悟あり、かくて吾人は靈光一閃天地の真相に觸れて新なる人生は開展され天地の大靈力に打すかりてその大愛を感得し歡樂平安、満足の裡に、日々無限向上の大道を登るてふ妙境に入る讀むべき哉煩悶の聲。

若し夫れ煩悶を以て半文とし苦悶を以て九文として之を閑人の閑事業とする底の彼等三分五厘的的人生觀を抱ける輩に對しては漫ろに憐情を催すを禁ずる能はず。

神の國は爾曹の衷にあり、入々各、真我の聲を聞かざる可らず。

峯上に峯を重ね、燈外に燈を掛けて永しへに實相無邊の天を躡りゆく智識の姿は勇ましかれど、顧みれば吾人が無始劫來の深き靈魂の叫びは依然として空やされざるにあらずや。一たび自然萬有が擧げたる沈痛無限の煩悶の呻きは、今尙我等が胸臆の深處に遠嵐の如く、響きて日夜休止せざるにあらずや——回光錄

雜 錄

枕草紙を讀む

變 頭 生

百花繚亂、千紫萬紅、燦爛たる花園を望むが如く、悠悠洋々宛として春日の海に對するが如きは是れ平安朝文學の眞趣味に非らずや、蓋し平安朝は一面古今を通じて文弱の極に達せし時代と稱せられ又其の藝術的良心の如きは殆ど見る蔭も無く萎靡せし時なり、從て其の產物たる平安朝文學が果して如何なる思想を包含するかは勿論吾曹の言を俟たず、一道の意氣天地と照應する底の雄渾壯嚴にして放膽なる大文字なく、崇高莊重一讀眞摯の氣に打たる、底の大思想なかりしは疑ふべからざるに似たりと雖も、尙其の艶麗にして而も豊熟せる文章の能く有情の歌神を泣かしめ、花神を舞はしむるに足る何物かを含蓄するは復古今萬人の是認する處にして、實に是れ千載の下吾人をして一讀其の芳烈甘美の氣に飽かしむること、彼の西方芳醇の美酒に於けるが如き所以に非らずして何ぞや。

思へ太平四百年外寇の恐るべくもの無く、内訌の憂ふべきもの無きの日、九重の色濃き雲影の裡に、優遊桃源の夢を貪りて、飽くことなかりし衣冠束帶の百官有司、紫袴錦裝の衆百女官を、

嗚呼何ぞ其の容儀の堂々たる、風貌の華麗なる、彼等は實に平和を享樂するを以て人生の眞意義を解したりし也。三春の行樂に芳烈なる一杯の酒に酔ふを以て喜戯し、光陰の逝くを忘る、を以て人生の極致と解したりし也。而も都は平安なりき。青裝霞粉を凝して、雲瑞美人を望むが如き比叡の山、綠滴銀板を走るが如き東鴨の水、是れ即ち天が彼等平和の寵兒を待つに其好む處を以てしたるものにあらずや。實に彼等は平和の兒なりき。彼等は生活の努力を解せざりき、苦闘の快味を知らざりき、只彼等は花の紅なると柳の綠なるとを知るを以て生を樂む唯一の智識、手解したりしなり、むべなり其の一度口を開くや千韻の歌謠玉の如く連り、一度眼を轉すれば百般の歡樂舉て彼等の就くがまゝに披瀝されつゝありしや。

夫れ文學は天地の至情なり、人の性なり、而して又自然の反映なるざるべからず。思ふに自然を解する能力を有せざるものは、即ち文學を解するの能力を有せざるものに外ならざるなり、彼等平安朝人士は是の一要件たる自然を解するの手段に至りては一として盡さざるなく、自然をたのしむの法に至りては微として決して捨てざるの概ありしは、一度青史を繙ときたるものゝ皆首肯する處なるべし。

試に吾が古今の文學を搜索して一度平安朝に至らんか是の太平なる一時代を蓋ふ一帳の花雲は青に、赤に、黄に、紫に、吾人の探るがまゝにその色彩を變化し行くを見るべし、是れ即ち彼等が、自然をたのしむの法の多岐にして到底窺知すべからざるものあるが爲にして應て又當時如何に文學の世に解せられん世に行はれつゝありしかを示すものなり。往昔を窺ふに自然の謳歌者は

即ち文學者なりき。彼等の日月星辰に於けるが如き、彼れ等の雷電霹靂に於けるが如き、彼等の草木花卉に於けるが如き、彼等の禽獸虫魚に於けるが如き。是等自然に對する謳歌恐怖が直に一大文學として反應し來りし事の疑ふべからざるは一度神代史の一頁を窺ひたるものゝ又決して否認すべからざるものなるべし。勿論吾曹が文學なる文字は、決して彼の嚴正なる制限的意味を有するものにあらず、其言語に表はるゝと、心中にひそむと、勿論措いて問はざる處彼等の錦心繡腸は即ち彼等の文學なり、從て彼の詩形の如き、文字の如きは、吾曹は是れを文學に附隨する些事中の些事として度外視するをばからざるものなり。思ふに神代以降吾が日本民族は文學を解するの道に於て、文字を成すの道に於て、決して他國民に劣ることなき大技量を有せしものゝ如し、試に神代に於ける彼等の詩的生活を見よ。彼等神代人種は最もワイルドなる自然を咀嚼するの道に於て少しも缺くる處なかりしならんか、日月星辰の不可解にして宇宙の彌が上に宏大無邊なるを見ては、懷疑恐怖崇拜の念轉た禁する能はざるものありしなるべく、野に生花の嬌々として危鳥怪禽の日に其の色を愛るを見ては、世の轉たたのしむべきを思ひしなるべく、雨後の潮音、風前の野草、一として皆彼等の詩的情緒を動かさざるものなかりしならん、實に彼等の生涯の不知不識の間に詩的趣味の滿々たるは羨みても余りあるものにて、思ふて茲に至れば彼の史に散見する古代の歌謠の如きは、實に彼等の錦心繡腸の發せし最少部分なりしは言を俟たざるなり。かくして吾が大和民族は造次顛沛少しも自然を忘れざる民族として發達し來りしなり、而して其の極る處今や是の平安朝に發して、絢爛の文華、燦として衆目を眩するの盛觀を呈し來れり、

是れ即ち素朴にして、摯直なる彼等古代の詩人が、其の胸中深く藏したりし鬱勃たる詩懷の連綿として遺傳し來りしものが、奈良朝を経て果然茲に是の文學旺盛の一氣運を作成せしものに外ならざるなり。

蓋し平安朝は文弱の時代なり、其の文學の柔軟なる方面に傾きつゝありしは復た疑ふべからざるものあり、然れ共是等文學的傾向の如きは其の責に任する處存して他に在るは又否むべからざるの處なり、想ふに、王朝以前の文學的天地は、其の時代の荒唐なりしと共に、雄麗遒勁なる天地なりしなり、古雅質樸の天地なりしなり、而してよく幾多大詩人を容れて余りあるものなりしなり、然れども時代は彼の瀦潦の末百年に亘りて變化なきものゝ如きにあらずして、絶えず新陳し二代謝し盡る處を知らず、一點の滴粒に包含せられたる或傾向内容は落ちて深水となり、流れて長流となる、古代文學に含まれたる或傾向を有するの點滴は、其流るゝにまかせて遂に奈良朝文學の長流となれり、遂に又平安朝文學の大江となれり。其の遷轉する處到底時代の能力の以上にあらず、況んや時代と共に轉々する一個人間の如何ともすべからざるや論なし、思ふて茲に至れば吾人は是等柔弱なる文學を柔軟なる文學として享受する大度量を有せざるべからず圓轉たる思想を圓滑に許容するの宏大なる心緒を養はざるべからず。徒に其の軟弱なるを以て嬌微なるを以て一概に其の眞價を耐度し合せて其の作者をのゝしり去る如きは到底文學を解するの能力なきものなるべし、同時に其軟弱の依て來る處を余りに輕々に觀過し、余りに道學的觀念に支配せられ、角を矯めて牛までも殺し終らんとする弊に陥れるものなり。太平四百年干戈の何物たるかを解せず長袖のか

くるゝに頼多きをさとりたる平安朝の才子佳人の手に成れる文學が到底長袖の臭氣と偷安の情氣とを脱し得ざりしは又宜として容すべきにあらずや而も此等太平を樂しむの弊に陥れる彼等ども皆是れ時代の思潮なる一大威力に左右されたるものにして且其の柔軟嬌微の氣風を以てして花月をあざむくが如き思想を生み來りし一代の能力に至りては、千嗟萬嘆して尙足らざるものあるにあらずや。

茲に又吾人の決して忘るべからざる一事あり即ち平安朝文學の男統に非らずして女系なりし事も世人の口を極めて王朝文學の情氣と柔軟とをのゝしり尙その到らざるを慮るが如き傾向あるは是れ此の一大約束を忘却し去りたるが爲にして延きては又平安朝の研究の忘るべからざる一條件を忘却し去りたるものなり。批評の冷眼は同情の暖かみを包含するに依て、其眞價存す、攻撃の鋭鋒は博愛の慈心によりて其の鋭益を急なり、今吾人をして平安朝文學を説くに先だちて少しく所謂王朝の文學系統と所謂王朝の官女とを窺知せしめよ。先に述べしが如く古代文學に表はれたる雄大なる思想の蔭にひそみつゝありし或未知の成分は、轉々流下遂に平安朝に至れり、夫れ雄壯卓厲の文、莊重偉大の歌謠、美は即ち美なりと雖も、慣用の乏しき人心の變類遂に之を永久に保持し能はざるなり、是に於て乎優美にして艶麗なる物語日記類は翕然として顯れ來れり、而して其作者の優秀なるものは即ち紫式部清少納言の二女に如くものなし。是の二女の如きは實に吾が文界稀有の文星にして、其の作物の優秀なる、思想の圓熟奇警なる、前後又比するに足るべきもの少なき大作家なり、是れを以て彼の詠歌三昧に腐心して七五の小局地に戀着せし公卿諸輩

の如く、將た文章の意義を支那文學の模倣と解して、字句の修飾に日も是れ足らざりし、哀むべき博士等の如く、徒に文學の末技に據り根本を去る幾百千里、一の創作なく、一のまとまりたる思想なき徒輩に對比し來れば、天壤の差實に三千里、纖弱婦女の身を以て、而もよく椽大の筆を奮ひ、吾が文學の爲めに万丈の氣焔を吐露したるの意氣に至りては、千古不易の榮冠を價せずや、彼等が其の本性を發露せし所謂女らしき思想が恐るべき勢力を以て平安朝一代に彌蔓せし如きは即ち彼等の殊効に報ゆる自然の賞表にわらずや。

今平安朝文學を見るに、是を貫ける文學系統は唯一にして無二なり。四百年の長さ、勿論時に或は二三傍系の目睹すべきものなきにあらざれども、皆是れ些少たる小系統、其前なく其後なき哀むべき劣者の地位に立つもの共なり、是を和泉、紫、の直系に對照すれば、原より日月の星辰に於けるも雷ならず殆ど些々たる細流の堂々たる江河と並び走らんとするものゝ如し。夫れ吾が文學系統は由來一幹の大河の如し、一度其源を溪間に發するや、落ちて點滴となり、流れて細流と化し、細流は小河となり、小河は大江となり、其末遂に海洋に注灌す。其間或は時に小湖あらん、狹淵あらん、其の表には細波小波絶え間なくせ騷ぐものあらんも、畢竟是れ等は途中なり、過渡の風物なり、表面幾多の男波女波の荒まざる時湖心一系の水流は動せず、淀まず、營々として流れ來り流れ去りて憩ふ處を知らざること幾百十年なりき。此一系の水は即ち奈良朝の文系也、而して其の遂に注ぐ所は悠々たる大思想を容れて余りある吾が紫、和泉の海洋なり、狹沼細溪の水合しては即ち源氏物語以下の海潮となりぬ、茲に至りて海洋は益々大に、潮色愈々鮮麗なり。

然れども茲に吾人平安朝文學を讀むものは、一大支流の觀過すべからざるものゝ分れて別に存するあるを忘るべからず。即ち如上の幹流に並行せる一路の清流、水勢滔々として常に幹流の流緩なるを嘲つて止まず、清冽の水、痛快の大輸送力は、常に清濁合せ成れる幹流と拮抗せんことをつとめて止まざるの概あり、是れ即ち清少納言の生れたる、否なその作れる系統也。其の精肝の氣は、幹流に合するを好まず、鼓を鳴らし、陣を嚴にして以て、一傍系として觀過されんことを是れ憂ふるの意氣、赫々として天日の如きものあり。所詮彼等一派の系統も亦堂々たる紫式部の大幹流に比しては一傍系たるに過ぎざるは否むべからずと雖も、彼の碌々たる男系の細流の、余りに意氣地なく、根底弱く、幹流の爲めに没却さるゝに比すれば、其の優れるや久し、宜なり彼等其に前なしとするも、其後の依然として斷えざるものあるや、徒然草、花月草紙、鶉衣皆是の流の水に生くるものなり。

頃來吾、枕草紙を熟讀するを得るに及んで、清少の靈腕を感知することいよいよ深き感あると共に書中に散見する清少が得意の笑顔の裡に、隠れたる血涙の參々たるを覺り、同情の念轉た禁する能はざるものあり、暗中を搜索して漸く一物を認めたる感なしとせず、原より固陋の見、偏狹の議、執るに足らずといへども、吾が同情ある讀者が此の癡文を以て、清少の意の那邊に存するやを探らんとする先驅の一燈とせらるゝならば、清少に對する吾懷又幾分を達し得たるを快とせんす。

枕草紙一卷は一篇の隨筆也。述ぶる所首尾無きが如く、有るが如く、意味なきが如く、意味あ

るが如く、連絡なきが如く、而も時に一縷の脈絡嚴として存してうつらざるが如く、而も尙是の、取りどめなき序次による一篇の隨筆が清少の大不平と大襟襟を遺憾なく、腹藏なく、憶面なく、吐露して餘りあるは驚嘆すべきにあらざるや。彼女の垢抜けしたる、清新なる情操の發する處、時に明快にして透徹せる批評眼となり、時に精緻にして奇警なる觀察力となり、時に又雅致ある感想となりぬ、嚴正なる純文學の見地より是れを見て彼の紫式部の源氏物語と對比すれば、萬炬の前の一燈の感あるは免るべからざるものなるべしと雖も、一篇の隨筆よく彼が個性と、經歷の裏面を語りて餘すなく、延きては太平無事の好名目の蔭にかくれたる、平安朝時代幾多の悲劇の真相を想致せしむるものあるは、又捨つべからずといふべし。見よ先づ其の材料の豊富にして多方面なるを。勿論是れ宮廷なる好都合の位置に棲める、女子たるに負ふ處大なりとは云へ、和漢古今に亘りて、凡そ彼の目に觸れ、耳に感ずるものは、細大一も漏らさず、紫電の如き機智と、銳刀の如き筆意とを以て觀察し、批評し、物を見ては根底を探らざれば止まず、事を見ては真相を抽き來らざれば以て満足せず、才の赴くに任じ、想の走るに委して、些の拘束を加へず、眞摯に、率直に、平常有りふれたる些事をすら切に羅し來りて徹としてもらさず巧に美化し、想化し、而もよく大体を忘れず、讀者をして初めは其の放逸なるに驚かしめ、終りは其の沈痛なる半面を想致せしむるの魔力に至りては、吾人一個の男子此の宮廷の奥深く隠れたる一女子に對して、敬服措く能はざらしむるものありて存す。然れども是を要するに枕草紙一篇の眞價值は其の批評に存す、彼清少は、思想家として、余りに銳利なる觀察力を有せり、彼は作家として、余りに機敏な

る才識を有せり、彼の眞價值は此にあらすして彼に存せり、批評は畢竟彼女の本領にして、枕草紙一卷は實に其の批評集として、眞價值を有するものといはざるべからず。

今暫く批評家としての清少の價值をうかがはしめよ。先づ其の觀察力を窺はんとす。

むつかしげなるもの。ぬひもの裏、ぬこのみこのうち鼠の未だけでも生ひぬをすみ内よりあまたまらばし出でたる云々

の如き、如何に其の着眼の奇抜にして、意想天外より落ち來る底の感深きや、至微の深奥に浸入して人意の表に出るは、彼の最も得意とする處にして、上掲の一節の如き、幾百年の下、尙よく一讀紫袴の官女等の眉ひそめたる一幅の圖を想見せしむるにあらざるや。

七日は雪間の若菜青やかに摘み出でつゝ例はさしもさる物目ちかゝらぬ所にてもさわざ白馬見んとて里人は車清げにしたてゝ見にゆく中の行門の鬪ひき入るゝ程頭ども一處にまろびあひて刺櫛も落ち用意せねば折れなごして笑ふも又をかし左衛門の陣なごに、殿上人あまた立ちなどして、舍人の馬ども取りて、驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、立て膝なごの見ゆるに、主殿司女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ、いかばかりなるん、九重をかく立ち馴らすらんなど思ひやらるゝ中にも見るはいと、狭き程にて、舍人が顔のきぬも見はれ白きものゝ行きつかぬ所は、誠に黒き庭に、雪のむら消わたる心地していと見ぐるし、馬のあがり騒ぎたるも恐ろしく覺ゆれば引き入れられて、よくも見やらず

白馬の節會は年始に於ける朝廷の盛儀なり、雪間の若菜春猶ほ淺くとも、時はすでに陽春なり、

人は絹衫に、車は錦繡に飾られて、宮女花の如く、百官雲の如きものあるべく、尋常人は皆其の美に酔ひつづれて四顧八顧せるとき、彼清少は靜かに華麗に眩惑し、壯觀に驚嘆せる群集の中より、其の裏面を觀察し、弱点を捕束し來りて、冷眼之れを批評せざれば止まず、彼また天成の評家なる哉。然れども是の鋭敏なる清少の觀察眼は、年中の少行事、世俗の出來事、乃至人の想到しがたき少局部にのみ出入する程には少なるものにあらず、彼は女の身として、よく時世を諷し、人情の機微を露くの域に達せり、

除目のほどなど、内裏あたりはいどをかし、雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく、四位五位、若やかに心地よげなるに、いとたのもしげなり、老いて面白きなどが、人にとかく案内いび、女房の局によりておのが身の賢き由など、心をやりて説き聞かするを、若き人々は眞似をし笑へど、いかでか知らん、よきに奏し給へ、啓し給へなどいひても得たるはよし得ずなりぬること、いと哀れなれ、

是れ彼が地方官の暗黒面を觀察したる一例なり、彼はよく太平の苦みを解し得たる女性なり。むつかじげなるもの、豈只ぬいもの、裏のみならんや、錦綾の裏面は、木綿の裏よりも一層むつかじげなるものなり、あはれなるものなり、無殘なるものなり、太平は綾羅なり、裏面のむつかじげなるは言を俟たず、乞ふ吾が讀者諸君、白頭の老吏が仕官の道を得んとて、女房に媚び依頼するの醜態をの、しるに先たちて、先づ其のむつかじげなる裏面を作れる、太平の表面を責められんことを。而して清少はいかに、彼は慥かに太平の裏面を、哀れと觀察したるなり、無殘と見た

たるなり、而も是を捉らへ至りて、冷笑一番是れを客觀するを敢てす、彼又冷靜なる哉。復た、彼女の趣味眼は高かりき、優れたりき。少なくとも當時一般の女官のそれを抜くこと數等なりき。否當時一般の人士のそれを抜くこと數等なりき。彼の色を批評せる條の如き、紫と紅との外に色なしと觀せし、當時にありては、たしかに超越せる域に達し居たりしなり、紙と共に命を終へんまで奏して笑はるゝの條

たゞかみのいと白ふ清らなる、善き筆白き色紙……………

又高麗縁の疊の筵青うこまやかにあつきが縁の紋あざやかに黒う白う見わたる

の如き勿論是れ一時の戯言に、世にすねたるの語と解すべしと雖も、又以て見地の多少高かりしをあらはすと共に、世を諷し、俗を嘲りて、臆せざるの意氣を示すものならずや。

其他彼の觀察の絢爛の文となりて表はるゝもの、擧るにいとまなしと雖も、吾が此の書に接する如に、推稱止む能はざるものは、彼の卷頭を飾る一文にあり、彼の春は曙云々に筆を起こして、四季の風物に寄せて著者の感想を叙べて躍如たらしめたるの手腕、文平坦なるが如しと雖も、用意周到にして、興趣溢るゝが如く、彼れ清少にして初めてなし得るの叙情なり、妙文なり、是の一文の如きは、實に彼がいかに文章に堪能にして如何に正格なる大文章家たりしかを遺憾なく發揮せりと云ふべし。然れども彼女は、又是れ畢竟一介の女子也。彼の批評は精緻にして透徹せり、然れども彼はよく自己本位を離るゝ能はざりしなり。彼は常に其の得意として、局部を描寫して全般を推すの法を用ひたり、人の云はんとして云ふ能はざる處を叙し、讀者の弱点によつて

以て其の賞讃を博するの好手段を弄するに切なり、されどこれ等、人のよんで至妙なり、深微なり、感ずるの處は、之れ反つて又最も淺浮なる部分にあらずや、くすぐりの妙文にあらずや、皮相的觀察にあらずや、彼の篇中に列擧せらるゝ「…ものは」「…もの」等の諸段妙は即ち妙なり、切は即ち切なり、されど人の眞情に滲入して、一讀其の異味を忘るゝ能はざらしむる底の深刻なる意義をふくむものにあらず、勿論これ一定の立脚地の上に始終して關連せる斷定を下すものにあらざるが故に、せむるに酷なりと雖も、是の失一は以て彼が觀察の標準点の誤れるものより來れるを否むべからず、彼の批判の標準は當時否其の瞬間に於ける彼の感情なり。かの杜鵑と黃鸝とを比較し來りて只夜鳴きなかざるの一点より黃鳥杜鵑に劣れりと斷するが如き、其の稚氣寧ろ喜ぶべしと雖も、彼女の批評家としての立脚点より云へば、又一大過失たらずんばあらず。思ふに當時の感情を驅つて批評的標準となすの非は、彼女も固より之を知りしならんも、只彼女は此等の結果を隨感隨評として、此の一篇に載するをばからざりしものなるべし、蓋し彼を眞に批評家とするは彼の首肯しがたき處なるは論なきを以て、吾れ彼の爲めに是の失を惜むこと大なりと雖も、固より此等一面の細瑾を以て、其の大功までをも云々するものにあらざるなり。さらば今一轉して彼女の批評の方法を觀察せしめよ、彼女は天成の批評家なりき、其の批評の嚴冬の如く凄壯なるは、是れ原天資に出で、彼が獨特の天稟の致す處、做ふて得べきものにあらず、擬して及ぶべきものにあらず。其の明快なる議論と、銳利なる筆法とを以て、惡罵し、冷嘲し、男子とて假借せず、大人とて任せず、其の意氣の盛なる、世の凡々なる評家輩が、百讚千嘆するも及ぶ

能はざるものありて存す。されど又彼は世に在りふれたる、眼高く、腕低き、惡すれしたる評家にあらず、彼の半面は實に得易からざる大詩人にして、森羅萬象、一として彼女の眼に觸れて錦繡の文とならざる無く、誦すべき一篇の無韻詩とならざるものなし。凡そ彼女が明評細批に、思はず案を拍つて感嘆する人は、一面彼女が天成の靈腕、よく他人の窺及すべからざる底の靈妙なる文華に魅せられつゝあるを、覺らざるなり。彼女が爛眼は炬の如く燦然として萬物の秘奥を照らし、彼女の敏達雄然宇宙の森羅を大觀し、小觀して、批判の聲を揚げ、嚴冬の如き評語は、春宵の如き文華と和げられ、櫻花の如き文華は、裂氷の如き批判に強められつゝ、益々彼女の本分を發揮して余す處なし、今彼女がいかに人情の至微を剖折したる巧妙の言辭を以て、其の正確にして嚴正なる批判の銳刃を飾りつゝ、ありしかを見よ、

行幸はめでたきもの、上達部、君達、車などのなきぞ、少しそうくしき、萬の事よりも、わびしげなる車に裝束わろくて、物見る人、いともぞかし、説經なぞはいとよし、罪うしなふかたの事なれば、夫だに猶ほ、あながちなるさまにて、見苦しかるべきを、まして祭なぞは、見てありぬべし、下簾もなく、白きひとへ打ち垂れなどして、あめりかし、唯その日の料にとて、車も下簾も、したてゝ、いと口をしうはあらじと、出でたるだに、まさ車など、見つけては、何しになぞ、覺ゆるものを、況して如何ばかりなる心地にて、さて見るらん、わりのほりありく君達の、車の推し別けて、近く立つ時なごこそ、心ときめきはすれ、よき所に立てんといそがせば、疾く出で待つほど、久しきに居張り立ち上りなど、あつく苦しく、まち困する

程に、齊院の垣下に、参りたる殿上人、所の衆、辨少納言、など七つ八つ、引きつづけて、院のかたより、走らせてくるこそ、事なりにけりと、驚かれて嬉しけれ、殿上人の物言ひたこそ、所々の御前どもに、水飯くはずとて、棧敷のもとに、馬ひき寄するに、ればえある人の子どもなどは、雑色などおりて、馬の口など、しておかし、さらぬものゝ見もいらぬ、などぞ、いとほしげなる、御輿のわたらせ給へば、簾もあるかぎり取りおろし、過させ給ひぬるに、まごひあぐるもおかし、其の前に立てる車はいみじく制するに、なごて立つまじきぞと、強ひて立つれば、云ひわづらひて、消息などするこそ、をかしかれ、所もなく、立ち重りたるに、よき所の御車、人だまひきつゝきて、多くくるを、何處に立たんと見る程に、御前ども、唯おりに下りて、立てる車どもを、唯のけに退けさせて人給ひつづけて、立てるこそ、いとめでたけれ、逐ひのけられたる、ゑせ車ども、牛かけて、所あるかたに、ゆるがしめて行くなぞ、いとわびしげなり、さら／＼しきなぞをば、えさしも推しひしかずかし、いと清けなれど、又ひなび怪しく、げすも絶えず呼びよせ、ちご出し据ゑなぞ、するもあるぞかし、彼女は適勁莊重の文派を以て、眞摯沈痛の批判を下し、其の熱血に任せて社會の上層下層を熱罵し去り、其の一管の筆によく表裏兩面の實狀を眞寫し來りて、人をして一讀懼然として人類競争の益々急にして益々慘なるものあるを覺らしめ、或は呆然として文明の表皮のたのみ少なさを嘆しめ、或は又赧然として人類心事の彌が上にさもしきにあきれしむ、嗚呼是の巾幗の一女子の筆微に入り、妙に至り、時に又到底人意の及ばざる處に及び、王朝の天地爲に花に生色あり、人に生血ありの感あらしむ、亦偉なる哉。

吾人は前段清少が一代の傑作枕草紙の内容が如何に有意義にして而も又俊秀せる大批評たるかを畧叙しぬ。今や一轉して此の多情多恨なる清少の哀むべき境遇が、如何に彼女をして一代の大不平兒として、一世を冷眼し去り、ひきては一代の大批評家として及びやすからざるの域に達せしめたるに資する處多きかを説かんとす。古今幾多の評家は皆口を極めて清少の人格を排撃して曰く。清少は女らしからざる女也、變成的女子也、曰く彼女は傲岸なり、驕慢なり、と實に彼女は女らしからざる女なりしなり、彼女は傲岸なりしなり、將た驕慢なりしなり、事毎に冷罵し、物毎に嘲弄し、其處に些の同情無く、温み無きが如し、同列の女官を見ること牛馬の如く、百官有司を見ること奴僕の如く、平然として他人の悪口に日を送りたる彼清少の一生は、殆ど吾儘娘に學才のあるものゝその如し、時に意を得れば萬事を没却して、是が披露にこれつとむ、而も其の術の功妙にして狡猾なるや、切に公卿等を驅役して、己が學と才とを稱へしめ、陽に遜して、陰に誇る、虚榮心の盛なること無學の婦女よりも一層大に、而も才器あること有鬚の男子も及ばず、

……あやしく伊勢物語なるやとて見れば、青き薄様のまんないいと清げに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり「蘭省花時錦帳下」と書きて、末はいかに／＼とあるを、いかゞはすべからむ、お前のおほしまさば、御覽せさすべきを、これがするゑしり顔にたゞ／＼しき眞字に書きたらんも見苦し、なごれもひまはすほどもなく、せめまごはせば、唯その奥に、

すびつに消えたる炭のあるして、「草の庵をたれかたづねん」と書きつけて取らせつれど、返事もいはず、……うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、男ども皆扇に書きて持たるなど仰せらるゝにこそ、あさましう何のいはせける事にかと覚えしか。……

才機絶倫とは蓋し清少の謂なり。倏忽の間に人の言ひ能はざる處を云ひ、人の思ひ浮ぶる能はざる處を着想し來るの妙は、何人かよく及ぶものあらんや。咄嗟の事件は彼の爲めには唯一の武器なり、得意の舞臺なり、電火石火の間に介在して諧謔、諷刺、暗嘲の語、口をついて出づ曹植七歩の才と雖も豈及んや。この文の如き實によくこれをあらはすものとして稱せらる、而して其の末段切に筆を轉じて、間接法によりて自讃をなすの妙に至りては、益々巧妙なり、枕草紙を通じて是等己が才能の他人に賞讃されしを叙るもの十有幾項、皆其の趣を異にすど雖も、彼が我意と虚榮との反映なるに至りては、即ち一なり。著作は自叙也、枕草紙は清少の自叙として動すべからざるものなり、古來公然と自叙傳を著すもの元より多々なりと雖も、彼清少の如く、臆面もなく、己が美を稱揚するものに至りては、即ち甚だ慚し、紫式部嘗て彼を評して「清少納言こそ、したり顔に眞名書き散らして誇りか也」とこれ正鵠なる批評として執らるべきものならずや、蓋し彼女の虚榮は彼女唯一の生命なりしなり。然れども是等傍若無人なる自己賞讃の言辭は、彼女が放膽にして、無邪氣なる性狀を、偶々赤裸々に顯せるものにはすぎずと解し得べきが如しと雖も其の學を街ひ、才を誇るの機會をのみ是れ求め、聽ては是れによりて榮達の路を開かんとせし痕跡あるに至りては、又さもしからずや。嗚呼人を生むものは人なり、而も人を作るものは時代

なり、清少は平安朝に生れぬ。吾人は轉じて平安朝の大宮人なるものを訪はざるべからず、これ吾人清少を評するもの、彼が眞價値を余りに誇大するの弊を脱せざるべからざると同時に、彼女の心事の又誠に哀れむべきもの、在りて存するを知らざるべからざるを以てなり。

時世の推移は最も恐るべきものなり。人力の能く抗し得るものにあらず。人は時代の鑄型によりて作らるゝもの、清少の如き其の最も好例なり、つらつら平安朝時代を見るに藤氏一族の權勢は其の極に達し、朝家は其の弁髦の如く、百官は其の臣僕なり、驕暴至らざるなく、傲華極めざるなく、所謂望月のかけたることなき得意の時代なりしなり、而して皇后定子の待女たる清少は其の准家僕の位置にあるものなり。一方當時の女子を見るに、彼等の榮達と運命とは文才によりて下せられしなり、時代の要求は藤氏に媚ぶるを以て、世路を行く最良の方針たらしめたり、藤氏に媚るには時代の好尚たりし文學によつて以て近づくを最良の方法とせしなり、彼等平安朝女子の文學にわたけるは、彼の一般婦女子の嫁入道具に於けるが如し。文學は立身出世の道具にして、文學のための文學にあらず、趣味のための文學にもあらず、只名譽のための文學なりしなり、紫式部これなり、和泉式部是れなり、而して清少又この數にもれざりしを如何せんや。

翻て彼清少の初めて宮中に入りし當時を回顧するに、彼又一の婦女子なり、豈其の性他に異なる處あらんや、彼女の初めて宮仕するや彼女の年輩は最早青春の時代にあらざりき、而も彼女が枕草紙に記せる處を見るに、

宮に始めて、参りたる頃、物の恥かしき事數知らず、涙も落ちぬべければ、夜るくまゐりて、

三尺の御几帳の後ろに侍ふに繪など取りいでし見せさせ給ふだに、手も得さし出すまじう理なきし。彼や其の絶倫の鬼才と鬱勃たる才藻とを以てして尙この嘆むるを免れざりしにて、彼女の當時如何に初々しく、所謂宮女の如何に執拗にして厭ふべきものなりしかを知るべし、彼女は深窓に育ちたる女流として、如何でか父母に離れて常に仇敵の内に介在するが如き、宮女の生活と性格なるものを解せんや、四顧皆彼の舊知にあらず、四圍皆彼の未だ嘗て経験せざりし新事實のみなり、心細からざらんとするも得ざりしは、蓋し其の真相なりしならんか、静に是の一節の感想の含有する意義を思ふて、月明き夜、雪深き朝、清少の狭少な胸懐に去來せし、當時の心細さを想起すれば、后来彼が縦横の惡罵、論評、又一層の光彩をそうるを覺ゆるにあらずや

これはとあり、彼はかゝりなどの給はするに、高かつきに、まゐりたる大殿油なれば、かみのすぢなども、なか／＼晝よりは顯證に見て、眩げゆけれど、念とて見なす、いとつめたき頭なれば、さし出でさせ給へる、御手の、わづかに見ゆるが、いみじう匂ひたる、薄紅梅なるは、限なくめでたしと見知らぬさとび心地には、いかゞはかゝる人こそ、世におはしましければ、驚かるゝまでぞ、まもりまゐらす、

あゝ一句は、一句よりも切に彼女が初仕の當時のいかにおとなしやかなるものなりしかを現じ來るにあらずや、彼女が生來の野心家たるは疑ふべからずとするも、當時彼は皇后の寵遇を誇らんとする野心の如き、勿論これなかりしにて彼の己が才に誇りて、奔放の氣、雄麗の慨、男子をし、猶いと我心ながらもおほけなくいかで立ち出でにしぞと汗あえていみじきに、何事かを聞わん、かしこさかげと捧げたる扇をさへ取り給へるに振りかくべき髪もあやしきさへ思ふに云々

これ彼女が實情なりしなり、
蛟龍長く池中のものにあらず、果然、彼女の才華は疾風の如く流て出でぬ、新參の彼女が三千の

宮女の顔色なからしめし快哉のことをこり來れり、殿前の雪の出來事これなり、

雪いと高く、降りたるを、例ならず、御格子まゐらせて、炭櫃に火起して、物語りなどして、集り侍ふに少納言よ香爐峯の雪はいかならんと仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く、巻き上げたれば、笑はせ給ふ、人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、なほこの宮の人には、さるべきなめりといふ。

彼女は遂に是の第一の試問を首尾よくも通過せり、當時一般婦女の囑望せし文學的名譽は事なげにこの新參の手にをちぬ、彼女の才華は爛として衆人の眼を射りぬ、彼は茲に早くも奪ふべからざる立脚地を得たり、運命の幕は都合よく彼女のために開かれしなり、満場の破るが如き賞聲の

中に彼は得々として其の虚榮心を満し得たりしなり、あゝ彼又好運なる哉。然れどもあはれ彼女は切に占め得たる名譽の影にひそむ嫉妬の聲。譏謗の音をさどらざるべからざるに至れり、そのつらきこと初參のその如きくみし易きものにあらざりき、殆ど奇蹟の如く感せられたる芳名を持続せんためには、數多の難關をくぐり抜けざるべからざるに至り、彼女の努力と、人知れぬ苦心とは、益々急となれり。日夜當時の人心を支配せる玩弄的文學趣味を訪ねて汲々たりしなるべし、然れども新渦來れば舊憂何處にか去りぬべきものか、彼女がいかにか立ち出でにしぞ、とまではかなみし、宮仕の耻しきはいつの間にか失せ去りぬ、一日は一日と宮中に慣れ來り、宮仕の呼吸なるものも知るとはなしに覺り得たりしなるべし、百官と戯れて、

女房と物いひ戯れなどし給ふを、答いさゝか耻かしも思ひたらず聞え返し、そら言などの給ひかくるをあらがひ論じなご聞ゆるは目もあやにあさましきまで、あいなく面ぞ赤むや、……面も赤まざるに至りしは、恐らく半年をも出でざりしならんか、宮仕に慣れ來るに従て、目に映じ來るものは藤氏の公達が綺羅びやかなる容姿なり、花の如き女官の美貌也。かくして清少は自覺し來りぬ、自ら發明するを得るに至りぬ。文學は彼等女官の榮達の門に入る路を求むるの道具にして、道に得て后是れを進むの道具たらしめんには、余りに漠然たるを感知せり、彼思ふらく、如此き時代に在りて、世に處し、世を樂まんには、只二の道のみ、一は即ち誇るに足るべき容貌と、地位也、門地也。二は即ち切に世に調和し得るの能力也。此の才識横溢せる清少は、果して其何れに就かんことを求めしや。歴史に傳うる如くんば、彼清少は和泉式部が蛾眉豊頰、雲の如

き百官をして一瞥よく其の容色に恍惚たらしめたるの國色無く、又彼の温容花顏是に接するものを魅するてふ、紫のその如き親しみ易き温顔の在つて存せしにもあらず、彼が年三十にして宮仕せしてふを見れば、稍神經過敏なる、普通の容貌を有せしなるべし、彼は是の第一の要件には、先天的約束として失望せざるべからざりしなり。然らば彼が門地や如何に、彼の家門は低かりしにわらず、されどもまた高かりしにはあらず、結局當時萬能なりし藤氏の血にあらざりしは彼が最も遺憾とせし處なるべし、彼が父は梨壺内五人と歌はれたる歌人なれど、元より凡俗なる公卿の家何等家系の以て誇るに足るものなし、彼は第二の要件に失望せり。嗚呼如何に此の絶倫なる麒麟兒の天に稟くる處薄きや、彼女が煩悶思ふべし、彼は第一に失望し、第二に又も失望しぬ、このは只第三の切に世に調和する一事にあり。然れども、あはれ彼が明鏡の如き才識と、電光の如き機智とは、其の天成の放膽と相俟つて、到底世と調和し得べきものにあらざりしなり。抑も世に順應して、切に旗幟を變更し、八面玲瓏世に推され、推し返して、生を終るの靈腕は、元個人の天授の技能にして、萬人の能くし得るものには非らざるなり、況んや當時の社會は表面圓滑にして、内面陰謀奸策盛に行はるゝの世なり、是に處して圓轉たる如きは天質豪放の清少其人の如き到底能くし得るものにあらず。彼又第三の望たえはてぬ。望み遂に成らず、野心遂げられず、而して皇后が恩寵は清少を俟つこと益々重きを見て、彼等王朝の奥女官なるものが得意の武器たる、嫉妬と讒侮とをたくましくする事愈々急なりしは彼のはなをたかくひたれば云々の條よく其間の消息を傳へて余りあるにあらずや、あはれ其の初め初めて奉仕するや、夜明けて雨戸繰

るをさへ恥ぢたりしてふ初々しかりし清少の性格にはいつか一大變動の來らでは止まざりしなり。日毎に宮仕に慣れ、宮女に慣れ、百官に親しみ、常に藤氏一門の榮華を目睹しては、燃るが如き彼の野心と、功名心とは油をさくるゝこと日毎に大なりしなるべし、嗚呼吾をして權門に生れしめば、吾れ又彼等乳臭の輩の下に在るものならんや。あゝ吾れをして千人に勝るゝの容貌に生まざりし父母うらめしきかな、容顏花の如くんば月一層に色まさらんを、花一しほの香を増さんものを、觀じ來れば恨多き世哉、望み少なき世哉、否とよ吾は如何で嘗て父上の嘆きませし如く、……男子たらざりし身なりけん、吾れ男子ならば……あゝの嘆は、彼女が得意の瞬間となく、失意の瞬間となく、起臥常住忘れんとして忘る能はざる憾みなりしならん、皇后の恩寵を受くること大ならば大に、同輩の嫉妬を受くること大ならば大に、この憾は益々増大せられたりしならん、彼は遂に境遇に毒せられぬ、境遇と悪戦するの止むなきに至りぬ、天稟の粗放の氣と不屈の魂は、火に油を注ぎたらん様に燃ゆまざりぬ。吾が望は大なり、吾が野心は強盛なり、されど何れの日かよくこの大抱負をはたすを得んや、望は絶わたり、他人恨めし、されど門地望んで得べからじ況や容色をや、恨をはたす道何處にか在るべき、憂き世の悶え哉、とは彼が功名に憧れ名利に飢わたる心緒ふかく刻まれたる恨なりしなり、時に彼が衆人の前に博したる小功名の如き偶ま、彼女の偉大なる野心の一部をみたすにすぎず、これによりて平安を求むべく余りに些少の出來事なり、野心を満す功薄くして、野心をそゝのかす實却つて多かりき、彼れ一代の才女が煩悶思ふべきにあらずや。煩悶は煩悶を生み、懊惱は懊惱を増して、夢の如く、幾歲月を過しけん

日、彼は突然として覺れり、世は如斯きものか、吾が意叙べらるゝの日何日かは來べき、吾れ決せん哉と。茲に於てか、彼は遂に失望極まりて、自暴自棄の域に達せり、依りて又門地なく、容貌なく、愛惜なく將た宗教無く、信仰なし、門地、權勢たのむに足らずとせず、されど吾れ望んで得らるべくもなし、まして容貌をや、愛惜の如きは世に處する障碍なり、宗教は腐骨の女子の赴く處なり、吾れ罵らん哉 吾れ嘲らん哉。世を侮まし、世をあざむきつくして、初めて其處に慰安得らるべしと、一朝この惡魔の如き決心の彼女の心緒にきざし來るや、萬事は彼女の前に余りに笑ふべきものなりし、彼は同輩を惡めり、人をのろへり男子を嘲れり、婦女を追窮せり、彼の意に満たざるものは皆な不善なりき、彼の心に快とせざるものは皆な惡行なりき、傍若無人と云はゞ云へ、吾は傍若無人を欣ばんとす、不遜とそしらばそれ、吾れは不遜を蒙とせんとすとすは、恐らく彼の決心なりしなるべし。世にかほと恐るべき決心在りや、眼中人なく胸中惡辣の氣益々募らんとす世にこれに過る危険ありや、されど彼も亦哀れむべきかな。彼女は萬事を否認せり、されど讀者よ彼が萬事を非認せしは彼が萬事に見捨てられたる曉なりしなり。彼は傍若無人なりき、されど彼が傍若無人なりしは人吾れを追はんとす吾れ又彼等に關する處あらんやの意味より出でしなり。彼は同輩を惡めり、從て彼は恃みある同輩を持つべくもあざりき、彼女は皇后の殊遇を蒙れり、されど皇后は彼女の機才を愛せしなり、彼女を愛せしにあらず。子女行どの拮抗の道具として彼女を愛せしなり、彼女の性狀を愛せしにあらざるなり。彼女は遂に、其の熾裂なる偏見に何等かの調和劑を得べき道すら求め得ざりしなり。彼女の偏見は愈々増大され、彼

女の執拗は愈々執拗となれり、前程漠として、何等の光明なく、既往蕩として得て追想すべからず、彼女の大不平は何の日か醫せらるべき、あゝ彼女の心事は終始一貫晦暗にして不明なりき、其處に何等のよるべきものなし。枕草紙一卷彼の感想を記し、彼女の思索を叙ること數十百項なれども、一言宗教的信仰に及ぶものあるなし。時に佛寺の供養、宗教的禮拜の如きを説きし條あれども、彼女は是れを側面より見、之れを人事化して正面より望むを避けつゝあり、信仰問題の如きは彼女が批評眼の外なりき、着眼の度外物なりき、佛教的感化滔々として一世を歴し、猫も杓子も、皆之れ佛子なるの王朝に在りて、悲觀的思想を惡むこと、蛇蝎の如かりしは又以て異數とすべきにあらずや、其の因果して那邊にか存せし？、彼女は自暴自棄して世を白眼し去り、世を冷笑し去りて、心竊に憂しと見いたましと見ることもあるも、勉めて是れを蓋はんとせしにわらずや？、己が哀情を叙るは、世に降るなり、人に哀みを乞ふなりとは、彼女の執拗なる心事なりしにあらざらんや。一斗の血を吐きつゝも、一笑を以て事に臨むをたのしむは、自暴自棄の人のつとめて行はんとする慣用手段にして、彼等が笑の色は青色なり。清少も亦之の數にもれざるもの己が衷情を秘するを名譽として、強て世を強面に觀察し、世を嘲りをとするの手段としては暗夜一滴の涙痕をかくすに幾何の苦心を感じけむ。彼女は東三條家の隆盛時代に宮中に出でしと雖も、東三條の運命火の消え行くが如きにわたりても未だ彼女の宮仕の人なりしは事實なり、されど、彼は其の盛運を叙して悲運の繰言をかくしをいせぬ、一言其の末路に及ばず、是れ明に彼女が多情多恨の衷情を枉げて、彼女の自我の立脚地を歩まんとせしものにて、悲觀の傾向を有す

る語を列ぬるが如きは、世の哀みを乞ふか如く感せられしならん、いかで彼の強情なるよくこれに忍びんや。而も忘れ難きは彼の憾なり、捨て難きは此の望なり。一度何物かこの深奥に觸るゝものあらば、強て壓せられたる彼女の不平と、煩悶とは、忽然として其の全幅を顯はし來れり、抑へんとして能はず、制せんとして能はず、彼が衷心の苦惱いかに大なりけん。

…いさゝかなる御文を書きて賜はせたり、あけて見れば、

元輔が後といはるゝ君しもや、今宵の歌にはづれてはをる。

とあるを見るに、たかしき事を類なきや、いみじく笑へば何事ぞ〜と大臣ものたまふ

その人の後と云はれぬ身なりせば今宵の歌はまづぞよま〜し

つゝむことさぶらはずば千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來ましと啓しつ、

是の一段一字一句皆血によつて色つけられたる如し。實に彼の生きたる半面は、彼の文學の表面に顯はれたる如き樂觀的のものにあらざりき、華やかなるものにあらざりき、光榮ある考元輔の地位を回想しては泣き、晦暗なる前途を望見しては考元輔の地位を回想するは、彼女の絶えざる屈托なりしなるべく、此の文に誌せる「いみじく笑へば」とは胸奥の云ひしらぬ苦悶を壓へんとて強ひて人前を飾りかすかに苦笑してまぎらしたる謂なるべし、洒々落々と己が至らぬを吐露せしは、負けず嫌ひの彼女の言として解し難きが如しと雖も、是れも又自己裝飾の一法、窮策中の窮策として、時々世に用ひらるゝものなるを知らば足れり。

人生哀むべきもの失意の人に過るなし。轆轤不遇、世に納れられず、世を嫌惡すること甚しく、

人畜皆彼が仇敵にして、草木皆彼が怨家なり、眠るに易からず、食ふに甘からず、物皆彼の爲に怒色あるが如し、清少は即ち不遇失意の人の好標本、而も世に納れられざりしにあらずして、自ら世を疎み離れ去り、強て萬事を白眼しざらんとして、而も尙野心の卷に彷徨せしものなり、其の迷へること、誠に哀れむべしと雖も、其の血涙や又決して意味なしとせず。此等境遇の人幾何か世にあるべき。

枕草紙は古來多數の愛讀者を有するを以て名あり、思ふに貴紳となく、庶民となく、古人となく、今人となき、一度是に接せしものは、皆彼清少が機鋒の鋭敏なると、觀察の精緻なると、批評の奇抜なると、意氣の旺盛なるとに推服せざるものなし、彼れ一代の不平兒其の生を終る悲觀ありしと雖是等多數の渴仰者を千年の下に有するを得たるは、彼が胸中の熱火消さんとして消す能はざる者ありしに依れるなるべし、彼又瞑すべきにあらずや、されど思へ是等多數讀者の讀んで以て快哉なりとし、痛快なりとして、賞讃措く能はざる熾裂なる筆鋒は、彼が最も哀れむべき半面の反響にあらざるなきかを、吾が同情ある讀者よ、彼が晴々しき語氣の裏には、他人の窺及すべからざる鬱々たる憤情岩よりもかく横れるなり、漸くにして其の幾分をもらし得たる、彼が大不平は其の泉源余りに深くして到底一二時の快をやる語の如きに依つては到底永久の満足と慰安とは得易からざりしなり。されど彼の大不平は彼が天稟なり、譬へ他人によりて益激成せられたりとするも、天稟たるは疑なし、彼の世の論者が云ふが如く、彼をして他に立脚地を求めしめ、靜に彼の天才を純創作の方向に轉ずるを得せしめしには千載の下吾人は平安朝の大作物として源語以

外に或何物かを有せしやも保し難しとするが如きは、抑も清少の天質を誤解し、清少の個性を輕竄し、併せて彼の心事の如何に哀れむべきものなりしやを解せざるもの、彼に枕草紙一卷あるは、紫式部に源語一篇あるに豈に甲乙あらんや、是の草紙一卷彼の面目を遺憾なく、發露して余りなく、眞價値を表して遺憾なし。吾は只彼の駿馬の骨の問答を以つて、清少の意氣と眞價と眞相とのこり無く發現せしと、心中常に快として措く能はざるものなり。

春も秋もしらぬときはの山川は花吹風を音にこそきけ

花もみなしげき稍になりにけるなきか我身のなるかたまなき

悲しみて心身病まざる法

極樂蜻蛉

凡夫と達人と俱に悲しめり。凡夫は悲哀に身細り心つかれ食慾うせたり。達人は流涕瀧の如けれども、心身常に健なり。

凡夫一日之に問うて曰く、何を以てか然る。達人笑うて答へず、反問して曰く、何を以てか君

が心身病む。凡夫答へて曰く、我終日悲しめばなり。達人いよいよ笑ふ。凡夫解する能はず。他日、凡夫又問うて曰く、悲しみて心身病まざるの法ありや。達人曰く、善哉、善哉。達人又反問して曰く、悲しみて心身病むの法ありや。凡夫答ふる能はず。達人曰く、乞ふ答へよ、汝を答へなば我また汝の問に應へむ。

凡夫この無二の法をさかむと欲して、たのれの悲しみて心身病むの故を一心に思考せり。遂に萬物は幻影に過ぎざるやも知れず、故に物に悲しむは無益なりとし、これを達人に告ぐ。達人答へず。

次に世は樂しと思はば常に樂しく、物は美しと思はばすべて美しと思ひ到れり。之を達人に由げて悲しみは無益ならむと言へり。達人答へず。

次に一心にたのれの道に忠ならば悲しみも惱も迷ふ所もなしと思へり。之を達人に由ぐ「達人答へず。

遂に世の姿に依る所なきを知り、唯自己の心の自在力を知れり。之を達人に由ぐ。達人忽ち大喝之を叱責す。

凡夫何の故たるかを悟る能はず。

なほ思考すること三年、一日心身にはかにかく天人の如く太氣の如く、招かば芳香美花従ひ來るにいたれり。

達人遂に開口して之に問ふて曰く、悲しみて心身病むの法を教へよ。凡夫答へて曰く、我は今

然らず、されと世俗は悲しみを怖れ、これをのがれんと欲するが故に身心病む。

達人曰く、まことに然り、煩悶は皆これより生ず、異性を恐るゝ男女、人を恐るゝ人、不眠になやむ者、岩頭に立つもの等、みな然らざるなし。



文苑

爐邊閑談

た く づ み

席せきが凡二十疊も敷いてある。道具らしい道具は何も無い。唯入口によつた隅に一間の爐が切つてあるのと次の間との境の壁に極く高く柵らしいものが釣つてあるのが分る。ぢいさんの言ふが儘に足は濯がないで入口の席の處でとんとんとはたいてづか／＼と上つて行く拍子にバツと爐の火が燃える、ありだけの顔へ照り映える、と、一間が不意にいき／＼して來て自然木のまゝの梁からちら／＼と煤の降るのが見える、ぢきに又暗くなる眞黒な柱だけが微かに光るやうに思ふ、それも遂に黒にかへる。

漸く氣を落ちつけて室の中を見廻すことが出來た、一間の中に煤けてないものは何も無い戸柵も柱も席も眞黒た、白い筥の障子までが薄黒くふすぶつて居て、ぢいさんと媪さんの顔がうすぎたなくにおつた色をして居る。たつた一つ次の間との境の戸が紫檀色にすばらしく輝いて著しく調和を破つて居る、一枚板の一間の戸で巾五寸もあらうと思ふやうな黒塗の嚴めしい棧がついて居る。ぐいとそれを引くと向ふが佛間で昔し全盛の頃はとげた金箔に語りさうな大きな佛櫃があ

つて、馬鹿に大きい位牌が三つ、何かむつかしい由來のありさうな經櫃が列んで居さうな感じがする、疊は勿論縁つきでなくちやならんその縁に雲形が織り出してあつて、と自分はこの二枚の戸の語る想像に耳をかたむける、ゴ／＼とうなる音がして來る漸々近くなる、

大日嵐と云ふのであらう三方を圍んだ山から孤城を一もみと吹き下す風、よくこれで倒れんもの雜木林の枯葉をもむ風音が言律をなしたやうに一上一下異様な響を傳へて來る、何だか身の振るやうな感じがしてならん。

二百十日も、二百二十日も、曆もいらん此の山奥の一軒家では恐くはないのか、氣もつかんのか、婆さんは不調法な手附をして栗を刈つないで居る、娘は黙して向ふの隅の押入から夜具を運んで居る、ぢいさんは時々ちよ／＼近傍を見廻しては余念もなく火をいちぢつて居る、粗朶をほり込んだり割木を立てては倒したり倒しては立てたりして居る。

風は遠慮なく吹きしきる。

「その山の芋を何處へ出すのかね八幡へかねそれとも飛驒かね」と
しよう事なしに自分が尋ねて見る、

「八幡の方へ出すだがのう」と跡がありさうに切る、

「ぢいさんなんか何れ山の芋作るやうになつてから古いことだらうね、先代も、さうだつたかね」と此度は友が聞く

「うんにやわしが親父、わしになつてからでもぢやが、岩村様の御典藥様の御用での御藥畑の番

しよつたものさ、……年に黄蓮の一貫も上げりやのうゝとは極樂とんぼ、だつたわいハハハ……
黄蓮もだめだて和蘭薬が利くつてのう此の間の家の女郎が……

「面白いね薬作りが山芋作りか、しかし山の芋が鰻よりはいゝよね君、……山の芋だつたね鰻になるのは、さうだね鰻が山の芋になるんぢやなかつたやうだ」と相變らすのん氣な友は突飛なことを言つて居る

「ぢや何だね薬を作つて扶持を貰つて居たんだね？」

「うんにやお扶持でもないがのう、年に盆正月は御典藥様から傳つて頂戴物はあるし、おがかりものは一切御免だしお藥山の暇にちよくちよく田地でも打ちや樂に暮せたものさ、どうせ黄蓮といふ奴は七年でなげりや物にならんのでのう……」

いつも黄蓮を引つばつて來る余程黄蓮に未練のこると見える、美濃から飛驒へ入る道は二筋ある。去年の夏休暇も殆ど終る頃、自分の友で旅行癖を以て居ること……君が飛驒へ入つて見んかと云つて誘ひに來た、自分は十六の年知己の人につれられて飛驒へ入つたことが在る、而もその時、秋も末、不意に下呂の邊で雪に遇つてしたゝかな目を見たことを思ひ出して早速應諾はせなかつたのを、すぐに金澤の方へ出てしまへば子細は無いぢやないかと例の調子で中々しつこくすゝめるので、つい其の氣になつて八月も最早今日一日といふ日故郷を出立することにした、しかしこれが自分の不幸な運命の緒をなしたとは恐らく神も知らなかつたであらう。金山から萩原の方へかゝる道は一度通つた事のあるのと、名計り立派な本街道で

面白味はあるまいといふ友の説、一日に八幡を立てて烏帽子越にかゝつた。畑佐といふ處に一寸した鑛山があつたのを見つけ出して入つて見ようと友の云ふまゝに、汗くさいシャツ等借りて、裸になつて坑内へ入つたり等したので、元と原とあまり足は強くない自分は、そこから一里半自分と同じ苗字の此の村へ着いた時に最早大分弱音をふきたくなつて居た矢先、これはいゝ口實だと思つたので、世間に余りない自分の苗字と同じとはゆかしい是非こゝで一泊しようと、友に説いた、友は中々承知しないまだ日は高しせつせとあるけば今日中に飛驒へ入れるんだ等と、中々強硬な説を固執するので大分困つたけれども、丁度幸に少し雨模様だつたのを唯一の口實にしてどうどう此の家にとめて貰ふことにした。風は一入はげしくなつて來る。

「薬といふと甘草とか、芍薬とか、云ふものを作るんかね、こんな山奥で出來そうにもないぢやないか」

「うんにや岩村様の頃はやつぱりその近邊での阿木といつた處に居つたものだて」

「やつぱり岩村の近邊がよさそうぢやないかね、こゝぢや随分冬なんか困るだろう」

「ハ……色々仔細もあつてのうやつぱり天保錢は今時はだめだてハハ……」

虚笑の音が凄く天井裏へ響く風の音にまじつて谷に答へ峯に傳つてかすかに消えて行くような感じがする。火はたよりなげに消えかゝつて眼の開けて居れん程燻りだす、ちいさんは平氣なもの、うつむいて煙草の火をつけ出した、手刻の蓮の枯葉を切つたようなやつ、それでも何だかなつかしいような氣がする、此の二三年來煙草と言へば圓い封緘の貼つたのばかりだもの、しけて居る

のか火はぢき消れる、ぢいさん氣根よく何度でもつけて居る。黙つて柴栗を糸に通して居た婆さんが立ち上つて爐の隅にかけてあつたは、その蓋を取る、濼と立ち昇る湯氣に何處も此處も霞みかゝつたようにぼんやりして来る、自分はこの想像界の物らしい白い煙の中から漸々あらはれて来る、真白い髪の毛の少しばかり残つたぢいさんの頭を眺めて、非常に面白く思つたので婆さんがもう一度蓋をして、もう一度湯氣を立たせてくれよばいと思つてゐると

「ぼちが出來たぞい食はつしやれ」と婆さんが言つた。

都に住みなれたものには十里の途は苦しいものだ、然し椽ぼちのぢちそうは一層苦しいものだ、今日も途々昨夜の飯を語り出して、閉口々々とさんざん愚痴をならべて來たのだ、椽ぼちの外には何も無い、酒壺の首のとれたような物が火の傍によせかけてある、中に何があるか分らなかつたのが、ぢいさんは自分等二人に遠慮なしに食はつしやれと會釋しては、その内から先づ一つ自分に出した一尺五寸もある竹の箸の例の通り黒くなつたのでつかみ出した、田舎饅頭程の大きさの團子のようなものだ、手につかんでふうふうと二三度吹いて例の壺の中へつっこんだ、もやもやと湯氣に包まれて出て來たぼちには味噌が附いて居た、何だか味そうになつて來たから自分も一つ出してその通りやつて見るあつく、持てんのであちこち持ち變へて大に困つて居ると、婆も娘も傍へ來て自分の困つて居るのを不思議そうに眺めつゝ、平氣でやり出した一寸濫い？まづいものであつた。

「椽の木つてどんなものかね？」

「道にたくさんあつたぢやないかあの志久良の坂の兩側は皆んなそうぢやないか旅行家のくせに何だ

「ありや君朴の木さ……」

「そうぢやないよ朴はあんなにかたまつた葉なんか出やしないよあす氣をつけて見たまへ、

「うん、しかしその例の山の芋は一体どこで作るんだね

「脊戸の山だ」

「そうかね庭にある苞苴はそうかね」

「うんにや庭にかこつて在るじや」

「ね君山の芋が鱧になるつて中々面白い事云つたものだね、ね？」と友は又山の芋問題をかつき出した。

「そんなに面白いかね」

「山の芋と特別に云つたのが面白いぢやないか、ね、君!!さう思はんかね？」

「さうかね」

「一体なせ山の芋つて言つたんだらう山の芋でなくてもよさそうぢやないか只鱧になるだけなら」と根本問題に突き込んで來る

「じや君は何にするつもりだい黄蓮でもあるまいぢやないかハハ……矢つぱり山の芋が適當だよ」「さうでもないさ」と友は考へ込んでしよう。

自分は今まで見なかつた自分の脊の方を見る。山の芋の苞苴かとも思はれそうな何かの苞苴に隣つて、自分等の草鞋がいつの間にか庭の右の隅によせかけてあつて、この邊でぼつかといふ山路に荷を擔ふ道具と、蓑や笠が、その上につるしてあるのがぼんやりと分る、何日の間にか行燈がともして在つた。しきりにそれ等を見て居ると戶外の風の音が益々あれて來る、何處かの障子の破目を通る風がブルッど頂の中まで通るやうな響をたてる。自分はますます考にふける。秋は沈思の時である。春は人世に幅を興へるものに違あるまいが、秋は人間に深みを教へてくれるものだといふ事も争はれん、人間は元來足の着き方から横へは歩けないものだ横つ走りは人間の墮落だ、どうせ眞直に下へ足をつけた限りは考へ考へて下へならいくら陥つてもかまはんものじやないかと思ふ、そうすると豎に眞下へどん底まで陥つた時は大に自覺してなくちやならん筈だ、だから人間には秋があるのだ。

「うちは三人きりかね淋しそうだね」と仕様事なしに友が口切る、

「うんにや男坊主が一人居たが徴兵に取られてのう。」

と妙な顔をしてぢいさんが言ふ額の皺が妙による、口の邊の皺が左右對照になつてゐない、一言で言ふとまづい顔だ。

「戦争に出たのかね?.....」

「うんにや去年入つただ、」

「ここからでも徴兵に出なくちやならんかなア、.....」と友が驚いたように云ふ、友は時々萬事を

忘れてしまふ事が出来る頭だらやましいと思ふ、

「あたりまへサ、あのね僕の親父が或年飛驒へ入つた事があつたと思ひ玉へ、」

「うん、」

「根木谷つてね白鳥から八幡まで出る途だねそこを通る事になつたのさ、七里の間谷の中ばかりといふ處だね、南側は一面の石楠花、あの赤い花の咲く縁日なんかによく持て來るやつさ。」

「尺南位知つて居るよ」

「ヤ失敬、そうか、それでね道つて云へばね、じくじくした枯葉の枯つた黒土なんだね、じめじめ水が通つて居て一足毎に踝の處まで埋まるつてんだね、谷合といふ處で男を一人雇つてねその男が山刀で尺南の一丈もあるのを惜し氣もなく切り開いて行くんだそうさ、行つても行つても尺南ばかり時々峯の處へ出たと思ふと又ちぎ谷なんだね。小鳥一羽飛ばんといふ其處にね、處々蛇が四五匹づともかたまつてごころを巻いて居るんだそうさ、案内の男が尺南の枝でつくどばつと散つて消える、一町も行くと又かたまつて居る、そりや實に氣味の悪いつてあんな處はないつてね親父が話したがね、小鳥一羽居ない、生き物と言や自分と男と蛇ばかりだといふんだから、その筈だね。たつた一處家があるんだそうさ、七里の間に、

「家がかい、何が居るんだねそんな處に、」

「そこに六十ばかりの婆さんが獨りで居たそうさね、何するんかつてね、その邊の山の腹を焼いて蕎麥を作つて居るんだそうさ、それでねその婆さんの處で休ましてもらつて行くのだそうさ、

うどうほり出されたじや、こんな理屈かどこにあらうのう、それから、ふつつりそんな事ぶつてのうこないな山の奥へにげ込んだのさ、當座はお百姓にでもと思つたがのう、又小作程なきない業さらしはないものじやのう、地主様地主様と用もないのに頭さげて、八兵衛万作とよびすてにされるよりは、物を言はん山の芋がましだわい、小言も言はず苦勞もなしぢや、その代り糠もちと種飯で一生涯だアハ……」

火はまた消ぬかふる、ヒューッと横口の障子を吹く風がガタガタとそれをゆするとすつと下の方まで谷を傳つて通つて行くのが聞える、何れ戸外は眞闇に星一つないのであらう、煙ばかり吐いて居た櫓が時々ペロペロと蛇の舌のやうな焰を、その黄色いやうな褐色のやうな煙の間から出す、ちいさんがぼんと煙管をたく拍子に上を見ると天井裏か非常に高く見える、ゴーツと戸外でうなる、塵がハラハラと舞ひ下る、鼠一疋居そうもない天井裏から何か降りて来るやうに思ふ、友は薄着の襟を合せて今更らしく手をかざした、風はいやまじに荒れて遠くの山をなで、来る響は野獸の遠吠も其の儘である。婆さんと娘とが顔見合せて、アアアツとでも言ひさうにするちいさんの笑顔はひとり調和を破つて居る。隙も風は秋の末の冷かさである。

「君!!山の芋の考は着いたかね、何かいゝ趣向でもありそうだないか、鰻に化けるには毛があつて駄目ぢやないか」と友はまたのんきである、いつもの通り忘れた如く考て居た、

「……………」

一室はまた寂寞にかへる、山の芋の焼ける香がしきりにする、此度は友はしきりに薪の枝を折つて火にくべる、何をするつもりか知らん、先に入れたのが燃え切る頃に又次のを入れる、燃え切ると又入れる、何日までたつても大きな火にはならん、室の内は何だか薄闇くて陰氣でならん、こんな闇のやうな中に五人の人間の居るのは魔の好物であらう、自分はたしかアーピングかの本の内で化け物の出る夜の事をよんだのを思ひ出して、今にも丁度向ふの、あのよく光つた戸の處へ眼ばかりいやに赤い頭が出て来さうに思はれて、思はずぞつとすると、友はまだ枝をくべることをよさん。不意にちいさんが立ち上つたので、氣がつくと爐の上に着てあつた岩丈なさやのやうなものが火がにぶいので裏ばかり浮いたやうに、丁度寺の本堂につるしてあるあの天蓋のやうな風に見える、ちいさんはその上から松割木か何かの大きな奴ををろして、ほり込んでくれた、友は安心したやうに枝をいぢることをやめて火を見つめる、何を考へて居るのか、のん氣をうである。多分山の芋が鰻に化けて、鰻が干からびると薪になつて、それを折つて火にくべると又山の芋にもどつて、芋の焼ける香かするのだ、位に思つて居るんだらう、ちいさんが芋のやけて居るやつを外へ出すと、友が

「随分吹くね。」

「うん……………」

兎角話は、ど切れ勝である。自分は考へた、枝を折る折られるまでは折られるとは知るまい假令山の芋が鰻にならうと、栗のいがが海膽にならうと、そうなるまでは何とも思つて見んものに相

違ない、そうすりや釣針の心配も網の心配もあつたものじやない、只今は野猪の牙といったづら坊主の竹竿の用心さへして居りやいゝのだ、それも心配しなけりや一層安心だ、又それを知らんとすれば、もう心配なんかありやしないじやないか、考へ出した日には際限はないのだ今しがたぢいさんが云つたが、こゝの娘等も八幡なんかへ奉公に出さなきや一生涯絹の衣類を見なくても暮らせたのだから、不覺な事したものだ、しかしこのぢいさん等は分らんものとして考へて見ないだらうか、考へて見て分らんからよすのだから、椽ぼちで安心して居るからよいか外に何もないから安心するより仕方がないのだからか？

室内が不意に明るくなつて来て、つるしてある自在鍵がテカテカと光り出した、水の字のと扇の形のとがある、こんな處で字といふ物は非常になつかしい、實は自分等は字といふもので生きて居るのだ。

「おまへ方一体何勉強さつしやるじや？」ぢいさんは自分等に聞た

「……………」

「……………」

「むつかしいものじやろうのう、やつぱりお醫者様にならつしやるじやか、」

「いゝえ僕等はちがうよ」

「何だのう」

「……………」

「やつぱり裁判官にでもならつしやるじやろう」と翁さん何か思ひ當ることもありそうだ、暫くして、

『裁判官はいゝのう、あのでけい事取る罰金といふものが皆んなあん方の給金になるじや、』とどうぞう裁判官にきめてしまつた、しかし友も自分もまづうれしかつた、例の通り郡役所の官吏か小學校の先生と間違へてくれなかつた事を非常に感謝した、實は家を出てからいつもそんな目にあつて非常に迷惑し抜いた後であつたのだ。

「翁さん一体御一新の時はどんな氣がしたね」と友は又突飛である

「……………」

「御一新になつた時にどうして居たんだねあの騒動の最中に」

「うん、思ひ出して見りやひよんなものさアハ……」

「一体どんな氣がしたね？」

「別に何とも思やせんがのう一時は随分物騒だつたのう、こりや又亂世といふものかわいと思つたのう、武田の浪人知つとるじやろう」

「あゝ武田耕雲齋かね」

「うんあれがのう來た時なんどのう、騒いだものさ、町は焼き拂ふ、人は見付け次第殺してしまふといふ評判で、町々や村のものはみんなにぎり飯や鯉節しよつてのう山方の親類なんどへ逃げたものさ、わし等まだ年は若し、なんの氣もつかずでのう掛道までのら見に出た處をひ

つゝかまつてそりやびつくりしたがのう、どうぞ越前境まで人足になつて引つばられて行つたものさ、」

「めちやめちやにぶち切つたんでもなかんたんだね、」

「うんにやそりでもなかつたがのう、諏訪で勝つた勢でのう、道すぢの大名等々みんな留守中のやうな顔したものさ、」

おいさんは談り出した。武田耕雲齋の攻の上る話しは中々くはしいものであつた、道すぢの諸侯等の驚き方など目の前に見えるやうであつた、幕府の手前戦はんわけには行かず、戦へばいたい目見るのは知れて居る、加納藩なんぞ一勿論これはいざいさんがあとで聞いたのであらう、は埃まみれの甲冑をひきづり出して俄訓練に徹夜する有様、生憎馬は甲冑なんか見た事もないのだからおぢけてはねる、城代様が馬からころげ落ちる、御師範役ともあらう人が馬のまゝ壕の中へ飛び込んでしまふ、愈々太田あたりまで来たなんて風評するものが出来る、町家では皆逃支度をして夜晝なしにどしどし川を越えて尾張の方へ入つてしまふ、足輕なんかで夜逃して行方知れず等は随分出來たさうである、おいさんが云ふ、

「いくぢがないものさ、今でこそ兵隊と云や強いものじやがその頃はもう大抵は雇人足より劣りの奴等ばかりでの、」

「そうかね」と自分と友は相顧て笑ふ

「それでも加納様は貫物さ、運よくそれでものう途中から途を變へて、高富の方へ入つたといふ

註進が來ると、その頃早打といつたものでのう馬で飛ばして來て「只今高富の方へ風れ候」とかいつたものささうだ、」

「風と間違へてるね」と友は哄笑する

「大抵の大名は賄を出してねよけてもらつたんださうだ」

「さうかねおぢいさんなんか耕雲齋を見たかね」

「さりや再度見たがのう、立派な御老人だつたわい、武田様はさうでもないがのう御臣下の中には諏訪で分捕つあの信玄様の冑といふ四尺もある白熊の毛の附いたやつを被つて居た方なんかもあつたもので、そりやのう随分没義道な目にあはせた人もあつたのサ、」

「沿道のものなんか困つたらうね」

「そりや武田様はそんな目に遇はせるつもりもなかつたらうがの、目についた日には人足にひつぱり出されて、どこ迄も行かされたものさ、わし等も運よく越前境で夜逃して來たがのう、逃げそこなつてぶつばなされたものは數なしサ」

「何かね、その頃の戦争でものは面白かつたらう」

「うんにや、わし等がひつばられてからは武田様は戦争せなんだよ」

「鳥羽伏見なんかの戦争は見なかつたかね」

「わしはその内に流れて大垣へ入つてのう戦人足に雇はれて會津まで行つたものさ」
「そうかねそいつは面白かつたらうね聞かうじやないか」

雨はほんとうに降つて来た風は大分風いだようだ、時々バチリバチリと爐の火がはせるばかり夜は森々と更けて来た。婆さんも娘もいつの間にか寐てしまった。

「戦争つてものは恐いものじやのうわし等が大垣様の荷を擔つて段々と會津の方へ上つて行くのう運よう途では戦争もなかつたがのう、随分前に行つたものはひどい目にあつたそうだて、その頃の戦争といふものはこの鐵砲といふものも其の頃はまた種ヶ島と云つて、大名方でも鐵砲方もたんどはなかつたものでやつぱり刀や槍でやつたものでのう、會津の手前の何とか言ふ處で初めて死骸を見たがのう、堤防の上に三十人程も寐させてあつて中には女まで混つて居たものサ、大垣の青侍などは胆だめしをさせよといふ御家老のお仰でのう其の前で晝めしを食はされて居つたよハハ……なゝに戦争といつた處でちよろこいもので毎日代りに大名方が先陣を務めたものゝさうながあとから来る藩のやつ等は今日の戦争のはげしかつた事を知らせてやれといふのでのう道傍の百姓家の壁なんかへ人も居らんにやたら無生に鐵砲玉ぶちこんでめちやく／＼にしてはすすんだものだよ」

「馬鹿にして居るね」

侍共はみんなくたびれてしまつて五人分も十人分も刀をよせて青竹につるして互代りに擔つて其の頃のはやり唄なんぞ唄つて進んだものさ、それでもよく落ちたのう三十日目だつたかのう其の前の日に秤の玉をうつてよこしたんでのう城内は大砲玉がなくなつたわいなんで云つて居たものさハハ……それでお前會津攻めもすむとなると大垣様の勢といふものは大層なものでの

う、長州様や土州様と同じさ、一時はお江戸の町を歩いても他の藩の士兵はびく／＼して隅の方へよつて歩くのにのう大垣の士共は横へいな顔をして真中を歩いて居たのさ、やつぱり小原様がわらかつたんだわい、」

「さうかねそれからぢいさんどうしたね、」

「それからわし等は返つてしまつただが、世の中は中々一時はよくなかつたものでのう、盜賊なんぞ制し手はないのではびこつてしやうのないのサ、わし等函嶺で追ひはぎに遇つてひどい目見てのう、家へかいつた時は赤裸一貫さ、それでもよく治つたもので有い難い世になつたわい、やつぱり世の中の事は分らんものさ人間一生涯も色々變らにやのう、面白くないてハハ……」

さうだやつぱり分らんのだ、自分等はこの分らんといふ一語を得る爲めに働いて居るのだ、苦しんで居るのだ、ぢいさんは自分等より遙に傑いものだ分らんと知つて居る、知つても尙働いて居る。

風はいつの間にか止んで地虫の鳴く音がしんと響く、世は秋である。

跋坂元子龍詩後

赤井直好

子龍之寓東臺、時方春也、一日往訪之、春雨徐至、滿山櫻花、姿容冷艶、殊可賞焉、乃相與諷詠、

以伸雅懷、其後子龍潛心覃思、感憤讀書、竟至釀疾、往苒不痊、歸鄉而歿、余得訃痛哭久之、實歲辛丑也、子龍佐賀人、性敦厚樸直、有古人之風、夙游東京、入大學、修法學、尤究刑法、嘗謂余曰、法令制人於外、而道德正人於內、正於內者、無強制之力、制於外者、無涵養之實、是故綱常彝倫、以養德性之資、法制禁令、以明家國之治、內外相須、以定天下之民志、則風教由是以立焉、然世態轉移、事理糾紛、人情險側、智巧日進、則不得不須重於外制矣、是勢之所使然、而又誠易爲功也、吾擇其易者從焉、子爲其難、顧近時、疑獄數作、連逮證案、及數十人之多、使子龍猶在、則治獄當得其平也、而今也則亡、憶余與子龍締交、在歲辛卯、去辛丑、十有一年矣、夫十年之交、世之所稀、况莫逆若子龍者乎、今茲癸卯、春花正發、偶過東臺山下、追想當年唱和之狀、不覺淚之沾襟也、

龜谷省軒曰、悲惻之辭、不忍多讀、

うら枯

其月

折にふれたる

うら枯の千草の露に霜知るか夜毎によわる蟋蟀の聲
背戸の柿稻城の上の稻雀あゝふるさとの我が家に似たる

のく様と婆やの背なの幼な子が月に紅葉の手を合せたる
鯨寄る熊野が浦の岩端に今宵の月をひとり見てしが

隣家に若き女のみまかりぬと聞きて

さながらに寢棺に眠るわかき人のま白き頬よま黒き髪よ
薫香の香爐におつる音すらも聞く心地しつ伽の夜深み
時は秋黄菊白菊花おほし花もてかざれ花のごとき人
吾死なば花もて飾れうつろ舟に入れて流せとエレーンは云ひし
水の面を浮きつ歌ひつ流れ行く花のオフェリヤ面影に立つ

四高俳句會席上吟

初秋

初秋や 古き都の 日に歩む	紫影	秋暑し ビールの 酔の 晝寢癖	紫影
初秋の なつかしき香や 木犀花	同	五日前のラムネばかりの 残暑かな	静池
初秋やおのづからなる 雨の脚	静池	雁來紅 赤うなれどて 残暑かな	紅芙蓉
初秋の 句をまづ題す ホヤの傘	同	題多き 町の運座の 残暑かな	朽木
		銭湯の 歸り西日の 秋暑し	たいち

残暑

捨扇

二十五の 身は捨團扇 踊りけり
句も書かで 捨惜みける 扇かな
秋の扇 白きはもの、淋しけれ

栗

栗はめば 憶良が歌を 偲ばる、
ふめどく、しぶとき栗の 毬面よ

大徳の 頭危し 門の 栗
栗落ちて 秋十題を 終りけり

月

琴の音は 西片町か 月今宵
率士の濱 普天の民の 月見かな

秋の山

蕎麥刈つて 狸も出でず 秋の山
秋の山 休む砂地の 凹みかな
鳥の巢の あからさまなり 秋の山

芒

流れ矢に 馬逃れたる 芒かな

紅芙蓉

蛤城

秋雨

紫影

同

静池

孤月

竹齋が 笠でわけゆく 芒かな

柿

草刈つて 歸る娘や 草の家
村芝居 泣く子に柿を とらせけり

新酒

新樽の 匂ひうれしき 新酒かな

新酒汲んで 壯丁送る 村社かな

水夫楫取 艫に腰して 新酒かな

野分

煤散るや 野分のあとの 臺所

野分過ぎし 南瓜の面やケロリカン

野分して 早寝やうといふ子供かな

野分止んで 槍持みゆる 並木かな

あらしぎを 倒せ砕けと 野分かな

霧

朝霧や 京の宿屋の 川手水

花賣の 白川出づる 狭霧かな

孤月

墨村

美島

紅芙蓉

墨村

秋雨

紫影

同

紅芙蓉

雨峰

秋雨

紫影

同

人と馬と 霧の中ゆく 山路かな

朝汽車に 都の塔や 霧晴るゝ

霧の中に 吠ゆる我家の 牛ならん

夜寒

瘦せぎすの 妻の衣縫ふ 夜寒かな

小便をこらえて 寝れぬ 夜寒かな

縮めた戸を 締めたか 夜寒哉

別れゆく 夜寒の町の 右 左

錢數ふ 盗人の宿の 夜寒かな

渡鳥

航海二十日 左舷遙かに 渡り鳥

山晴れて 湖山閑也 渡り鳥

人の世に 喰はれに渡る 鳥どもか

鱚

泊り舟に 鱚の飛び込む 月夜かな

砧

稀に聞て 殊に砧の 哀れなり

紅芙蓉

秋雨

同

紫影

同

静池

美島

蛤城

墨村

美島

秋雨

紅芙蓉

紅芙蓉

紅芙蓉

後の月

山の湯泉の 裸寒しや 後の月

石 (秋季結)

沙魚釣れず 石投げ込んで 戻りけり

沖の石に 白き鳥ゐて 秋の海

秋雨

静池

花野

紫影先生選

丘の蔭に 砲車据えたる 花野かな

京菜植う 一角菊の 畠かな

天高く 裾野十里の 花野かな

花野より 出る流れや 水ゆるさ

行脚して 奥州に入り 暮るゝ秋

起さしに まづ鳴らしたる 鳴子哉

馬車馬の 背骨尖るや 暮の秋

行く秋の 鰯なま乾の 漁村かな

紅芙蓉

墨村

同

同

同

同

同

同

落日や 梢頭寒き 百舌の聲

美鳥

我が汽車の湖水を廻ぐる 夜寒哉
送り來し 女をかへす 夜寒かな

寝ころんで 鳴子も引て 讀書かな

同

借りて居る 十畝の園や 菊作る

雨峰

漱石と 猫と居るなり 菊日南

秋雨

花野くる君やみゆると戸に立ちて

同

末 枯 集

紅 芙 蓉

雨なくて 桔梗小さき 殘暑かな

秋暑し 凌霄花 散りつくす

負馬の 鼻の上飛ぶ 蜻蛉かな

閨に入るや 踊の太鼓 遠耳に

心ゆく ばかり泣かばや 秋の暮

哭

逝く母も 残る其子も 秋の暮

停車場に 汽車の動かぬ 夜寒かな



時 評

東洋の運命を論ず

△ ○ 生

今世界の地圖を披きて其の東方の地を見んか、北は彼の朔風雪を捲きて吹き荒むシベリアの平原を境するに アルタイ、ヤプロノイ、スタノボイ等の諸山脈を以てし、西は天山々脈によりて、中央亞細亞に接し、南は比馬拉亞の連峰雲を凌ぎて聳え、南麓には印度の沃野を控えて、水多く、山青し、其の北は崑崙山脈とくもに、西藏高原をなして、山高く、谷深し、東は海波渺茫、其の間に日本列嶋浮び、長白山脈の餘勢は海に出で、こゝに高麗半島となる、而かも中には黄河の流れ溶々として支那太古の跡を吊ひ、楊子の水は混々として未來を夢みて眠るが如し、これ東洋自然の形勢に非ずや。其の建國の状態は各異るところありと雖も、共に君主政體に於て發達し、其西方の民族は一時大に隆盛を極め、或は南方の經營となり、或は西歐の蹂躪となり、或は北方の征服となり、勢威宇内を統一せんとせしもそは只過古の夢と化し去りて、今や東方の民族は大に發展の機運に向ひしと雖も、大陸に於ては清朝極衰の時代となりて、其の分崩殆ど極まることを知らざるものゝ如し、これ東洋民族の歴史にあらずや。噫東洋の過去はかくの如く、東洋の

現在は亦かくの如し、然らば東洋未來の運命を臆測する夫れ自然の勢なるかな。余をして少しく論せしめよ。

夫れ歴史は過去の記録なり、而かも其の中に一條の人間活動の眞理を含み、幾分か其の未來の出來事を豫言するは、争ふべからざる事とす、されば今東洋未來の變化を知らんとするに先ちて、歐人が東洋侵略の歴史を考ふる亦無用のことに非ざるべし。彼の高加索民族が歐洲の中原に發現して、各其の中央集權を確立し海上の發見相次ぐや東洋侵略の大潮流も共に源をこゝに發したり、忽ち見る、印度の曠野に於ては英佛の競争となり、南洋の諸島は葡西の吞噬するところとなれり、而かも英の印度の競争に勝ちて、更にビルマを併せ暹羅を屈するや、佛は東に出で、安南を呑み、後英佛の連合軍となりて北京城下に和を講せしめ、この間に於て露は烏拉留山脈を越えて一人の誰何するものなく、シベリアの大平原を占領し、其のゴサツ兵は、東端浦蘆斯德に達し、中央亞細亞には英露の角逐となれり、勢かくの如し豈靜止せんや、其の六大強國が相率ひて北京城を陥れしは恰かも雪前之霞に異ならざりき、露英獨佛各割據するところとなりて、老帝國の運命且夕に迫れり、折から滿韓の地に於ては日露の衝突となりて、干戈亂れ血迷るの慘狀を呈しぬ、これ歐人が東洋の侵略の大潮流にして數世紀間進んで止むところを知らず、凡そ一物が他の一物に壓迫を加ふるや、其の反動を生じそれと、其の力を争ふは必然の勢にして、ポーランドの末路、合衆國の獨立、以て證するに足らん、然るに彼の歐人が正義を解せず、平和を望まず、其の侵略主義を續行するに於ては、今や黑龍の河畔、長白の山下、硝煙の雲、干戈の聲、名殘なく消えし

と雖も、其の二大潮流相會して、狂瀾空に駕し、怒濤地を動かし、船覆り岩挫くるの慘狀を演ずべきは言を俟たざることとす。

この時に當り少しく我が帝國の位置につきて觀察せよ、開國三千年、この間に於ける固有の發達はいふに及ばず、儒教入り、佛教來りて、燦然たる支那印度の文明は、この中に同化せられ、この中に發育せられて、今や首尾二千里の蜻蛉洲は歐米の文明を吸収しつゝあると共に、東洋文明の叢園となれり、かくの如く東洋諸國と我國との關係は、決して一朝一夕のものにあらず、さればこれ等の國々の衰亡は我が帝國の枝葉の枯るゝといふも過言にあらざるべく、枝葉衰へんか幹部亦保つに由なく、島帝國の末路思ひやられずんば非ず、特に東洋文明の保護者たる我國の興亡は東洋諸國の興亡を意味す、これを以て余をしていはしめよ、東洋前途の運命は我帝國未來の運命にありと。

然らば帝國未來の運命は如何となす、これ余輩の知るべからざる範圍に屬すと雖も、而かも刻一刻世界的大旋風の中に深入して、日一日興亡の一大分點に進みつゝあるは智者を俟たざるも明かなる事とす、こゝに於てか吾人は悄然として恐れ、蕭然として怖ぢざるを得ず、されども吾人をして意を強うせしむるものは他なし、俊傑の事業これなり、時勢英雄を作るか英雄時勢を作るか我れこれを知らずと雖も、而かも國家及社會が一大危難に會して存亡の中に介存するや、天俊傑を下して國運を危きに救ひ、國家社會を泰山の安きに置くことは吾人の往々見るところにして、米國が黃政に苦しみつゝある間にワシントンを出だし、獨乙聯邦の瓦解せる時に當りてビスマーク

を生じたるも、時勢に激するところあればなり、今や我國の境遇はかくの如く、而かもこれを左右するは獨倭の手にあり、而して倭は多く其の時勢に於ける青年の中に養成せられつゝあるを見る、これを以て余は斷言す、帝國の運命は只其の青年の双肩にのみ存すと。

帝國の運命を決することは倭傑の手によりて成ることは上に論せしが如し、噫これ等の倭傑は何れに向ひて彼等の才を試みらるゝか、これ亦余輩の知るところにあらず、只古英雄が不朽の事業を述べてこの文を結ばん、英國が印度の競争に勝ちて、英帝國の統治に屬せしめしものは、クライブ其の人に非ずや、この時に當りて、印度の形勢は日一日と熟せり、果然、巨腕の倭傑は商館の手代より出でたり、見る見る二十萬方里の印度の沃野を經營し終りぬ、而して祖國をして富強世界に并ぶものなく、東洋に於ける千古不動の大磐石を築き終りしは、いかなる地、いかなる人の手腕ぞや。

彼の西方の空を睥睨すれば韓山満水、幾萬方里、長白山麓の風は人なきを悲み、鴨綠河岸の水は人を待つものゝ如し、一步進まんか、四百餘洲の大平原は茫乎として限るところを知らず、誰れかこの民を教え、この地を利すべき、崑崙の風、音颯々、楊子の流、水溶々!!

これを以て之を是れば、東洋の運命は余輩の決して知るところにあらずと雖も、歐人にして其の侵略を續行するに於ては、歐亞の大衝突を見るべく、而して東洋の運命は帝國の運命に存し、帝國の運命は其青年にあることを論ずるものなり。

學海時言

富田水月

予や一個の無骨漢淺學不才哲學を知らず宗教文學を解せず、神を崇信するべく餘りに偏狹に佛陀の光明に浴するべく餘に邪見なり真にお恥づかしき次第なり、銀雪高き芙蓉の峯碧水深き琵琶の湖汝の祖先の墳墓はこの靈地にあり汝の骨を埋むるもこの聖地行け々皇室を中心とする二千有余年の歴史を翳せるこの崇高敬仰すべき國家に向つて猛進せよと叫ぶ聲胸裡を動かす、予はこの聲に勵まされ責任を國家的に感じ果ては宗教となり信念となれり別に人生の上より打算して理不理を知らず愛すべくして愛し信すべくして信するなり。

今や建國の理想建設の新時代に生れ祖先の遺圖を奉じ二十世紀の曉天にこの使命を果さんとして高等學校に教を享く我等青年何たる多幸者ぞ。然れども單に有難し、盛なりと感ずるのみにては何の役にも立たず何か自ら信賴すべき正確なる基礎の上に立ちこの革新の新時代に處せんとする覺悟が必要なり予をして少しく説わらしめよ。一夕友來りて曰く君が机上獨英の書堆積す辭書と頸引して得る所大なるべし然れども君記せよもしそれ以上眞の人間となる利器の練磨を等閑にせば君が刻苦する學問や幽靈的にして沙上の建築の如し異日千尋の功を一簣に欠かん君想此處に到れるや否やと大に予が肯綮を衝くものあり善哉言やこの友にしてこの言あるを喜ぶなり。又近時説をなして言ふ者あり大學は學問の叢淵にして國家有用の人材を養成する處その教ふる所は高

等専門の學にして國家に貢献したる事尠少にあらざるも天下學生の師範たるべき大學生の品性は甚だ低下したり、斯くの如き價值なき人物を以て國家の料理を托するは危険千萬なり、先づこれが改良の一法として高等學校を純然たる品性の修養場とすべしとこれ素より奇矯の論全く首肯すべきにあらざれども少しく耳を貸すの論ならずや。

智識は敬すべき物覓むべきものに相違なし誰とて之を否定するものなからむ然れども智を人生の總ての物となさば大なる誤解なり、例へば智は金蔭繪の重箱の如く品性はその中に收めたる御馳走の如し如何に重箱が立派なりとて團子が容れありては何の有難みもなき也。識者高等學校生徒の語學の不足を訴ふや急なれども未だ德行低下の不平を聽かず金蔭繪の重視せらるゝ世なる哉。スマイル品性論の第一頁に言はずや

Although genius always commands admiration, character most secures respect.

The former is more the product of brain power, the latter of heart power; and in the long run it is the heart that rules in life, men of genius stand to society in the relation of its intellect, as men of character of its conscience; and while the former are admired, the latter followed.

科學的眞理は恒久の眞理にわらず文明の思潮急激にして昨日の眞理は今日は破壊せられてその片影を止めざる事あり、朝夕辭書を三拜し科學萬能を信仰する輩少しく心して可なり、黄金は貴し然れども金は循環性のもので又努力にて得らるべきもの黄金の前に主義なく主張なく蒞弱の幽靈輩三思反省すべし、生きては不動不變敬慕措く能はざらしめ死して無限の生命を傳ふるものは人格の力なり、さりとて衣食足つて禮節を知ると孔子も謂ひしが如く適者生存のこの活社會に於て經濟問題を否定し、文明の賜者なる眞理を排斥して所謂道學流の空想を擔ぎ廻るものにあらず、

管だ健全鞏固なる人格は處世の骨子たる活動力なりこれを修めこれを練るは個人の利益なりと云ふ迄なり決して隠者流の死せる人格を云々するものにあらざるなり。正面より觀たる學海は形式内容整然として難すべきなき程なれど感じ來れば田園將蕪との嘆聲を洩さざるべからず、皮膚の見解を以て學海を論ずるものは先づこの荒野に鋏を下さざるべからざるを記せよ。

吉村校長が常に訓誡せられて自ら教育せよとは校長の一貫せる主義なり主張なり、今の學校制度は智に偏し修養を教ふるや誠に不親切なり教師は生徒を教科書視して生徒は教師を字引にすとは云ひ得て痛快なり自ら教育せよとは味へば味ふ程甘みある語なる哉。

一方には又學界の吉兆を示しつつあり見よ近時書肆店頭曰く何曰く何修養の書を以て滿さる學生現時の思潮の流るゝ方面を見るに足るこれ一時歐米皮膚の新文明に心酔せし萍的學生が内省修養の要を自覺せし反射にして社會の上層に翱翔する所謂紳士は師とするに足らず學生自らを教へんとする大決心に職由せずんばならず。

前言を繰り返さば智識と黄金とは人生の外部にして只だ半面のみ内部の修養と並行して眞の人生の生活に入るを得るなり。大學は専門の學理研鑽に忙殺され修養の時代にあらず、眞面目なる品性の陶冶は高等學校時代に於てせざるべからず。斯く論ずる予猶修養の初階にもあらず衷心恥づかしき次第なり、然れども只々反省この理想に向つて進まんとする覺悟を有する也その修養の

方法の如きは各人の工夫すべきもの茲に貴重なる誌面を費して暇々するの要なきを信するなり。

圖書室へ

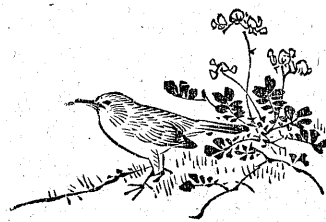
生等は朝な夕なに圖書室の其大なる恩恵に浴するものに候從て圖書室へは最早此上の我儘は申し上げ難き義理に候へ共尙少しく心に厭き足らざる節々、改善を懇望し度き事の候まゝ御注意迄に申上候

第一、かの圖書目録の義に候かの目録を納めある箱は奈何なる理由のあつてにや意地汚くも圖書室の最も光線の不充分なる隅に設けあるととて少しく曇天の際には殆んどカードの文字を識別し能はざるのみか加之に目録臺の低き爲め著しく腰を屈し頭を垂れざる可からざる爲め所要の書を探り出すには言ふ可からざる不便を感じ甚しきに至りては只に目録をこれ見るのみにても非常の疲勞を來し全然肝心の讀書を妨げ可申候、新來諸君は殊に此不便を経験さるゝ事と推察し奉候、此は未だしもながら夜間に至つては一層切に目録臺の不便を感じるにて候、四個の目録臺は室の隅にありながら一個の電燈の之を照らすなき爲め暗中に物を探る心地仕る可く候止むなき折は傍らに讀書しつゝある人の電燈を借り來つて目録を探る外これなく候、夜間はウカと圖書館へは參られざる程に候、依て先づ目録臺の足を今少しく長くし且つ光線の都合宜敷き邊に移轉せしめたる上夜間は此目録臺専用の電燈を設けられ度候、殊に後者は恐らくは急中の急を要するものに候ぞ

第二は辭書の點に御座候、現今はウエブスターは各人隨意に使用し得るは大に吾人の感謝する段に候、さはさりながら高等學校に於ては英、獨二國語は殆んど同程度の熱心に於て研究せられ、殊に學生の多くは獨乙辭典を引用す可き必要に迫られ居候、爲めにウエブスターは悄然と辭書臺に蹲居するの不景氣あるもサンデル、フリーユゲル其他の獨乙辭典に到つては常に拂底を告げ居る有様に候、故にウエブスターの任意に使用せらるゝ如く獨乙辭典もハインネにせよサンデルにもあれ同様隨意の特典を催け下され度候、して能ふ可くんば室の中央位に辭書臺を新調致されなば吾々の便利は中々の事と存候

第三、漸く目録より摘出して書を借らんとするに生憎其書は無しとて斷はらるゝ例少しとせず殊に稍々専門かゝりたるものに於て然りとす、かつて我友の一人到底自ら購入に堪わざる書あり、幸圖書室には既に購入してありしより雀起して其書を借出さんとしたるに、其は某先生の許にありと。一月を経て友は之を貸出さんと試みしに未だに某先生の許に在りと、二月を経、三ヶ月を経ても常に同様の答辨を得るのみにて、遂ぞ友は其初一念を達する能はで卒業し行けり、不平は一様ならずし事と信す。又さる人は、生徒が斯る書を讀めるものか、と嘯きて幾年に亘るも其書を圖書室に返納せざる向もあるやに洩れさるゝ、學生の讀書力の蔑侮せらるゝ至れりと云ふ可し、そは兎に角として新刊書(又はよしや専門に亘るものなりとて)などは一處に滞留して多くの人の需用に背く如きあつては面白からざる現象と存候へば其邊とくと御思案を煩はし度きものに候

以上の節々俄かにはねたり、不申候へば漸を逐うて幾分たりとも吾人の意に添うやう改善あらま欲しく候（かたし）



雑報

野球部に寄す

四月散りそむる櫻花を排いて我校運動部鐵蹄に萬沙を蹴ちらしつ洛陽に入り三高と格闘す、しかも戦我に利あらず、殊に我野球部は花ならぬに渾身春泥に塗みれて退く、顧みすれば九人の撰手肉破れて血班々、勇士の鐵腸哀むに堪へたり、當時を追懐し惡戦の跡を趁へは心胸の中波渦き返り思はず鐵拳を握りしめ、京洛の空を凝視し、萬感胸中を徂徠す。

ここに省みるあつてか野球部は秋九月直に新チームを組織し嚴肅なる規約を結び猛烈に練習を續行す、校庭日として白袴黒衣の健兒縦横に馳突するを見ざるなく、亦新天朗らかに澄めるの時鏗然聲ありて熱球の風に激して蒼腹を極む

るの壯觀に接せざるなし、かつては松にしがらむ古城の邊り草茫々と簇生し狐狸やこれ住むらんと怪まれしグラウンドも今は清淨一草根をも止めざるに至る、蓋し我野球部あつて以來、貌前凌後の壯快事ならん。

蒼白萎靡の徒、學窓に踞り放焉として自己以外を蔑如し去り世と關らざる間に卿等ひとり斷々と美しき犠牲の熱流を滴らし苦心慘愴す、或は傷はれたる野球部の汚史を灑がんとする稜々たる高邁の意氣を窺ふ可く或は人格不斷の榮光を認む可し、聞くならくば再舉南下の策は就り、卿等の眸は常に南の方洛陽を睥睨し一舉にして之を憑陵し、樓蘭を斬つて笑みて歸るも庶幾にあらなんとすと、然りながら洛陽の驕兒これ侮り易からざる敵なれば輕々にして兵を行る如きは大に謹む可し、且つや夫れ新チームは新來氣銳の士其過半を占むこれ正さに春秋に富むもの

也、練磨老成の機會を得ること多きもの也其前途を望めば希望の光満々たり。

然し一朝寒天くまなく北國の空を覆ふては霜霰轉たしげく、地銀白の布を張つては熱球を飛ばすに由なく、踴躍を二陽來復の曉に待つのみ其間三多月、昨は原頭の勇士、今は互寒の羈に纏はれて空しく案上に浩嘆す、人間の心境必ずしも、一なり難し、昔の雄企漸く弛みを生じ素定の畫見る間に消耗せられ理想の霜柱あえなく傾くもの也。

野球部の活躍は萬人の胸裏に伏在する深刻の希望なり、希くば卿等嚴冬の爲めに銜轡を弛くし心を蕩するなく、かの歷山を転し南風の詩を歌ひ勞逸前に變ずるも其初一念を更ふるなき古聖賢に恥づるなかれ (かたし)

校歌集に就て

我雜誌部の號外として校歌并びに寮歌を集めて一卷となし是を校友一般に頒てり、絶えて久しく此擧なかりし爲め寮歌等にして逸調なるもの二三散映して本卷に納むる能はざりしは遺憾なるも回を逐ふにつれ是等は收容す可し、素我歌集の發行は一面には散逸せる校寮歌を一本に聚めて我校友の高韻の跡を慕ひ以て過去の我校風を參照し又一面には後來筆を校寮歌に染めんとする士に資する所あらんためなり、故に此際熱烈よく時代の精神に合し高調正しく六百校友の琴線と共鳴する壯絶の歌調の出でんことを期待す、豈に區々技巧や色彩のフヒヒトをこれ要せんや、眞に我校友の歌ふや低し、微温なり (かたし)

第十九回卒業式

七月三日至誠堂に於て第十九回卒業證書授與式を舉行す、卒業生氏名左の如し

●第一部 英法科 (三十二人)

中山隆吉	石川	西村傳八	新
品川主計	福井	山崎喜登一	長野
卜部正一	茨城	河津仁	愛知
丸山精一	富山	大谷確造	山形
河合良成	富山	澤野養方	石川
和田弘	東京	千田勘兵衛	石川
井上英	埼玉	高橋武濟	埼玉
久嶋精一	東京	野依次郎	福岡
高田貞男	東京	栗田五百枝	茨城
平松憲夫	新潟	松倉正秀	富山
東條和義	新潟	太田恭治	新潟
入江正太郎	大阪	岡雪松	秋田
宮下達意	東京	伊藤正親	島根
眞館保	石川	安江安吉	石川
竹山茂樹	静岡	石井俊平	千葉
安藤榮吉	秋田	榊澤虎次	新潟

●第一部 獨法科 (二十五人)

●第一部 文科 (十八人)

三邊長治	富山	泉崎三郎	北海道
藤井悌	石川	服部順次	岐阜
秋山要	栃木	松岡邦	宮城
森岡二朗	奈良	下村良三	滋賀
大森隆泰	福井	南鐵太郎	兵庫
湊三郎	秋田	今岡卓爾	廣島
岩淵六平	栃木	大田原清美	東京
山田敬之助	東京	唐崎有三	山口
正力松太郎	富山	吉野勝六	長野
杉浦公庸	静岡	南慎一郎	富山
豊田亮三郎	徳島	大塚眞次郎	岐阜
玉井利七郎	富山	高野多助	茨城
大脇哲二郎	新潟		

●第一部 工科 (二十五人)

岡部龍玄	富山	藤田寛隨	福井
牧野純一	三重	英秀環	石川
松崎覺淳	富山	青麻永明	山形
中倉修五	新潟	護俊雄	滋賀
安藤圓秀	愛知	小笠原秀實	愛知
香川健爾	山口		

密田良太郎	富山	浮田國彦	熊本	杉浦翠	東京	鈴木寛一	靜岡
秋田政一	三重	矢柴美雄	大阪	織田益吉	愛知	羽下昂治郎	新瀨
石川直二	石川	吉澤謙太郎	石川	小川重雄	東京	孕石泰鎮	滋賀
青木精一	栃木	市川濟一	千葉	高澤壽	新潟	田島互	埼玉
關見起平	埼玉	中村琢治郎	兵庫	吉川元民	愛知	荒見多三	石川
淺見起平	埼玉	佐藤正香	新潟	關谷吾一	長野	豐原信一郎	新潟
木村嘉次	東京	船本章二郎	島根	瀨尾貞信	新潟	畑野誠一	新潟
多田精策	新潟	鎌形勝彌	東京	竹内松次郎	福井	長田勝芳	長野
八田與一	石川	大内靜雄	東京	松田善四郎	茨城	塚本良禎	神奈川
衣斐清香	東京	小栗庄二	富山	岡本清次	石川	勝田貞治	石川
牛村喜勇	石川	都野正一	山口	船津頌二	埼玉	河合東太郎	石川
古屋五郎	山梨	小栗清次郎	東京	松川十一郎	新潟	芹澤賢雄	静岡
石谷精一	愛知	小栗清次郎	東京	成川權二郎	富山	米澤末治	青森
●第二部 理科 (十八)							
田上他吉	石川	朴澤三二	宮城	大森教圓	長野	桑原安太郎	茨城
西久光	石川	若林善作	富山	後藤基幸	北海道	岡村城介	長野
飯盛里安	佐賀	江原眞伍	茨城	白崎重治	山形	杉下尙一	富山
小野澄之助	神奈川	坂部重壽	山形	渡邊龍	岐阜	星信雄	新潟
大地原誠立	石川	竹田智昇	岐阜	福岡勝吉	島根	室本吉太郎	北海道
●第二部 農科 (十八)							
古谷榮三	神奈川	河上春生	滋賀	辻小出石太郎	廣島	川端恭三	新潟
三室戶善光	京都	山中巍	巖手	松村義郎	長野	高田義直	石川
石原清逸	岐阜	山本和藏	三重	戸田國雄	京都	菅原健松	富山
●第三部 醫科 (三十三)							
村澤吟次郎	長野	村澤吟次郎	長野	村澤吟次郎	長野	村澤吟次郎	長野

中上森造 福岡山

叙任辭令

六月廿四日	補第四高等學校生徒監	教授	中野 嘉作	講談部委員長	吉村 政行、藤井 鏡、川島 俊	西田幾多郎
同	同上	教授	三竹欽五郎	同 委員	河合 義文、西 英盛、岩井 武雄	宮川熊三郎
七月廿五日	依願免本官	助教授	吉崎佐次郎	演說討論部委員長	八波 則吉	茨木清次郎
八月十日	依願解雇	同	河野義一郎	同 委員	高橋 郁治、宮川熊三郎、藤井 乙男	藤井 乙男
八月十五日	講師ヲ囑託ス(兵式)	講師	大野 平作	同 委員	永井 謙雄	赤井 直好、垂水 延秀
八月廿一日	依願囑託ヲ解ク	講師	永井 謙雄	同 委員	水戸幾次郎、ウオルファート、スタイニル	浦井鯉一郎
同	講師ヲ囑託ス(獨語)	講師	小牧 健夫	同 委員	ベテンヂア	中野 嘉作
同	同	講師	赤井 直好	同 委員	同	浦井鯉一郎
同	同	教授	佐治 秀壽	同 委員	同	浦井鯉一郎
九月二日	教頭ヲ命ス	教授	中野 嘉作	同 委員	同	浦井鯉一郎
同	幹事ヲ命ス	教授	水間 好茂	同 委員	同	浦井鯉一郎
同	生徒監事務取扱ヲ命ス	講師	磯田 正謙	同 委員	同	浦井鯉一郎
九月四日	任學習院教授	教授	田部 隆治	同 委員	同	浦井鯉一郎
九月十一日	任第四高等學校教授(獨語)	教授	石倉小三郎	同 委員	同	浦井鯉一郎
同	任第四高等學校教授(英語)	講師	水戸幾次郎	同 委員	同	浦井鯉一郎
九月二十日	文官分限令第十一條第一項	教授	村上 珍休	同 委員	同	浦井鯉一郎
同	第四號ニ依リ休職ヲ命ス	教授	吉崎佐次郎	同 委員	同	浦井鯉一郎
十月八日	講師ヲ囑託ス(兵式)	教授	吉崎佐次郎	同 委員	同	浦井鯉一郎
同	囑サレタリ(職員ノ分)	教授	吉崎佐次郎	同 委員	同	浦井鯉一郎

ロンテニス部委員長 市村 壻
 同 委員 吉崎佐次郎、手下宗次郎
 フットボール部委員長 磯田 正謙
 同 委員 小林 平藏、大野 平作、小谷仁十郎
 遠足部委員長 林 並木
 同 委員 高橋 周而、石倉小三郎、小牧 健夫
 佐治 秀壽、大森多三郎
 漕艇部委員長 田中 鉄吉
 同 委員 久保田圭右、小田切良太郎、山瀬 時吉
 石倉小三郎
 音楽部委員長
 (生徒ノ分)
 講話部委員、一ノ二乙 京極 逸藏 一ノ三甲 小室文次郎
 二ノ三甲 村上 福胤 三ノ三 久保 謙躬
 演説討論部委員一ノ三甲 新井 堯爾、一ノ三甲 北澤 哲
 一ノ二甲 植村 義重
 語學部委員 一ノ三乙 楠木 福松 一ノ三乙 西村 大串
 一ノ三甲 加納 憲治 二ノ三丙 藤崎小三郎
 一ノ二丙 阿部 眞見 二ノ三甲 今川 淵
 一ノ三乙 白嶺 慶敏 三ノ三 小林鐵太郎
 二ノ三甲 上阪 巖 二ノ二乙 永松 政寛
 一ノ二甲 河尻 淨環 一ノ二丙 池野 察通
 一ノ三甲 加納 憲治 一ノ二甲 江南 文三
 一ノ三丙 尾佐竹 堅 一ノ二丙 阿部 眞見
 雑誌部委員
 一ノ二乙 狩谷 縉之 一ノ二丙 佐藤 正俊
 一ノ二丙 富田愛次郎
 一ノ二丙 山下方四郎 二ノ二甲 石崎 一雄
 三ノ二 木谷 彌一
 一ノ三丙 原 康治郎 二ノ三乙 宇野 正雄
 一ノ一丙 本多 政樹 三ノ二 栃木喜和次
 三ノ三 水嶋 政一 一ノ三甲 久田 文二
 二ノ三甲 細 貞松 一ノ二甲 河尻 淨環
 一ノ二乙 藤崎 勝 二ノ三甲 不破 楠三
 三ノ二 石渡 眞八
 ロンテニス部委員 三ノ二 矢ヶ崎 連 一ノ二丙 稻本 鼎
 二ノ二甲 中川幸太郎
 一ノ三甲 佐藤謙之輔 一ノ二甲 古山 志郎
 二ノ二乙 西村眞一郎 二ノ二乙 小林眞砂雄
 三ノ二 宮田 格 三ノ三 茂野 哲夫
 二ノ二甲 築瀧 成一 一ノ二丙 西山 新
 音楽部委員 二ノ二甲 築瀧 成一 一ノ二丙 西山 新
 ○各組代議員去ル九月廿五日左ノ如ク當選セリ
 一ノ三甲 加納 憲治 一ノ三乙 楠木 福松
 一ノ三丙 原 康治郎 二ノ三 上阪 巖
 二ノ三乙 古川 清治 三ノ三 木村眞之助
 一ノ二甲 河尻 淨環 一ノ二乙 金田 才平
 一ノ二丙 稻本 鼎 二ノ二甲 中川幸太郎
 二ノ二乙 山本 一郎 三ノ二 佐竹 清

一ノ一甲 神田外茂夫 一ノ二乙 米村 純一
 一ノ一丙 山田 敏一 一ノ一丁 玉泉 大梁
 二ノ一甲 進藤 隆一 二ノ一乙 早上 陽清
 三ノ一 山田 國廣

○圖書室増加書目録(明治三十九年六月以降)

第一門 哲學書類

著者名 書名
 アリストートル メタフィジック
 同上 シー・シーレ
 クローノフィシエル ライブニッツ
 ヘフチング キールケガルト
 ヌールソク オーガスナンの哲學
 シルレル ヒューマニズム
 ウルリチ ゴット ウンド メンシ
 フハルケンベルヒ 近世哲學史
 カント クリチック アルライネンフェルヌンフト
 フハルケンベルヒ 哲學史
 プーレーヌ ヘーゲルス ヒロソヒー
 ベンケレー メンシリヘン エルケントニス
 ナトルプ エルケントニス プロブレム
 ヒスロップ 心理研究の不可解
 カール プリマート テス ウイレンス

デウエー
 ゼルビーロツク
 キルヒマン
 スチルネル
 ウノルド
 カルペンター
 チーグレル
 ワイツ
 ダーロツク
 ミル タイリー
 ゴッテス
 サンズヤナ
 ヘンデルソン
 ホワイテ
 ラツソン
 トルストイ
 アイスレル
 松本 義亮
 根本 通明
 安井 衡
 仁井田長群

ロジカル セオリス
 プリチツシユ モーラリスツ
 レヒツ ウンド モーラル
 デル アインチーグ
 アウフガーベン ウンド チーレ
 テーチング チア イングリシユ
 教育史
 教育學
 チルドレン
 ホーイ エンド ガール
 教育學
 ライフ チア リーヴン
 エルスキーン チアブリンラーセン
 ヤコツプ ベーメン
 マイステル エッカート
 ライフ(英譯)
 哲學字典
 四柱推命典義秘傳錄
 論語講義
 經訓堂墨子
 管子纂註
 毛詩補傳
 宋元學案

韓愈
元良勇次郎
松雲 處士
三省 堂
下田 次郎
黒田、土籍
甫守 謹吾
松崎 覺本

清澤 滿之
同 上
大崎 龍淵
若原 敬經
中村 春雨
織田 得能
佐藤 一齋

第二門 社會法律經濟書類

ホブソン
フイッシャー
エルツパツチエルス
イツクベール

韓文公論證筆解
心理學綱要
伽婢子
聖德餘聞
西洋教育事情
明治學制沿革史
學校諸儀式訓話錄
首楞嚴義疏注經
碧巖錄講義
親鸞聖人全集
遠羅天釜
懺悔錄
精神講話
白隱禪師傳
佛教いろは字典
舊約物語
法華經講義
言志錄

イムベリアリズム
コロニアル ガバメント
モーダン ジャーマニー
インダストリアリズム

パツシユカ
ホブソン
ロリヤ
ロバートソン
フックス
トンビー
コンラッド
山内 正瞭
クロチール
ボロツク
シユーバルト
ギゼー
コンパトリオツ
コーン
ガーチツト
坪井正五郎
大河平隆光
吳 文 聰
有賀 長雄
齋藤 隆夫
河上 肇
左右田喜一郎
田中 穂積

經濟讀本
キヤビタリズム
エコノミック ファウンデーション
經濟の礎
國民經濟學
インダストリアル レボリユーション
レーホアパーチー
エコノミックス
ホイルス ナブ ウエルス
コンモンロー
憲法と行政
ドイッチエ ビュルゲルクンデ
クラアレクチュア
ツール ポリチック
スタチスチカル アブストラクツ
人類學叢話
日本移民論
人口政策
保護國論
比較國會議
經濟學原論 上
信用券貨幣論
高等租稅各論

高野岩三郎
壺谷 廉
小川郷太郎
石川 文吾
桑田 熊藏
高橋 秀臣
福田 徳三
高橋 作衛
同 上
安藤三喜之助
江 木 衷
跡部、毛戸譯
市村 光惠
同 上
松本 修平
戸水 寛人
松波仁一郎
工藤 重義
宮嶋 次郎
仁井田益太郎
横田 國臣
田邊 慶彌
内閣統計局

財政原論
經濟學各論
經濟學通論
賣買論
工業經濟論
日本帝國の富力
經濟學研究
戰時國際公法
平時國際法論
物品會計論
現行民法論
國際民法論
行政法原論
醫師の權利義務
不動産登記法要義
法律學小史
日本商法
豫算決算論
刑法要義
民事訴訟法要論
獨庵哲學
法律經濟辭典
第廿五統計年鑑

内閣統計局
第三門 歷史地理書類
エーゲル
ヒル
アーザーハッサル
ケムブリッヂ
ハンナー
マイエル
ベルンハイム
マイエル
同 上
ホルン
ケンベル
ゼーレー
同 上
ロビンソン
ワットソン
ヘンデルソン
リープ
ホームメル
スオホタ
フラータ
オンケン

第廿一回日本帝國統計摘要
歷史地理書類
十九世紀史
ホストリー ナブ ツプロマシー
佛蘭西史
近世史 ナボレオン卅年戰爭
東部亞細亞史
ゼララル ホストリー
ゲシヒツウイッシエンシヤフト
近世史
古代史
中近世史
日本歴史
ライフ オブ スタイン
グロースチアブリチシポリシー
西歐史
ストリー ナブ フランス
獨逸史
露國史
ゲシヒテデスモルゲンランデス
グリヒツセ ゲシヒテ
レスダウラチオン
レフォルチオン

- チヤムバレーン
- カルロル
- アクトン
- ストライド
- ステーベル
- フランデンブルゲル
- ライヒ
- 本多淺治郎
- 大嶋貞益譯
- 早稻田大學
- 小瀧 道喜
- 竺 道契
- 南 滙張
- 那珂通世譯
- 關 脩齡
- 安積 覺
- 松村 介石
- 神藤 才一
- 有賀 長雄
- 木村彌四郎
- 山本 盛秀
- 明石吉五郎
- 原 秀四郎
- 古事記
- ボリチカルヒストリー
- 近世史講義
- エムバイヤビルダー
- 臺灣旅行
- プエルケールス プロブレム
- エンサイクロペヂアアヲンソソ等
- 西洋歴史參考書
- ネルソン傳
- 日露戰役史
- 信長記
- 續日本高僧傳
- 歐亞紀元合表
- 成吉思汗實錄
- 戰國策高注補正
- 烈祖成績
- 萬國最近史
- 近世外交秘史
- 大日本歴史 上
- 淡路國名所圖繪
- 三國名勝圖會
- 石川縣地理詳説
- 日本國史地圖
- 山上萬次郎
- 徳富猪一郎
- 徳富健次郎
- 佐藤 寛
- 久保 得二
- 淺井 虎夫
- 僧 虞淵
- 小林 杖吉
- 林 森太郎
- 物 茂郷
- 日本帝國政治地理
- 七十八日遊記
- 順禮紀行
- 嶺捨山考
- 日本歴史寶鑑
- 女官通解
- 和漢駢事
- 地、人、書、名、新辭典
- 有職故實
- 度量衡考
- フンクチオン テナリ
- プロハビリチ
- ハイベルホリクフンクシオン
- ホーヘレンゼオデシ
- アプストラクトガオメトリ
- フエクトレンレヒマンガ
- ホーヘレ アナリシス
- ヂフエレンシヤル エケーシオン
- ウイヒチーゲン クルベン
- チンテルフンク チナオネン
- エリプチック フアンクシオン
- 高等教育代數學

- 人見忠次郎
- 荒川 乙吉
- カタラン著長野氏譯
- ラムゼー著菊池氏譯
- 松村定次郎
- 荒川 乙吉
- 宮本 藤吉
- 第五門 理化書類
- トムソン
- プランク
- マッソン
- テール
- プランク
- レープ
- グロース
- ロルフ
- フィンドレー
- ボイカー
- シエンストン
- 池田 清
- 志田 順
- 近藤清次郎
- 松本 義亮

- 補習代數學
- 三角形作圖題分類
- 幾何學定理及問題
- 近世平面幾何學
- 平面三角法
- 數學要義
- 英和數學新字典
- ライト
- 勢力保存論
- 物理學
- ホトグラヒー
- 熱力學
- エレクトロケミストリー
- イカネン
- パラリスコープ
- フエース ルール
- サイエンス
- グラーヌ アローインク
- 物理學計算法解説
- 參考實驗物理學
- 化學計算法解説
- 千支一覽

- 第六門 博物書類
- エルステン
- ゲーキー
- バーンス
- チヤンバレーン
- ミルラー
- ヒリッパス
- ベルヘー
- ヘッセ
- ザックス
- ランドラ
- 大森 房吉
- 恒藤 規隆
- 石川 成章
- 小倉 延足
- 安東伊三郎
- 三好 學
- 松村 松年
- 佐々木忠次郎
- 市村 塘
- 第七門 工學美術書類
- リウロー
- バル
- アップライド ゼオロジ
- ファイルド ゼオロジ
- アイス フォルメーション
- ゼオロジ
- マイニング ゼロジ
- ガーア テボジット
- アプスタンムンガ
- アプスタンムンガスレーレ
- バガ ウンド テーチヒカイト
- 生理學
- 地震驗測法一斑
- 日本土壤論
- 礦物學
- 礦物學講義
- 礦物學講義
- 礦物界ノ現象
- 日本高山植物圖譜
- 日本千虫圖解
- 日本樹木害蟲篇
- 顯微鏡實習摘要
- コンストラクトル
- エラスチシチ

マイエル版

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

日本文學史

文法正誤法

異本出家集

應用修辭學

蜻蛉日記解環

正三位物語(寫本)

方丈記抄

歌林四季物語

河海抄

曾我物語

徒然草奥儀抄

明治文學史

水沫集

新古今集詳解

てにをへの研究

徳川時代文範

國語研究法

太平記註釋

修養讀本

保元物語講義

平治物語講義

弘道館記述義

林 森太郎

明治書院

藤岡作太郎

加藤 咄堂

坂 微

鳴 長 明

同 上

四辻 善成

高屋 近文

岩城準太郎

森 鷗 外

塩井 正男

廣地千九郎

岡田 正美

藤岡 勝二

國文學會

八波 則吉

三木五百枝

今泉 定介

漢 文

藤 田 彪

ヘルテル全集

ホフマン全集

レナウ全集

ルードウィヒ全集

プラテン全集

チーク全集

ウーランド全集

ヨハンズ

ゲー エーレ

カッチェンステッヒ

文 典

ゼックス ノベレン

フレンチ、セルフト

アカメロン

エスベラント

ジャナー

萬葉集代匠記

和歌名數(寫本)

俗諺論

御伽草子

紅葉全集

釋 契 冲

藤井 乙男

今泉 定介

尾崎 紅葉

鹽谷 時敏

僧 大 顛

金 檀

沈、德 潛

仇 兆 鰲

韓 愈

王、士 禛

梁 同 書

和 雜 書

天田 玉郎

太田 善男

伊澤 修二

森 鷗 外

朝倉 無聲

國語調査會

淺野和三郎

大町 桂月

第九門

山川 幸雄

片山 寛

字 書

漢文類別

四六文章圖

高青邱全集

瀛奎律隨刊誤

唐詩別裁集

詩 觸

李義山詩集

杜律詳註

愚庵遺稿

文學概論

音韻新論

ゲルレトハウプトマン

日本小説年表

口語法調査報告書

英文學史

作文百科辭林

獨逸故事熟語字典

英語難句難語字典

ヘルマン、ダクシヨナリ

クライチス、レキシコン

エンサイクロペヂヤ

讀書作文字典

故事熟語字典

漢和大辭林

俚諺辭典

中等百科字典

國漢文辭典

新案漢字典

熟語新辭典

隸 篇

辭林

家庭辭書

社會新辭典

讀書紀數略

青年修學指針

日本語速記術

日本藥局法

圖書總目錄

家

古文舊書考

圖書刊行會

新群書類從

同

新井白石全集

同

續々群書類從

同

源註餘滴

同

玉葉

同

古今要覽稿

同

平家物語(長門本)

同

近藤正齋全集

同

夫木和歌集

同

春在堂叢書

同

螢雪軒叢書

同

笠翁十種曲

同

容齋隨筆

同

新百家註林

同

伴信友全集

同

燕石十種

洪邁

圖書刊行會

同

雜誌

レビウ ナブ レビウス

子ーチユア

ケミカルニュース

エンヂニリーリク

サイエンチフ井ツク

同

上サップルメント

同

アメリカン

ヒロソヒー ツアイトシユリフト

コトマリーシヨナー ナブ エコノミック

ハイバード ローレビウ

ホタニツセ セントラル アラット

同 上バイヘフテ

ヒロソヒカル マガジン

ボタニツセン ガシエルシヤフト

數學教育

數學年報

ヒンリヒ 出版書四半年報

中外英字新聞

地學雜誌

史學雜誌

哲學雜誌

東京物理學校雜誌

東京經濟雜誌

國際法雜誌

アメリカンシヨナー ナブ マゼマチックス

外交時報

歷史地理

文章世界

工業雜誌

植物學雜誌

動物學雜誌

人類學會雜誌

昆蟲世界

マシーソン コンストラクツール

日本經濟新誌

太陽

地質學雜誌

帝國文學

六合雜誌

工業化學雜誌

東京化學會誌

大日本山林會報

シヤパン クロニクル

獨日郵報

通商彙纂

倫理講演集

特許公報

實用新案公報

(以下次號)

寄贈雜誌

東亞同文會報告 八八ヨリ九一

校友會雜誌 二三、二四

同 會

麻布中學校同會

學友會雜誌 八、九

嬌々會雜誌 九二、九三

一橋會雜誌 三〇ヨリ三三

六 校 二八、二九

校友會々報 一一

校友會雜誌 九、一〇

學友會雜誌 一七

嶽水會雜誌 三六、三七

龍南會雜誌 一一九ヨリ一二一

校友會雜誌 一五、一六

無 盡 燈 四、五、七

學友會雜誌 一五

躬行會雜誌 三二ヨリ三四

東 亞 二〇ヨリ二四

學友會雜誌 四

獅子ヶ城 一三

城 北 四七

同窓會雜誌 一八、一九

校友會雜誌 一〇

十全會雜誌 四四、四五

同窓會雜誌 一〇

校友會雜誌 一六六ヨリ一六八

修 養 一三

第七高等學校同會

福岡中學校同會

東京高商校同會

北野中學校友會

石川第一中同會

岡山醫專校同會

石川師範校同會

第三高等學校同會

第五高等學校同會

第六高等學校同會

同 社

札幌中學校同會

躬 行 會

東 亞 青年會

京都府三中同會

佐渡中學校同會

東京府四中校友會

愛知醫專校同會

徳山中學校同會

金澤醫專校同會

高知縣一中同會

第一高等學校同會

高田中學校校友會

縮友會雜誌	一五	神宮皇學館同會
校友會雜誌	六	延岡中學校同會
尙志會雜誌	七六	第二高等學校同會
校友會雜誌	一〇	大成中學校同會
鯉城	一六	廣嶋中學校友會
校友會誌	一一、一三	東京高師校同會
有斐	七八	斐太中學校友會
南海	二〇	大阪高商校友會
七生	一四	嶋根縣三中校友會
校友會雜誌	六	飯田中學校同會
同窓會報告	三七	安積中學校同會
華陽	四三	岐阜中學校同會
和同會雜誌	四〇	長岡中學校同會
桐陰會雜誌	三六	東京高師附中同會
會誌	九	柏原中學校學友會
校友會誌	一四	愛知縣四中同會
輔仁會雜誌	七二	學習院同會
校友會雜誌	一一	三重縣二中同會
志頁峯	四	石川縣四中校友會
校友會雜誌	四四	開成中學校同會
楠、若葉	二	四條畷中學校友會
校友會雜誌	八	石川縣工業校同會

部報

演說部報

◎十月三十一日(木曜日)

四高唯一のフェストタハなる秋季運動會の近づきし爲め人心轉た其處にのみ傾ける折から、物理教室にて本學年第一回の演說會を開けり。

眞摯なる聽衆八十有余、辯士も亦十有余名に上り演じ盡し述べ去りしは大に痛快なりき、只時間之余りに遅れし爲め宇野君以下三名を残したりしは遺憾なりき。要するに誠に望多き船出なりき今や英法三年を中心とせる火曜會は討論に於て大に圖南の翼を張り我演說部も亦大に復活せんとす吾界も亦大に多望なる哉。殊に演說部は毎月必ず例會を開く筈なれば辯を愛するの士希くば大に奮へかし。



- 開會の辭 一、三、甲 新井委員
- 學生の謬見 二、二、甲 渡邊得司郎
- 雜觀演說 一、一、乙 福田太一
- 時代思潮を論ず 一、一、乙 小林一郎
- 英雄主義と凡人主義 一、三、乙 楠木福松
- 偶感 一、一、乙 永田四郎
- 事勿れ主義と事あれ主義 一、二、甲 京極逸三

- 上越と四高 一、一、乙 中村泰治
- 我輩と角力 一、二、丙 小林退
- 天才とは何んぞや 一、一、乙 宇野耘純
- 我が教義 一、三、乙 色部貢
- 隨想録を論ず 一、三、丙 尾佐竹堅
- 閉會の辭 一、三、甲 北澤委員

◎朗讀會

演說部の活躍につれ朗讀會新たに起らんと

す、その例會を開くの日も近きにある可ければ諸君が愛吟詞章名論を提げ來て大に北辰校の趣味や好尚に資するに吝ならざれよ。(かたし)

講話部報

◎十月二十五日

植村正久先生至誠堂に於て Christian Conversion に就き二時間に余る大演説あり聽衆溢れむばかりなりき。

◎十月二十九日

ビショップ本多庸一先生來校せられ「品性の人乎果た境遇の人乎」の表題を掲げて一時間程朗朗たる音吐にて自家の實驗談を加味して品性問題と解決せられたり。

我校今や漸く偏知的傾向を脱し次第に内省的となり、やがては深痛なる心靈苦悶の聲を聞く、

時しも二先生を迎へて不可言甘美の信仰の福音に接す、兩先生の人格の深殿に潜めるの榮光は忽ち吾人の小さ胸に久遠の慰安の影を投じ濁ける我等を解脱の境地に導き給へる心地しぬ、當日の演説を纏めて茲に載す可かりしも會誌編纂の都合上これを次號に廻はしたり。(かたし)

劍道部報

高岡中學對本校劍道試合

曩に當地櫻章校の健兒北下隊を組織し高岡中學に挑戦せしが、立山嵐の一陣に空しく花を散らしてより、高岡健兒の意氣頓に揚り、遂に今回十四名の粹を抜いで本校の壘に肉薄し來り、十月二十七日無聲堂に於て雌雄を決するに至れり、

試合の狀況左の如し、

紅白三本勝負

審判員 小關 教政

紅軍(高岡)

大將 大西繁外
副將 沼田友茂

廣瀨 悔人

山田 與作

村上 榮吉

江守 精二

三邊 次吉

加藤 管定

浦田 平次

福島 幸治

永井 富雄

高倉外次郎

中川 藤喜知

村上 勇吉

白軍(四高)

大將 渡邊 二郎
副將 宇野 正雄

岡田 國衛

原 康治郎

朽木喜和次

本多 政樹

進藤 隆一

富田 武彦

檜田 太市郎

宮野 專太郎

田島 榮吉

石黒 利吉

横田 直

泊 武治

都賀田 茂穂

雷名四隣に轟きし強の者、敵の先鋒猛將村上と満場肅然たる中に威儀堂々と立ち上る、先鋒は重任なれば味方の士氣を双肩に擔うて双方自重の態度、彼れ一進すれば我れ一退、我れ一進すれば彼れ一退、肅々たる堂裡太刀風の音と觀者が筋骨の鳴るあるのみ、稍々あつて泊は續く二太刀に見事村上を切るや返す刀に中川を斃し敵の機先を制せしも、あはれ高倉の爲めに討死し、高岡軍の趨勢今や盛り返へされんとせしも、眞影流の名士横田が振ふ輕妙不測の太刀先に高倉

先づ四高軍の先鋒泊、嘗て櫻章校劍道部に於て

横へて脾肉を嘆ずる十勇士、大將渡邊頻りに美

髯を掀げしも宜なりけり、蓋し高岡軍は勝敗の數に於ては劣れりと雖其劍士が態度壯重森嚴、一度劍を執りては心外に刀無く、敵前に敵無く、心を以て心を撃つ点に至りては四高軍と何等徑庭する所なし、四高劍道部が心裡自然の勝を修めて無形の地を占むるを以て其精神となすもの全く之と合体す、當今漸く虚飾に流れて外見を主とし勝負をのみ争ふ傾向あるに反し正々堂々の態度實に吾人其同志の士を得たるを喜ぶなり。(日生)

野 球 部 報

野球部は南下の擧以前に在りては、甚だ振はざりき。六百の健兒蟄集する北辰校裡、此快技の振はざりしは何故ぞ、雨雪の多きもとより其因たるべし。好敵手の皆無なる亦其因たるべし。

然も其部費に於て他高等學校否中學校に比してすら甚しく少額なりしは、野球を益々不振の窮地に陥らしめしなり。然るに本年に至り、三高の之れに比すれば僅かに其三分の一に過ぎずと雖も、先輩の盡力、委員の奔走等により、例年に比し多額の部費を得たるは、野球發展上、大に賀すべき事なりと信す。

本部今夏栗田久島鈴木等の諸君を大學に送りて以來、新來の諸子に待つ所多かりき。而して一度部員を募るや、之亦例年に無き多數の好球兒を得たりしなり。

晴雨は天の主る所、人力を以て如何ともすべからずと雖も、其好敵手にありては、何ぞ北國に之を求むるを要せんや。足一度南すれば、東海風暖なる處、幾多強野球團は嚴然として立てるなり。好敵手は欣然として我を迎ふるなり、而して今や我が野球部は、比較的多額の部費と、

例年に無き多數の好球兒とを得て本學年の發程を始めしなり。前途亦多望なる哉。然れども、もと野球部有つて四高ありしに非ず、四高有つて初めて野球部ありしなり。されは、其發展如何は二三委員の左右する所に非ず、實に全校諸君の後援に待つ處甚大なるなり。幸に本校今や多望の前途を有す。願くは、全校諸子の後援により十分の發展を遂げしめられん事を。

野 球 部 日 誌

九月二十三日(土曜) 新來の面々に二三の古顔が交つて、新撰手候補者撰定の爲試合をした。

結果、關口、和智、秋元、野村、飯田、清野、山田等の諸子が撰定された。(其後三本、宇尾の兩君も撰まれた)

九月二十四日(日曜) 前日と同様の試合あるべき所だったが、あまり欠員が多いので中止する事となつた。

九月二十五日(水曜) 石川一中から試合の申込が有つたから出場者をいゝ加減にきめて、一寸練習をやつて見た。

九月二十六日(木曜) 前日同様の練習をした。

九月二十八日(土曜) 石川一中が来て、試合をする。一中は此夏休に慶應の人が来て一寸教へたとかで、大した意氣込でやつて來た。なる程スタイルも慶應式で腕も夏休前よりは、たしかに上つて居る。こゝちでは中學との試合でもあるから、新學年開始早々で腕前の所もよくは分らぬが新來の人を多く出す事になつた。

中 辻 村川 田村 木岡 佐泉
 一 西 小 齋 藤 船 藤 平 小
 IB RF CF IIB C IIB LF SS P

本校 邊部 元渡 尾田 智野 口
 C 渡海 秋石 宇山 和清 關
 IIB IB CF RF LF IIB SS P

一中が攻め出して一回に辻がこつちのミスでホームイン。二回に藤岡が小泉のバントで、ましまと亦一点せしめる。こちらでは、初めに渡邊がコーンとやつたかと思ふと見事なセーフヒット、秋元がコーンとあてたかと思ふと見事なセーフヒット。おしい事には二つともあたり花の咲かせ損。二回は宇尾山田和智がそろつて三度振の御愛嬌をやる。三回目に一中方は西村が齋田のバントで亦一点入る。而してこち亦零。見に来て居る連中は「いくら未成品の撰手だと言つたて、高が中學との試合に之では心細い」とこぼして居る。四回目には、さういつ迄もいくら人がよくつたつて一点一点亦一点と差上げるわけにはいかないよと、山萩は小粒でもヒッとするつて石渡が船木にゴロをぶつつけて出かけ、どしどし遠慮なしのストロルンベースでホームへ入る、續いて大きな宇尾が亦ホームへ操込み一寸二点失敬する。五回目に小泉が和智の投球のミスでIBを占めると、すぐIBへ行く遂に一点やつつけた。こちらも此邊でと關口がコーンと火の出る様なやつをIIBSSの間へたくさつて悠々出て行く。渡邊がバントで關口をIIBへ送り込む。海部は打つて無事IBへ安着したが關口を船木に殺したのは不覺であつた。秋元が大にやつつけて渡邊が入る。次に石渡が目の玉の飛び出しをうなやつをSSへ進上して、平佐が面喰つて居る間に、海部と秋元が一点づつ失敬する、これでやつと差引勘定が出来て向ふが四で、こつちが五。六回七回は双方共平穩無事で内野だけ、さつさと片が付く。八回に中學の西村が出かけたが、おしい事に海部のすそ腕の爲すべり込もユニホームのよごし損。こちらも振はない事夥しいもので舊狀維持と言つた様な次第ですむ。九回は和智の當り年で、殺すは殺すは、

取つては投げ、取つては投げ、藤村も船木もみんなIB大往生を遂げてしまつた。之で終になつて結果は向ふが四で此方が五プラスXである。而して審判をしたのは谷君。

十月二日(水曜) 夜桂月で野球部の會合を開く。集る者凡そ二十名ばかりで、必要品買入の件、撰手練習時間の件などを相談し、菓子を食べひ快談して散會した。(練習時間日土の外三時より四時迄。

十月三日(木曜) 三時より四時迄熱心な練習をした。

十月四日(金曜) 同上。

十月八日(火曜) 撰手の練習後、今學年第一回のクラスマッチが英法、一年乙組と三部二年との間に行はれた。結果三部二年の勝となつた。

十月十日(木曜) 撰手の練習があつたが、翌日英一に書取があるとかで欠員が随分あつた。

十月十一日(金曜) 撰手の練習後、獨法二年、對英法一年乙組の試合があつて獨法二年の勝となつた。

十月十二日(土曜) 石川、一中が来て、試合をした。前の時とは出場者が大變に更つて居る。

中	村泉田	川村木佐田
一	藤小齋	小西船平菊
C	P	IIB
IB	IB	CF
IB	IB	RF
IIB	SS	IIB
SS	CF	SS
CF	RF	LF
RF	O	
O	P	

右の中藤崎は町田の代りに突然出たので、其他と雖も盡くが確定した撰手ではない。而し前の時よりは多少精撰の結果である。

此試合は甚だ不愉快の試合であつた。甚だ馬鹿馬鹿しい試合であつた。たいした試合でもないのに、いやに規則を振まわし、野球試合には

殆ど絶對の權利あるべき審判官に、何とか、か
とか言ふて來るには驚かざるを得ない。吾人は
高等學校たるの故を以て、一も二もなく中學校

十月十四日(月曜) 撰手の練習後、二部二年
對一部一年の試合があつた結果二部二年の勝と
なる。

を輕蔑する者ではないが、一步上の學校たる事
は事實である。我が野球部は時に盛衰ありと雖
も、中學校野球部に非して、永遠に高等學校野

十月十五日(火曜) 例により撰手の練習があ
つた。

球部である。當日の試合に於ける一中の体度は
果して之を認められた試合と言ひ得る事が出來るで
あろうか。吾人は不幸否と言はざるを得ない。

十月十六日(水曜) 新撰手對何と言はうか、
元老組と言ふても誤弊があるが兎に角撰手以外
の老練家を集めて試合をする。即

即此不遜な体度を一中の爲に憐むのである。

試合は本校方が先に打つて三回半迄やつて雨

(新撰手) 部口元七本智野渡田
撰手 海關秋邊三和清石飯
P C SS IB IIB IIB RF CF LF

で中止した。それ迄の経過は一中が打撃度数が
十一で三度振が六。こちが打撃度数が二十で三
度振が三。得点は向ふが二で、こちが六。之
だけで、大よそ雨が降らなかつたらどうなるか
は分り切つて居る。當日審判の勞をとつたのは醫
專の金子本校の谷の兩氏であつた。

谷 林崎破本本崎二尾
小藤不稻山矢邊宇
P C SS IB IIB IIB RF CF LF

結果新撰手組の勝となる。
夜桂月で野球部の小會を開いて、冬期休暇中
に於ける撰手練習の件に關し相談した。撰手の

住所其他の關係上東京と決定した。

十月十八日(金曜) 撰手の練習がある。

なやつをIIBのベースの上へビニーと飛ばした。
實に癡飲が下ると言ふなわ、この球の事だ。し

十月二十六日(土曜) 高岡中學が來て試合をす
る。

(中) 倉岐元上林野倉
岡高土安村宮島宇木岫
IIB SS IIB C IB CE RF LF P

(本校) 邊渡破智本元口部
渡石不和谷三秋關海
IB CF RF IIB LF IIB SS C P

審判をしたのは高中出身の松村君と本校の藤

がIIBの後へ安全球不破がSSの後へ安全球、和智

崎君とである。初めにこちらが攻め方で、四球
を頂戴して渡邊が行く、不破が岫君の面喰つて
居るうちに出發する、谷が四球で亦出立する。

なセーフヒット。どうして之が面喰はずに居られ
様宇野の足に突あつて球は見物の後へ飛び出
すと云ふ仕末、之で石渡と和智が前發に一点づ

どうフルベースとなつた。前に石渡と和智
がやられて居るのでツーアウトのフルベースと
言ふ甚だきわどい所だ。所で三本が鉄砲玉の様

居るのをつけこんでカーンと擲猛なやつでも
抜いたので宇野が一点入た。そこで向ふが一、

こちらが四、四回目は双方共内野手のお手柄で
 すんでしまふ。五回、六回、七回、八回、こちら
 は打たんのではないが、ケチなのばかり、どう
 くも入らなかつた。高中方は五回に木倉の打
 つたSSヤーバーの安全球で宮林が一点入る。六
 回に村上がIIBへ素的なゴロを打つ和智が少々面
 喰つたのでまんまとIBを取つたが、IIBの突進で
 三本にやられる、宮林が見事な安全球で出て行
 つたが之もIIBの突進でやられた。後の方で「三
 本はうまい」と言ふ、又誰か「いや關口のお
 手柄だ」と言ふ。吾輩はOとIIB双方のお手柄だと
 思ふ。七回に和智の肩がヘコタレて居たので宇
 野がIBに無事に生きやつとIIB迄来た時木倉が三
 度振をする、關口はすかさずIBで木倉を葬たが
 渡邊のミスで宇野をホームへ入れる。八回に安
 元がホームインして遂に兩方四と四になる。九
 回目は最後だから大にふん張らざるを得ない、
 關口は死んだが海部が入る。彌次連が大にさわ
 いで居るうちに石渡が打つ、不破が打つ、結局
 石渡が入つたので二点失敬した事となる。向ふ
 も一生懸命岫がCFのすきをねらつて味いやつを
 飛ばしたが、あとの高倉も土岐もゴロと言ふなさ
 けないやつを打つたので皆海部のお手柄となつ
 て一点も入らなかつた。即四と六でこちら
 の勝となつたが去年高中が来た時は十三と四、一
 昨年来た時は十七と四と言ふ結果でこちらが勝
 つて居るのだから少し振ってもらひたかつた。
 此日一中の生徒が四高へ肩を持つて彌次つた事
 の非常であつた事を一寸記して置く。
 當夜我が部は高岡中學の野球撰手を招いて環
 翠亭で小會を開いた。
 十月二十八日(月曜) 撰手の練習をする。
 十月二十九日(火曜) 同上。
 十月三十日(水曜) 同上。
 十月三十一日(木曜) 同上。(加藤記)

附 録

白馬登山記
 風月集

附 録

白馬登山記

和井 景生

四五年前より高山植物採集地として亦氷河の遺跡等で、植物學者、地質學者のみならず一般の人々にまで膾炙せらるゝ様になつた、夫の信州の白馬岳を今夏歸省中に、登山したので、當時の日記に、其れに關する書籍を參考して、市村先生の御懇篤なる校閲を経て、貴重なる餘白をけがすことゝした、然し記者の疎暴なる觀察と、拙劣なる秃筆が、この名山の萬分の一も、ゑがき出せないのを恐れるのである。

我帝國の脊梁をなして居る、信飛境上の大山脈は、處々に、槍ヶ嶽、乗鞍岳、常念ヶ岳等一萬尺以上の高山、大嶽が天を摩して聳む、所謂日本アルプスをなして居る、其脚が有名な不知親の

嶮をなして日本海に没する前に、一度隆起して、信越の境に數座の峻嶺が聳えて居る、白馬岳とはこれが盟主で、直立一萬有余尺と號し雪消の聲は白駒の天空を奔けるが様で、又越中方面から夕陽を向けた際には大蓮華の紅花が中天に咲ける様であるとして、信州では白馬岳、越中では大蓮華と稱せられて居る、近時山容の雄偉なる許りでなく、諸方面より人の注意をひくのは事實である。

この白馬に登るには路が四つある(一)信州北安曇郡小谷より蓮華温泉を経て、(二)同郡北城村より、(三)越中方面より、(四)北城村より鐘ヶ岳の裏面を迂回して、の四路で第二のものが最も容易である、偕てこの北城村に達するには東京方面なれば中央東線の明科に下車すれば、こゝより北城村の四ツ屋まで約十五里の間は馬車の便もある、又長野からは、山越十二里許で、越后方面の糸魚川なれば十五六里はある、偕て記者の豫定の行動なるものは次の様である。
第一日(八月五日)四ツ屋より白馬の頂上まで、

第二日(八月六日)白馬より鏈ヶ岳附近の植物採集、

第三日(八月七日)白馬頂上より蓮華の湯まで、

第四日(八月八日)蓮華の湯より四ツ屋まで。

五日午前五時半頃起床して裏庭に面洗がてら出て見れば、西方に瞳々たる朝暈に映して白駒の天空に奔けるが様に白馬山が群山を睨みて聳えておる、これが今日登山するのであると思へば其雄偉なる山容に恐れざるを得ない、暫時恍惚して居つたが、「案内人が参りました」と云ふので室に歸つて、服装をかためた、六時半四ツ屋の余と云ふ旅舎を立てて細野村と云ふ村を過ぎ、白馬の裾野に出た、こゝは俗稱「上原」と云ふのか、随分廣い平坦な原野で、キキヤウ、フミナヘシ、カルカヤ、ミヤコグサ、ヤナギラン、マツムシ草等紅紫黄白相亂れて居る、道を急いで二股に至る此處は鏈ヶ岳より出る南股と白馬より出づる北股の溪水の合流地である、こゝから松川となり、頓て平川と合して姫川となる、其水を一掬すれば手もこぼるばかりである、危橋を渡れ

ば白馬の喬木帯で太古より又斧鋏を入れないとでも云ひたい位、カンバ、イタヤ、カヤノキ、サワラ、ツガゴヨウ、カツラ等、昼猶暗しと茂げつて居る道は北股の溪流に沿つて口元の瀧の澤奥の瀧の澤、段原等を過ぎると、爪先あがりとなる、昔は沼をなしておったとか云ふ沼地に出た此の附近には有名な戸隠升麻シヨウマが澤山あるアザミヨモギ、ハンゴン草(八尺五寸)サラシナ升麻(一丈五尺)等が竹林の様に繁茂して居る、其間にはタマガハホト、ギス、タケシマラン、オニノヤガラ、ジャコウソウ等が美しく咲き香ふて居る、猿倉に十時半頃着いた、昔し獵師が野宿したと云ふ大岩がある、これから道は、又川の右岸に出るが、水は膏碧を凝らし或は奔湍、雪花を飛ばして、鬱々たる森林に惱む、登山者をして、快哉をさげしめる、猶喬木帯の中を進むと、ウバユリ、ミツバセウ、ヤグルマ草、キヌガサ草等の高地性植物は非常な繁殖をなして居る、長走ナガシロ澤、逐上ヶ澤ツクカゼ、ウシロ澤を過ぐれば、全く喬木帯を脱して、シモツケ草、ナツユキ草等繁殖して、

ベニバナイチゴは物云ひたげに打笑むて居る絶壁にからんで居る唐糸草は未だ開花して居らなかつたが、開花の節に紅穂が風にゆらぐ有様は、筆紙に盡せぬ、美觀を呈するところである、かく草花の美を稱しつゝ前進すると、突然一、

二月頃の様な冷風に襲はれた、頭を擡げて見れば、白馬の東に面せる、一大豁谷は、萬古不滅の白雪に埋れて、この金をも盪す三伏の候に皓々皚々として天下の偉觀を存して居る、實に天下の絶觀である、懸下數十町兩山相感る所の幅員廣きは二百間、狭きも五六十間を下るまい、激流奔湍の奇觀を極めて、登山者たのしみしめた、北股川は滔々として氷下を迸出して居る、雪上より来る、冷風は凜冽として、身に粟を生せしめる、眼に觸るゝ草木、耳に聴く鳥語は已に全く人界のものではなくこれが有名な白馬尻であると、案内者は説明をした、登山者もこゝに至れば、全く人圈を脱したのである。

頓て北股川に架せる、丸木橋を端々焉として渡つた、雪谿に近い見れば厚さは優に一丈三四

尺はある、表面は波状を呈して、雲霧は常に其上を徂徠して、葱平の蘚綠遙かに吾人を迎ふが如く見え、杓子の峻峰は左に巨人の如く聳えて居る、

正午少し過ぎに、白馬尻の鑛場に達した、鑛場とて、四五年前から、銅鉛が出ると云ふので、目下試堀中で假小屋が四五軒見わた許りだ、雪の爲め半年は採堀中止だそうだが中々有望である、

第二の渡良世川を、現出しはしまいかと杞憂を抱く人もあつた、一鑛夫の説によれば、白馬登山の困難は道路の峻なるが爲でなく、全く風雨を凌ぐ設備が不完全であるからであると、實に首肯すべき言で、其山路の如きは多くの高山中登攀最も容易なるもので、他の山なれば、胸突きとか、鬚剃りとか峻岨を極むべき、七八谷目の大部分は前述の大殘雪で谷を埋めて居る故登山者は雪上を渡つて存外容易に登ることを得るのである、然し快晴の日は斯の如く容易で、これ程愉快な山は他にはあるまいと感ずるが、風雨に遭遇したならば、普通の登山者には一歩も

雪谿を歩むを得ず、殊に山中風雨を防ぐ設備がないから、こんな困難な山は二つとあるまいと恐れるのである、かくて二時間余、休憩せる後案内人を勵げまして再び登山を繼續した、此度は、夏シャツを毛系のシャツと更衣して、小屋の外に出づれば、先程峯にあつた雲は四圍を取圍んで、今にも降り出しをうである、この位なれば葱平まで大丈夫との、礦夫や案内人の證言によつて出發した、榛の下に穂状花の黄紫色をなせる肉蓯蓉(即キムラタケ)等を求め、クルマユリの鱗莖を掘り採集胸亂にはヒメウメバチ草ツルニンジン、ミヤマカタバミ、サンカイヨウ、唐糸草、キヌガサ草、オホサクラ草、キキヨウカノコ、アラシグサ、タテヤマウソボ、チシマリンドウ、ミヤマクワガタ、ヒメクワガタ、キバナノカワラマツバ等を入れて愈々雪谿渡りに取りかゝつた、……

なるだけが取所である、雪谿の左右は崖峭巖窟で其上には蒼翠掬すべき榛の木等が頭をたれて居る、時々密雨の襲來はあつたが二時間許りて葱平の一角に到着した、こゝに暫時休憩して再び歩を運んだ葱平と云つても平坦ではなく、非常に急峻な坂路で、美しい草花が一面に咲き亂れて居る、こゝには採集すべきものが多くあるので足は中々捗らない、採集した主なるものをあげれば。

シロウマアサツキ、ハゴロモサウ、タテヤマキンバイ、ムシトリスミレ、クロユリ、キンバイサウ、ナンキンコザクラ、イハイテフ、タカネツメクサ、ウルップサウ、チシマギキヨウ、ユキワリサウ、アヲノツガザクラ、ツガザクラ、コメバツガザクラ、イハウメ、シマタンサウ、オヤマノエンドウ、ツリモグサ、ミヤマリンドウ、タカネリンドウ、ウラジロナ、カマド、タテヤマウソボ。

これ等が美しく咲き飾る、天然の花園を、露を拂ひ草を分けて進むのは愉快で日の傾むくを忘

れた、半時間許りで前のものより、傾斜の急な恐らく四十五度は大丈夫と思はるゝ残雪に出遇ふた、この所で、雪消の場所から水色蠟石があるのを見付けた、漸く五時半頃葱平の小屋に着いて、今日は天気も氣に懸るので、に宿泊すること、し旅装を解いた、小屋は處々にある大石を利用して、これを兩面にして凹みに作つた石室である、こゝは既に海拔二千八百米で、温度が攝氏で十二度から二十度の間で、廣さは一間四方内には、名ばかりの爐があつて入口を除いて三方は藁を敷きつめてある、偃松を燃しながら採集した植物を壓搾して、夕食には、こゝ特産の白馬アサツキの牛鍋と洒落れた、斯くて火を燃し、衣を厚うして眠りに就いたのは九時頃であつた。

翌朝は早起、即ち第二日、八月六日である、日の出を拜する筈であつたが雲霧の爲め果さなかつた、然し五時半頃、僕は單身、雷鳥を捕獲する目的で用意の空氣銃を手にして、峯に向つた、岩陰に雛を養ふ一羽の雷鳥を見付けて、案内人

から聞いた様に三間許り近いて發射した、手筈ひはあつたが敵は逸して、二三間かなたに飛んだ、銃を投げ出して、迎へがてら應援に來た同行者と共に手頃の石を取つて二三回試みる中に一つは見事成功して額から出血して倒れた、雷鳥の隼形は鳩より大きく、雉、鶉に似てエゾヤマドリに最も似て居る、眼の上に小さい朱色の肉冠があつて、脚は短く太く搔撥に適して羽毛は季節になつて脱け更るので、冬雪のある頃は雪白で、夏には淡き褐色の地に、淡灰黒の斑がある様になるもので、今捕へたのは勿論後者の色を呈して居つた、性質は保護色を持つて居るに拘らず、日中晴天の時は中々出てあるかぬ、朝夕薄明の時、或は霧の多い時に出て、食物をあさる、これは鷹を恐るゝからだらうと思はれる、然し人の害を受けた事の經驗が少ないから、人を恐れず二三間近づいても少しも逃げない、鳴き聲は蛙のそれによく似て居る。

石室に歸つて朝餉を濟して今日の行程に取りかゝつた、昨日の續きの残雪を、危くも二度ま

でころげかゝつて渡つて立壁の小屋のある平地に出た、此處は廣い緑野で黄紫、紅、白、參差相交つて、研を競ひ、艶を争つて天然の花園をなして居る、其黄なるはキバナノコマノツメ、紫なるはチシマリンドウ、紅なるはナンキンヨザクラ、白なるは銀梅草で、突兀たる巖岩には可憐なるコマクサが咲き香ひ、越の立山劍ヶ峯の晴巒は千古の雪を戴きて前面に聳ておる、暫時休憩の後、杓子岳の裏面を過ぎて鍵ヶ岳の裏に達した、道は偃松の間に僅に作られたものでこの間に採集せる主なるものは。

イワウメ、クモマグサ、ツクモグサ、シコタ
ンサウ、チシマアマナ、イハベンケイ、コイ
ハカバミ、イハワウギ、ウルップシホガマ、
イブキジャフウサウ、タカネツメクサ、イハ
オトギリサウ、ミヤマキンバイ、リンネサウ、
コマグサ、キンスゲ、コタヌキラン、チシマ
リンドウ、ミヤマリンドウ、ムカゴユキノシ
タ、キバナノコマノツメ、ガシマウラン、イ
ワブスマ。

鍵ヶ岳の北腹に至ると、數條の谿谷には殘雪夥く、峯は偃松を蒙り、兩崖の廣き傾斜地には、千紫萬紅芬芳馥郁として高山植物がある、こゝが通常鍵ヶ岳の御花畑と云はるゝとか、時に天麗かに氣は澄んで居るので、一行は此の仙寰に安臥して一時間を過した、こゝで又雷鳥一羽と其雛一羽を得た、頓て高山植物の寶庫と云はるゝこゝの採集を初めたが採集品種饒多で見盡くとも盡せぬ位であつた。

キングルマ、チングルマ、トリカブト、ミヤマオダマキ、シラネニンジン、キリンサウ、イブキトラノオ、ミヤマシホガマ、ユキワリシホガマ、シナノキンバイ、ヘビノシタ、ヂムカデ、ヤリガタケナツナ、ミヤマタ、ラビ、ウラジロキンポウゲ、ミヤマハタザオ、シユタン草、

等いづれも稀品である、峯に達した頃には、今迄の晴天が曇天となつて、白馬、杓子の峯は霧につつまれて四方濛々として、雨さへ降り出して雷鳴まで威嚇し初めた、案内人は今夜の宿泊

の準備があるので前程歸して今は僕等兩人きりで、濃霧は四方を圍んで僅か數間の外をすら見るを得ない、鍵ヶ岳の名に背かず、其頂上は頗る急峻で東側を俯瞰すれば數百丈の危岩が、脚下に斷壁をなし、千仞の底には白雲が濛々と湧き不覺戰慄せしめる、西側も同様で、やむを得ず逆もどりをして、杓子岳の山腹に付けられた道を一直線にぬけて其東側まで進んだ時に降る雨益々繁く、高山特有の強風は横雜に吾人を攻めて、視界は益々狭く、遂に道を失ふた、目標となるべき白馬も姿を隠し、霧の絶間に見ゆるは、そここゝに現れたる數條の殘雪ばかりである、こゝに於て一点の不安は胸中に湧きだした、強雨は耳をかすめ、目を蔽ふて語合ふことすら不可能であつた、が、斃るゝまでと勇と鼓して濃霧中に暫時彷徨して、偃松の繁く生じた所に迷ふて偃松渡りの曲藝を演しつゝ、前進した、漸くの事で、駒草等が紅を点じて居る草原に足痕の自然に道を作つて居るのを發見して、暗夜に光明を得た思ひで、踴躍して辿つた、然し道とて

切れ／＼に草中に足痕を存する位で心細さの極みである、兎角して小石混りの地から急傾斜の坂路を上り、突兀として居る岩角を攀ぢて白馬の峰嶺に達した、暫時岩陰に雨宿をなして、峰の小屋を、搜したが一寸見えない、尾根傳へに二三町進むだ時には遂に大呼して、案内人を呼ばざるを得なかつた、呼ぶ聲に應ずる答は、昨夜宿泊した葱平の小屋より聞ゆる、それならば案内人は未だそこに居るのかと早合点して、早速巨岩の間を滑り下り、奇石を飛び越し道なき絶壁を一町許りを下つて、荆棘を排して半に到らんとするとき、又峰にて呼びもどすものがある、熟視すれば、供等の案内人が雨具を持參して、迎へに來たのである、又馬鹿を見たかと、疲るゝ足を引きづり迂回して案内人と會つた、聞けば下の小屋にも他の案内人が居つたのだぞうだ、これから爪先あがり三十町を雨の中に濡鼠の如くになつて小屋に六時頃着した、この小屋は昨夜の小屋の四倍位で參謀本部の測量部員が建てたもので、堅牢に出來て居る、丁度測量

の人足が二人居つて親切に、待遇して大に好都合で、眞中の大なる爐を利用して、天幕を蒲團として急造炬燵をしつらへ、早速衣服も乾す事を得た、夕食后壓搾などして八時頃には其炬燵で安らかに眠るを得た。

隙もる風に、ふと目をさませば、夜はなごりなく明けはなれて第三日の八月七日となつた、空はよく晴れて居る、腰をかかめて小屋の口を這ひ出で、楊子啣へて小屋の前なる水の湧き出る處に行けばちよろ／＼と連立てゝ流れ行く清き水の邊には、可憐なるムカゴユキノシタなどが生じてゐる、暫く頂上の朝の大觀を賞して來やうと二人で毛布に身をかため寫眞器を手にして出かけた、頂上はこゝから七八丁登つた所で一等三角測量臺が一基ある、眼を四方に放てば西南には近く立山の連脈と、遠く加州の白山とを望み、東北には戸隠、妙高、焼上の諸山が頭を雲海にもたげ、南には昨日辛き目に遇ふた鑪ヶ岳、杓子ヶ岳が視線を遮り、槍ヶ岳の鋭鋒が其間に見える、東南雲煙の間に、巍然として頭角を顯

はす者は富士で千山萬嶽がこれに向つて長揖して居る、西北方は直に洋々たる、日本海を瞰める、富山灣を隔て、能登半島が突出し、灣内に白帆の点々として居るまで看る事が出来る、吾も蠢々たる人間に生れて、何の幸福があつてこの宇宙の大觀を恣にするを得たかと、しばし杳然として佇ずんで居つたが、頓て小屋に歸つて朝食后は有名な氷河の遺蹟を見に出かけた。

氷河の遺蹟につき、最も明瞭なる痕蹟は、白馬岳の頂上より、時間で二十分許り信濃方面に下つた大残雪の兩崖に在る、箕形に大残雪がある、向つて右方の突出せる岩石中に緩勾配をなし、擦痕がある、長一間位から、二尺位まで幅は各一二尺で明瞭に付いて居る、硬砂岩と粘板岩との互層が雪の尽くる近邊にあるがその露出面には擦痕もあるし氷河流走の際に打ち缺けた個處もある、白馬山の絶頂の岩質は單純のものでなく、古生層を劈破せる花崗岩、安山岩、珍岩等の錯雜紛綜して居るものゝ様で、頂上では安山岩、砂岩、蛇紋岩を多く見た。

再び小屋に歸へつて二人の人足に別を告げて、今日の行程に進んだ、今朝程來た頂上に一休して峯傳へに鉢ヶ岳の方向を辿つたが、道は人跡いたらざる所として道らしき道もなく、岩角石片、稜々刃の如きを渡るので、草鞋、足袋を損する事夥しく、富士の砂走等の比ではない、一方信州の側は斷崖絶壁で千仞の底をなし岩燕が其間に翩翻として翔けるのが見える、石磊の所々には信州と越中との國境を示す杭がある、僕等は或は信州に入り、或は越中の領分に轉びつゝ前進した、元來白馬は二九三四米あつてこゝまで二二三丁は殆んど同じ高さで、こゝから下りとなつて東北に道は付いて居る、この下り際に又休憩して、洋々たる北海に告別をした、今見れば七尾通ひの漁船が一條の煤煙をのこして航走するのが見える、それから小蓮華の峰頭に憩ふた、こゝは海拔二五七〇米許りて、駒草、ミヤマリンドウの叢生して吾人の目を悞しめた、こゝの棒杭を見ると、越中、越後の分界としてある、一時間もたゞぬ間に僕等は三國に足を踏み入れた

わけだ、偃松偃檜の間を縫ふて下る、昨日より澤山採集したが、天女の遺せる簪の如く清楚優雅な、コマクサ、氣品の高きタカネスミレには足を止めざるを得ない、こゝでヨツバシホガマ、ミヤマアヅマギリ、ミヤマシホガマ等も採集した、近頃雪が消えたと思はれる残雪の端には、イタドリが芽が鮮淡の紅を呈して居り、雷鳥の偃松の間に鳴いて居るのも聞けた、さて正午頃まで灌木帯を滑りながら下つたが又天氣が變つて何時かは泣き出さんとする有様である、どうしたのか案内人を伴れて來たのに蓮華の湯に下る可き道を失ふた、漸くに前山に一條の道のありを認めて、それを標準として進んむ、途中夢暖かなる兎を驚かしたことは再三あつた、聞けば此の近所には猿、猪、熊なども居るとの話である、間もなく一残雪に出遇ひ、下方に安全な凹地のあるのを見て、早速着座を敷いて、スケートならぬ氷滑りをなして下つた、白馬尻あたりでは下山の際は櫓を用ふるやうである、この残雪の終る邊にはヤラシグサ、ハゴロモサウが

繁茂して居つた、この邊から溪流となつて岩より岩に水はかゝつて崩塊は磊々として、兩崖は愈々峻嶮で、或は左岸に飛び、或は右岸に移り、時に驚濤に股を濕し、脚を奪はれ様とし、時に荆棘に衣を牽かれ、手は傷き、砂は蹠下に入るなど非常な困難をして、二時間を費して目的の道に達することが出来た、これは鉢ヶ岳の鑛山で一間五圓宛を費して作つた道だと案内人が話した、これより一時間許りかの道を経て上巴の鑛山事務所に着いた、こゝは海拔六千二百尺あるとかで三棟の完全な建築物があるその一は大なる水車小屋であつた、今日下る道に三四ヶ所(白馬尻より少し上りたる所にもある)鑛坑を見たが銀、鉛、銅が出るとかで、輝鉛鑛が澤山積んであつた、事務員は丁度下山したとて、留守居より茶の接待を受け喫飯した、時に午後二時で尙蓮華の湯まで、三里もあると聞いて、そこへに出發した、乗鞍よりの溪流に沿ふて道はあるが、未だ處々に残雪が散在してある、休憩の際この下に入りて見れば、溪流其下を穿つて、雪の屋

根を造り、大小數多の雪柱が之れを支へて、宛然石灰洞中に於ける鐘乳石の觀がある、附近に薄紫の大きな花を着けたシラネアフリ、白瓣の透き通るばかりのサンカエフを見た、崖面にはミヤマデシコ、シモツケ、ミヤマリンドウ、マメグサが點綴して可憐であつた、途中往々白花石楠又數十間に互つてキヌガサ草の爛熳として咲き誇るに接した。

五時頃蓮華温泉の湯に達した、徑約一町餘の地面は、灰白泥状をなし、熱泉所々に滾沸して、白氣濛々として騰つて硫氣は面を搏つて久しく佇立するを得ない、温泉宿はこれより一町許り下で、湯本、千國榮吉方に草鞋を解いたのは五時二十分であつた、温泉宿は唯一戸で、屋外に浴場三棟を設け、黄金の湯、總湯、三國一湯など名付けてある、此地は海拔五千尺とて位置は可なり高いけれど眼界せまく、東は禿げたる丘陵を負つて、西は谷を隔て、雪倉等の峰々が峙ち、夕陽が之れを射て一種の褐紫色を呈し、谿間鶯鳴を聞くこと頻りて山上の浴客を慰める

浴客は僅に二十人許りであつた、我等の室は、湯本本舎第一の客室であつたが、猶疊がなく、外圍は兩板ばかりで、室内は赤く錆びた掛け釘が亂点して、傾きかゝつておる棚板は、此所に物載すること無用と言はぬばかりに黒く煤けておる、御丁寧の事には室の隅には爐が切つてあつて、自在鍵がさがつてゐる、三日間の疲勞を湯に流して十時には、就寢した。

翌朝は第四日の八月八日で五時起床して六時にはこゝを出發した、森々たる喬木帯を鞍落の原に出で、登山の際上原から、白馬尻までの様な處で、其日の午後五時には又四ッ屋の余に着いた。

此の稿を草するに當り、同行者なる長野の知人八木貞助氏より有益なる數多の材料を供せられしをこゝに深く謝します。

風 月 集

山 下 嵐 山

一 鐘 釣 温 泉 の 夕

鐘釣温泉は黒部の流水岩をかむのほゞりにあり。浴場には屋根なく浴して雲烟の徂徠を見るべし。兩岸は千丈の絶壁屹立す。而して川身の屈曲甚しく、上流を望めば高嶽近く面に迫りて流水の來る所を知らず。下流は又峻峰流を呑みて水の去る所を知らず。温泉は四方の高岳より成れる盆地の底にあり。仰げば僅かに楕圓形に畫せられたる天の一部分を見るべし。我れ日暮温泉の樓上を下りて河岸に立てり。殘照は尙ほ微紅を峯頂にとゞむれども、暮色蒼然として江上にわけり。衣を解きて靈泉に浴す。快いふべからず。忽ち見る泉底に白光の皎々たるものあり。圓となり楕圓となり泉中に浮動す。仰けば殘照全く消えて、涼月一痕いつしか天にさやかなり。我れ此景に對して言なし。水を掬すれば月手にあり。こぼれて落つる滴露又月を宿す。落ちて銀玉泉上に亂る。我れ月と戯れ、月我れと遊ぶ。萬仞絶壁のもと、山水共に蒼々として、吾れ我を忘るゝと多時。

二 雨の祖母谷

鐘釣温泉をいで、川を遡る。岩の怪水の奇はい
はずもがな。溪谷の幽邃奇峭天下に多く比な
るべし。如何なる世の功名兒も一度此處に入ら
ば忽ち自然の子と化して、身は雲と軽く心は水
と淡からむ。かくて程なく祖母谷温泉に達す。
此の日朝より雲行き怪しかりしが三四時頃より
涼しさ極つて却つて寒さを覺えぬ。欄によりて
眺むる黒部川の水、いつしか濁りし様なるは山
奥は己に降れるなるべし。かくて見るく濁浪
岩に狂ひ、冷風颯と吹くよと見えしが彼岸の重
峰早や朦朧となりしは山雨此處へも襲ひ來りし
なるべし。かくて墨繪の如き光景の裡に日は蒼
蒼として暮れぬ。温泉の樓上寂として聲なく、
獨り孤燈に對し沈思す。四方の障子を密閉し、
火鉢を擁するも尚ほ寒く覺えぬ。やがて寢につ
く頃戸あけて空見上ぐれば、雨いつしかやみて
月は雲間に隱見し、天地の間に萬籟絶えて、流
水の音獨り高く、深谷の夜は寂然として更け行
く。

三 山田温泉の夜

夜、樓前の橋上に立つ。十日許の朗月天にかゝ
り、空色水の如く、山影墨の如し。山谷の夜は
漸く更けて、清涼掬すべく、脚下の溪水は金玉
を碎きて聲あり。涼風衣を吹いて、去つて、山
林に清響生ず。

四 溪谷の夕立

輪奐宏壯なる瑞泉寺の大刹を井波町に見て、大
牧へと急ぎしは午後二時、太陽頭上に直射し、
熱氣地よりわき、炎暑甚しく、加ふるに路山に
かゝりて苦堪ふべからず。しばし山側を流下
せる清泉に渴を醫しつゝ遂に一飛橋に達す。此
處は井波と大牧との中間何れよりも一里半な
り。橋を渡り少し登れば小屋あり、茶を呑みて
休息す。山上より吹きおろし來る風の水氣を含
みて冷かなるに、思はず空見あぐれば黒雲いつ
しか一天に滿ち渡れり。途中にて降られては難
義なりと急ぎいで立つ。四方俄かに暗くなりて
今にも日が暮れさうなるに、ひたすら道を急ぐ
程しあらず、忽ち左方に當り大岩の碎け落ち

たる如く轟然として山鳴りぬ。是れ近く雷鳴の
起りしなり。雷の鳴ると共に、大粒の雨ばらばら
と笠を叩きぬ。右方は斷崖千丈、庄川の流れ遙
か脚下に長蛇を走らす。左方は見あぐる峻峯我
が体の左側に觸るゝばかりにそゝり立ちて、巾
一尺許の路其の間に通す、而して雨水は早や川
の如く路上を流る。路の傾斜急なるため体は前
方に屈し、笠は体を蔽ふに足らず。体の下半部
はぶぶぬれなり。されども我が意氣は之がため
に屈するものにあらず。見よ、天地晦冥の裡、
遠山は烟どうすれ、近山は夢と浮び、雲烟濛々
として、身は天を行くが如く、足は空を歩むが
如く、天地創造の時もかくやと思はる。更に眼
を据えて凝視すれば怪しむべし谷底に物あり。
ほの青さ色を有し宛々として横はる。是れ即ち
庄川なり。萬丈の下にあるが如く無きが如く思
はる。嗚呼人生かゝる痛快の景に接する幾度ぞ。
進みに進みて坂一つ越せば雨俄かに晴れぬ。驚
いて路上を見れば些の水氣だになし。想ふに此
のあたりは夕立が過ぎざりしならむ。かくて遂

に大牧温泉に達しぬ。一浴して身心頓に清涼を
覺え、樓に上りて川に俯し、山に對す。豪壯の
氣勃然として全身にあふれ、我れ獨り欣然たり。
(五) 立山々上の風雨
我れ杖を立てて立岳の頂上にあり。此の時濃霧
甚しく、南の風荒れに荒れて怒號天地に渡り、
宇宙黯然として、萬象に形骸なし。吾れ天にあ
りや、地にありや。颯風は我が小軀を巻いて天
外に去らむとし、暗雲天目を封して、世は長へ
に夜ならむとするに似たり。吾人は想ひぬ。天
理の玄奧眞に恐るべしと。而して更に想ひぬ。
我が地球上幾億の人間の猛惡なる精神現象を抽
き集めて、之を天地の間に浮遊せしめば正に斯
くの如くなるべしと。

明治二十九年年度北辰會費決定計算書 △印ハ朱書

科目一區分	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘額
第一款 經常收入	一、二九二〇〇	一、二九三三〇	〇	〇	△二二〇
第一項 特別會員寄付	二五〇〇〇〇	二五〇〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 通常會員會費	一、〇一九五〇〇	一、〇一六〇〇〇	〇	〇	三五〇〇〇
第三項 預金利息	九〇〇〇	三、二五〇	〇	〇	△三、二五〇
第四項 春季運動會乘艇申込料	二、二六〇〇	三、七〇〇	〇	〇	八、九〇〇
收入合計	一、二九二、〇〇〇	一、二九三、三三〇	〇	〇	△二二〇
第一款 經常支出	一、二四八、〇九〇	一、一五〇、九四八	二、二六五三	七、五九三	一一、二〇一
第一項 講話部費	九一〇〇	七、四八三	〇	〇	二、四一五
第二項 演說討論部費	三五〇〇	〇、七三四	〇	〇	〇、二六六
第三項 語學部費	一〇、五〇〇	一〇、六九二	〇	〇	〇
第四項 雜誌部費	三、九八四〇	三、五三三五	〇	〇	三、六〇四
第五項 弓術部費	三、〇〇〇	三、〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 劍道部費	七、四五五〇	七、四五〇四	〇	〇	〇
第七項 柔道部費	八、三七五〇	八、〇六五一	〇	〇	〇
第八項 ベースボール部費	七、四六〇〇	八、〇六八四	六、五〇〇	四、〇〇〇	〇、四六六
第九項 ロンテニス部費	一〇、二一九〇	一〇、九四九	〇	〇	〇、三四一
第十項 フリートボール部費	三、〇〇〇	一、七八〇	〇	〇	一、二二〇
支出合計	一、二四八、〇九〇	一、一五〇、九四八	二、二六五三	七、五九三	一一、二〇一

第十項 遠足部費	三、〇〇〇	二、九六七八	〇	〇	一、三三三
第十項 漕艇部費	一、一八九六〇	一、一六五二四	〇	〇	二、四三六
第十三項 春季運動會費	一〇、〇〇〇	一〇、九八一五	九、八一五	〇	〇
第十四項 秋季運動會費	一八、〇〇〇	一七、九八七四	四、二四五	〇	〇、二二六
第十五項 會務費	五、〇〇〇	九、二四五	〇	〇	〇
第二款 豫備費	六、五〇〇	〇	〇	一、四〇六〇	五、〇九五〇
第三款 端艇新造基金	六、六〇〇	〇	〇	〇	六、六〇〇
第四款 臨時支出	二、二〇〇	〇	〇	〇	二、二〇〇
支出合計	一、二九二、〇〇〇	一、一五〇、九四八	二、二六五三	七、五九三	一一、二〇一

三十九年艇庫改築費借入金償却豫算決定計算書

科目一區分	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘額
第一款 收入	九、八五〇	九、八五〇	〇	〇	〇
第一項 會金	九、八五〇	九、八五〇	〇	〇	〇
支					
第一款 支出	九、八五〇	九、八五〇	〇	〇	〇
第一項 借入金償却	九、八五〇	九、八五〇	〇	〇	〇
支出合計	九、八五〇	九、八五〇	〇	〇	〇

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず



明治四十年十二月二十二日印刷
明治四十年十二月二十五日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

